

MOTHER
AND CHILD
WELLBEING
AROUND THE WORLD

VOL.86|2019-10

世界の児童と母性

[特集] 「甘え」と社会的養護

特集 「甘え」と社会的養護

ひとこと / 編集委員長 早川 洋 …… 1

I. 総論—「甘え」とは何か

「甘え」とは何か

—「甘え」が消失する中、「甘える勇氣」を

……………国際医療福祉大学心理学科 教授 和田 秀 樹 …… 2

「甘え」を通して初めて浮かび上がるアンビヴァレントな心模様

……………西南学院大学大学院人間科学研究科 教授、感性教育臨床研究所代表 小林 隆 児 …… 7

「甘え」と社会的養護

……………北里大学大学院医療系研究科 教授 生 地 新 ……12

「甘え」の日米比較

—日本は多様性を認めた「開かれた甘え」へ

……………東京大学大学院教育学研究科 教授 恒 吉 僚 子 ……17

II. 現場での「甘え」とその対応

たくさん甘えていいんだよ！～わたしたち里親家族～

……………里親 坂本 洋子 ……22

児童養護施設における子どもの「甘え」とその対応

……………児童養護施設 和敬学園 臨床心理士 杉山 史 恵 ……26

善友乳児院における「甘え」対応と愛着形成

……………社会福祉法人 善友隣保館附属善友乳児院 院長 松尾みさき ……30

国立きぬ川学院における“共に育む”暮らしと“子どもの回復と成長への支援”

……………児童自立支援施設 国立きぬ川学院 院長 相澤 孝 予 ……35

大きな木の存在でありたい

……………バオバブ保育園 園長 中島 喜 伸 ……40

子どもが甘えられる場所をめざして

—母子生活支援施設での地域社会貢献事業実践から

……………玉川大学教育学部乳幼児発達学科 教授 渋谷 行 成 ……46

発達^{つまず}の躓きと甘え

……………医療法人社団 倭会 こころとそだちのクリニック むすびめ 院長 田中 康 雄 ……50

III. 国内外の動向

甘えのケイパビリティ

—大阪市西成区における母子訪問事業から

……………大阪大学人間科学研究科 教授 村 上 靖 彦 ……54

「甘え」は Love me! のサイン

—米国ソーシャルワーカーの視点から

……………海外出産・育児コンサルタント Nora Kohri ……60

編集後記 / 担当編集委員 岩田 美 香 ……65



ひとつこと

なぜ私たちは“甘えられなくなった”のか — 多文化共生時代の“甘える勇氣”



編集委員長 早川 洋

「甘え」は社会的養護の現場でしばしば耳にします。「思う存分甘えさせます」と言う人もいれば、「甘えを引き出さないようにしています」と言う人もおり、「甘え」は捉え方が異なりやすい言葉です。「甘え」という養育を豊かにできる言葉があるのに混乱が生じているのはもったいないと、今回「甘え」について特集しました。なお本号では、故・土居健郎の定義にこだわらず自由に書いてくださいと執筆者にお願いしました。アタッチメントの理解がボウルビイの時代から大きく進歩したように、「甘え」も現代的な理解を進めたいと考えたからです。

今号を読むと、執筆者みな「甘え」を肯定的に捉えており、乳幼児の甘えから虐待を受けた子の甘え、海外の甘えまで多様な甘えが描かれています。多様な人々が共生する現代で甘えが多様な有りようを示すことは、恒吉先生が指摘する「開かれた甘え」(P.20)に通じます。ただ、P.3で和田先生が、P.41で中島先生が、P.52で田中先生が「現代における甘えの困難さ」を指摘しています。なぜ私たちは“甘えられなくなった”のでしょうか？

それに対し中島先生は、『あたりまえ』を疑うことから始めた保育(P.41)という興味深い取り組みを行い、その結果[決め事が減る]→[子どもの自発的な行動が増える]→[子どもも保育士も解放される]→[甘えがポジティブなものになる]という変化が起きました。決まり事を守らせることに大人が腐心すると子どもとの関係が硬直化し、自然な甘えが失われ子どもの主体性を奪う。ノーラ先生も『甘え』はLove me!のサイン(P.60)と子どもの主体的な発信を重んじ、恒吉先生は多様な文化の中で自ら発信する「開かれた甘え」を、和田先生は「甘える勇氣」を提唱されています。現代における甘えの困難さは、多様な文化の中で自ら「甘え」を発信することがおろそかになっているためかもしれません。

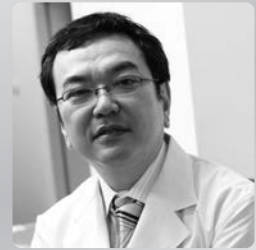
では、どのような「甘え」が健康的な甘えなのでしょう。私は「できることは自分でやる。できないことは人を頼る」が大切だと思います。できることまで人にやってもらうのは依存的ですが、できないことまで一人でやるのは無謀です。世界で活躍している方々も、多くの方々に甘えて力を磨き飛躍しました。若者を大きく育てるにはたくさんの支え、つまり大きな「甘え」が必要です。しかし自ら努力をしなければ、周囲は助けしてくれないでしょう。「天は自ら助くる者を助く」—つまり「自分でできることは一生懸命頑張り、できないことは自然に甘える」のが健康的な甘えではないでしょうか。

83号より編集委員長を務めてまいりましたが、本号で任期満了となりました。87号からは都留和光が新編集委員長に就任します。87号は「関係形成が困難な親とその子どもの支援(仮)」と題して特集します。ご期待ください。

I 総論—「甘え」とは何か

「甘え」とは何か

—「甘え」が消失する中、「甘える勇氣」を



国際医療福祉大学心理学科 教授 わだ ひで き 和田秀樹

「甘え」と土居健郎先生

「甘え」とは何かを考える際に、まず言及しなければならないのは、土居健郎先生だろう(本来、この手の文章では「先生」の称号は不要かもしれないが、私の師—人生の師と言ってよい—にあたる人なのでご寛恕願いたい)。

土居先生は、日本を代表する精神医学者、精神分析学者であるが、ともすればフロイト研究や無意識の探索に流されがちな精神分析の世界に身を置きながら、日本において可能な精神分析的治療を模索し続けた。

その中で、行き当たったテーマが「甘え」であり、後半生をこの「甘え」の研究にささげたとっても過言ではない。

1971年に発行された『甘えの構造』⁽¹⁾は、精神分析家を書いた著書の中で初めてミリオンセラーとなったもので、精神分析的な考え方を日本人に身近にした金字塔的な著作である。

さて、土居先生自身は、「甘え」ということばが日常語であり、日本人にはこの語彙が共有されており、しかもこれはある種包括的な概念であるという考えを持たれており、『「甘え」の構造』を初めとする主著には、「甘え」の明確な定義は書かれていない。実際、「まずのべておきたいことは、私は『甘え』が曖昧でも一向に困らないということである。すなわちいろいろな意味合いを含めかつその全体に

通じる何ものかをさすものとして『甘え』を一つの概念として使うことに何ら支障があるとは思わない」^(2, 68頁)と明言もしている。

また、本来「甘え」という心理自体が非言語的なものでもあるので(つまり、子どもは「ボクは甘えたいんだ」と言わない⁽³⁾)、言語的な定義は難しいと先生は考えていたようだ。

ただし、土居先生も英文の論文の中では、海外の人にもわかるようにと、この「甘え」ということばの定義を試みている。先生が行った定義のうちに、英語圏における「甘え」理論研究の第一人者であるフランク・ジョンソン カリフォルニア大学精神医学科名誉教授が、自らの手による甘え理論の包括的研究書『Dependency and Japanese Socialization』(日本語訳の題は『「甘え」と依存』)の中で選んだ定義は以下のものである⁽⁴⁾。

「他の人の好意をあてにしたりそれに依存することのできる個人の能力および特権」^{(5) (6)}(訳は江口・五木田による)。

これは優れた定義であり、今でも私は大変気に入っていて、「甘え」の説明の際に必ず使うものだ。

「甘え」というのが能力であり、特権であることについては、若干の説明が必要だろう。

たとえば、宴会の席で、自分のビールのグラスが空になったとしよう。

「甘え」の能力のない人なら、他人の好意を素直

に期待することができない。「どうせ、みんな俺のことなんか無視している」と考えて、手酌を始めてしまう。この能力がある人なら、「みんな盛り上がり気味が付かないのだろうけど、待ってたらきっと注いでくれる」と悠長にしていられるわけだ。

さて、これが特権であるというのは、日本の文化の特徴と言っていいかもしれない。

「甘え」の能力がない人が手酌を始めたら、周囲の人間が気づかなかったことが悪いことになる。暑いときに、他人の家に遊びに行った際に、海外では「水をください」と言わないと出てこないのに、日本では出てくるのが当たり前になっている。気が利かない人のほうが非難される対象となる。要するに、日本人には「甘え」の特権があるのである。

さて、ここまでの話を聞いてわかるように、土居先生は「甘え」を否定的なものと考えていない。

むしろ、それは能力であり、その特権があるから周囲が、相手の非言語的なニーズを読み取ろうとするし、それによって人間関係が円滑になる。

実際、『「甘え」の構造』で、問題にされたのは、「すねる」「ふてくされる」「ひねくれる」「やけくそになる」「被害者意識」のような「甘えられない」ことで生じるさまざまな病理である。

確かに、精神科の臨床で出会う患者さんの多くは、甘えがひどい患者さんというより、素直に人に甘えられない患者さんだ。

「甘え」がなくなった日本

『理念と経営』という雑誌で、宗教学者の山折哲雄が面白い論考を載せていた⁽⁷⁾。

戦後の前半期に出版された当時の日本を象徴する二つのベストセラーがある。一つは中根千枝の『タテ社会の人間関係』⁽⁸⁾、もう一つは『「甘え」の構造』であると。

さて、『タテ社会の人間関係』のほうは相変わらず読まれているのに、『「甘え」の構造』のほうは、

2000年前後を境に読まれなくなった。この理由を土居先生自身が自己分析している。その結果、わかったのは、「最近(その当時ということだが)、甘えの構造が変化した」ということだった。

日本人にとっての二者関係というのは、「相手」あってのものだった。それが「他者」に変わってしまった。

目の前にいる「相手」を意識し、感じて、付き合っていたのに、そのイメージが消えて「他者」という抽象概念となってしまった。二者関係の基本が変わって「相手」との関係でなく、「他者」との関係、もしくは「断絶」と受け取られるようになった。

たとえば、災害の際にでも、「相手」というより、「他者」とのつながりをどうするかが問題になって「絆が大事だ」という抽象的なイメージが先行してしまう。

ここに人間関係が崩れる原因があるのではないかと土居先生の指摘に山折は着目している。

2007年に出された『「甘え」の構造』【増補普及版】の中で、自問自答の末、土居先生は、それはITの普及によるのではないかと結論付けている⁽⁹⁾。人間としての「相手」でなく、記号としての「相手」がIT社会によって拡大していったということだ。

これは10年以上前に書かれたものであることを考えるとまさに慧眼である。

少なくとも、筆者の実感とまさに一致している。

目の前にいるリアルな「相手」や「相方」に対してであれば、素のままの自分を出しても許される、「相手」は受け入れてくれるはずだと「甘える」ことができる。

ところが、ITの時代になると、「他者」がどう思うかに、常に気を遣う。

炎上を恐れて本音を出さず、「いいね」を求めて、誰もが賛同すると思われることを書き、「インスタ映え」を狙って、自分の生活風景を飾り立てる。

自分を受け入れてくれる「相手」でなく、イメー

ジの中の「他者」の意向に心が囚われてしまう。ここには甘える余地はない。

山折は、この論考の最後に、「甘え」が消失したのに、タテ社会の構造が依然として残っている（だから『タテ社会の人間関係』は今も売れている）のは、「ひどく生きにくい社会」だとまとめている。

ITに限らず、日本の不景気が長期化し、アメリカ型への「構造改革」が進められる中で「甘え」は断罪され続けてきた。

終身雇用や年功序列は「甘え」であると批判され、実際、実質廃止となった。若い頃安い給料で一生懸命働いていたら、企業が報いてくれるはずと考えるのは、現代社会では悪い「甘え」なのである。そして、企業もそれに報いず、大規模なリストラを断行した。そして企業間の「甘え」であるケイレツも切り捨てられた。

「困ったときはお互い様」の相互扶助の代表格である生活保護もバッシングの対象となっている。

さらに「人生百年構想」の美名のもとに一生働かないといけない社会が推奨される。

高齢者が増えているのに、福祉を充実させようというトリベラル（これが悪い意味になってしまっているのが異常なことなのだが）とレッテルを貼られ、選挙ではむしろ票を失う。

IT化に限らず、「甘え」が許されない社会は確実に日本では進展しているようだ。

コフート理論の台頭

日本では「甘え」は消失のほうに向かっているのだが、逆に自立志向の本場というべきアメリカでは、とくに精神分析学やマネジメント心理学の分野で、依存や相互依存の許容が重要視されるようになった。

前者は、現代アメリカ精神分析学でもっとも人気のあるコフート学派であり、後者は「心の知能指数」と目されるEQ理論などが代表的なものであるが、

ここでは、筆者が長年研究対象としてきたコフート理論と「甘え」理論の類似性を紹介したい。

ハインツ・コフートの自己心理学は、アメリカ精神分析学界の主流派と言える勢いを得るが、一般の精神科医にも大きな影響を与えている。

1984年にUCLA医学部のストラウスらが、アメリカの精神科エキスパート138人のアンケートによって、1970年から80年に出された本の中で重要な本のランキングを発表した⁽¹⁰⁾。1位が『DSM-Ⅲ』、2位が『カプランとサドックの精神科の包括的教科書』というものであったが、全体の3位、単著の1位がコフートの『自己の分析』⁽¹¹⁾であり、8位が『自己の修復』であった。ここに、その影響力の大きさがよく示されている。ちなみにアーロン・ベックの『うつ病の認知療法』は10位だった。

当初のコフートはフロイト学派で否定的にみられていた自己愛の肯定的な側面を強調し、それを満たしてあげることの発達促進性を主張した。

しかし、その遺作『自己の治癒』では、「1971年（彼の自己愛パーソナリティ障害の治療者としての名声を決定づけた『自己の分析』の発行年）には結局、私はまだ新しいワインを古いボトルに注ごうとしていた。」^(12, 162頁)と論じ、新たな理論体系を構築していく。

これが自己心理学と呼ばれるものだ。

コフート自己心理学の特徴は次の二点に集約されるだろう⁽¹³⁾。

一つは、心理的依存の許容である。

前述の『自己の治癒』でこう述べている。

「心理領域での依存（共生）から独立（自律）へと向かう動きは（略）酸素に依存した生活から依存しない生活へと向かう動きと同様、望ましいというのはおろか、可能ですらない」^(12, 71頁)。

コフートは、70年代半ばから、自己愛転移を、自己対象転移（当初は自己一対象転移）と呼び変え、人間は、一生自己対象（心理的依存対象）が必要だ

と主張した。

たとえば、ウッディ・アレンのように50年以上も精神分析に通い続ける患者について、旧来の精神分析の考え方であれば、いつまでも治療者に依存するダメ患者と、いつまでも治療の終結ができないヘボ医者とみられることだろう。

しかし、コフト学派であれば、治療者に上手に依存しながら、社会的成功を収める優秀な患者と、それを支える立派な治療者という見方をする。

もう一つの自己心理学の基本的な特徴は、意識レベルへのアプローチである。

これは共感の重視という形で現れる。相手の立場に立って、相手の心理を想像する共感は、決して相手の無意識の世界を想像するのではなく、意識レベルで相手が体験する世界の理解に努めるということだ。

そしてコフトの最後の論文も、最後の講演も共感にまつわるものだった。

旧来の精神分析のイメージとは、かけ離れたものであることをご理解戴けると思う。

「甘える勇氣」をもつ

さて、このコフトの最終的な理論体系は、きわめて土居先生の「甘え」理論に近いものだ。

「甘え」理論では、むしろ子供や患者の心理的依存を満たしてやろうというのが原則であるし、またこれは無意識レベルの話ではなく、意識レベルの話である。

「甘え」を満たすために相手があてにする好意を想像するというのは、まさに「共感」そのものである。

コフトは、心理ニーズを満たしてくれるものとして体験される対象を自己対象と呼び、そのように相手(治療者)をみる心理を自己対象転移と呼んだが、この自己対象転移は、相手の好意や相手が自分の願いをかなえてくれることを期待する心理であるという点で「甘え」そのものである。

これは土居先生も強く意識していたようだ。晩年

出版された論文集『「甘え」理論と精神分析療法』の序文にはこう記載されている。

「たとえば、コフトが精神分析の伝統に身をおきながら画期的な自己心理学を作り出したことにかに感嘆したとしても、そして彼のいう selfobject を自己対象と訳して新しがっていても、もし自己対象転移が「甘え」に相当するということを思いつかなければ、結局何も学んだことにはならないのである」(14, 9頁)。

さて、コフトは自己対象をもつことで自己が形成される、つまり周囲(親など)が期待に応じてくれることで、自分の体験世界に確信が持てるようになることを主張した。

実は、土居先生は、自己心理学構築以前にコフトが自己愛の精神分析学者として、さっそうとデビューした1971年に『「甘え」の構造』の中で、こう記載している。

「人間はかつて甘えるということを経験しなければ、自分をもつことはできない」(1, 169頁)。

これをコフト流にいうと、「人間は自己対象転移を経験しないと自己を形成できない」ということになるのだが、理論の類似性に驚きを禁じ得ない。

こういうこともあって、土居先生の「甘え」理論は国際的にも再評価され、1999年にチリのサンティエゴで行われた国際精神分析学会でも「甘え」理論に関するシンポジウムが組まれているほどである。

「甘える」経験をしないと自分をもつことができないというのは、「甘え」が許されない環境で育つと、周囲の思惑ばかり気にして、自分の意見ももてないし、自分の感覚が信じられないということだろう。

もちろん、小さい頃に「甘え」が体験できなくても、大人になって体験することで自分をもつことはできるはずだ。コフトにしても、精神分析治療を通じて、自己対象転移を経験することで自己を再構築できると主張する。

ただ、周囲が甘えを満たしてくれるのを待ってい

でも、今の時代の日本では困難なことは前述の通りだ。

ならば、勇気を振り絞って、周囲に甘えてみる必要があるのではないだろうか？

助けを求める、人に頼ってみる、休ませてくれと言ってみる、受け入れてくれるはずだと信じて言いたいことを言うなど、思い切って甘えてみると、意外に相手は受け入れてくれることだろう。まだまだ、日本人にはそのような好意が残っていることは、震災後の助け合いなどをみても十分想像できる。

思い切って甘えてみて、それを受け入れられる経験をすることで、「自分」がもてる。

これが土居先生とコフォートの共通の認識である。

私は、この「甘える勇氣」こそが、「甘え」が消失しつつある日本において、メンタルヘルスの上でも自分が自分であるためにも、欠かすことのできないものと信じている⁽¹⁵⁾。

さいごに

本誌の主たる読者が社会的養護の関係者であることから、あえて追記したいことがある。

まず対象となる子どもの甘えにどう対応するかである。

確かに、愛情を受けずに育った子どもの中には愛情希求がエスカレートしやすいところもあるかもしれないが、コフォートはそれに対しても共感的に接し続けるうちに、他人への信頼感のようなものが生まれ、妥当なレベルに落ち着いてくると考えている。

少なくとも子どもが、「遠慮しなくていい」「甘えていい」という環境を作ることは重要なことと信じている。

もう一方で、福祉関係者に共通することだが、頑張りすぎるといった問題点があるように見受けられる。そういう人こそ、燃え尽きないうちに人に助けを求めたり、弱音を吐ける「甘える勇氣」をもってほしい。

参考文献

- (1) 土居健郎(1971年)、『「甘え」の構造』、弘文堂
- (2) 土居健郎(1988年)、『「甘え」理論再考』、土居健郎『「甘え」さまざま』、弘文堂、1989年、49～92頁
- (3) 土居健郎、『「甘え」理論と社会精神医学』(1993年)、日本社会精神医学雑誌、1巻63～66頁
- (4) Johnson, F.A. (1993) : Dependency and Japanese Socialization: Psychoanalytic and Anthropological Investigations into Amae. New York: New York University Press. 江口重幸・五木田紳訳、『「甘え」と依存』、弘文堂、1997年
- (5) Doi, T. (1956) : Japanese language as an expression of Japanese psychology. *Western Speech*, 20 : 90-96
- (6) Doi, T. (1962) : Amae : A key concept for understanding Japanese personality structure. In R. J. Smith & R. K. Beardsley (Eds.) *Japanese Culture : Its Development and Characteristics*. Chicago : Aldine.
- (7) 山折哲雄(2018年)、『“甘えの構造”が消失した日本社会の問題』『理念と経営』2018年7月号、16～17頁
- (8) 中根千枝(1967年)、『タテ社会の人間関係』、講談社
- (9) 土居健郎(2007年)、『「甘え」の構造』【増補普及版】、弘文堂
- (10) Strauss, G.D., Yager, J., Strauss, G.E. (1984) : The cutting edge in psychiatry. *American Journal of Psychiatry*. 141 : 38-43
- (11) Kohut, H. (1971) : *The Analysis of the Self*. New York: International Universities Press, 水野信義・笠原嘉監訳、『自己の分析』、みすず書房、1994年
- (12) コフォート・ハインツ、本城秀次・笠原嘉監訳、『自己の治癒』みすず書房、1995年
- (13) 和田秀樹『コフォート心理学入門』青春出版社、2015年
- (14) 土居健郎(1997年)、『「甘え」理論と精神分析療法』、金剛出版
- (15) 和田秀樹『甘える勇氣』新講社、2019年

キーワード：素直な甘え

前述のように土居先生は「甘え」を肯定的にとらえていたが、後に、甘えには「素直な甘え」と「屈折した甘え」があるとした。素直に甘えられない時に、すねたり、ふてくされたり、ひがんだりするが、これにしても相手に気づいてほしい、かまっしてほしいという要求が内心には潜んでいる。

愛情希求のために、甘えすぎてしまうことより、甘えずに、不機嫌な態度をとったり、人間不信を高めていたり、あるいは、悪事を働いて人目を引こうとするほうがよほど問題だということだ。

楽観的かもしれないが、そういう子どもでも、周囲の愛情が実感できて、内心の欲求が満たされる(周囲が気づいてくれるという意味で「甘え」が満たされる)ことで、徐々に「甘え」が素直なものになっていくはずだ。そういう意味で、「甘やかす」のを恐れる以上に、「甘えられない」子どもの心理ニーズをどう見出し、どう満たしていくかは、健全な精神の発達のために重要なことと言えるだろう。

I 総論—「甘え」とは何か

「甘え」を通して 初めて浮かび上がる アンビヴァレントな心模様



西南学院大学大学院人間科学研究科 教授、感性教育臨床研究所代表 **小林隆児**
こばやしりゅうじ

はじめに

アタッチメントにまつわる事象は、多様な情動の蠢く関係世界である。情動は乳児と養育者のあいだで絶え間なく立ち上がり、関係と文脈を通して多様な意味をもったものへと変容を遂げていく。最初は未分化な快と不快でしかなかった乳児の情動は、養育者との濃密な交流を重ねる中で、喜怒哀楽をはじめとする多様な感情へと分化していくが、同時に明確にカテゴリーで捉えることのできない広義の情動である力動感 vitality affect も常に蠢いている。当初乳児の情動の発露は泣き声として体现されるが、けっしてそれだけではない。情動の動きはからだの動きとしてじつにわかりやすいかたちで文字どおり体现される。養育者はそこに乳児のこころを感じながら養育する。情動の動きはこころの動きそのものを示すことからわかるように、こころとからだは不可分なかたちで表に現れているものである。

アタッチメントから「甘え」へ

私のアタッチメントへの関心が強まったのは、四半世紀前に母子ユニットを創設してからである。当初は、自閉症の中核的症狀である対人関係障害が一体どのような性質のものかをこの目で確かめ、早期診断、早期治療、さらには予防への道を切り拓きたいとの思いから始めたものであった。しかし、乳幼児期早期の母子を関係の相で観察する中で、次第に

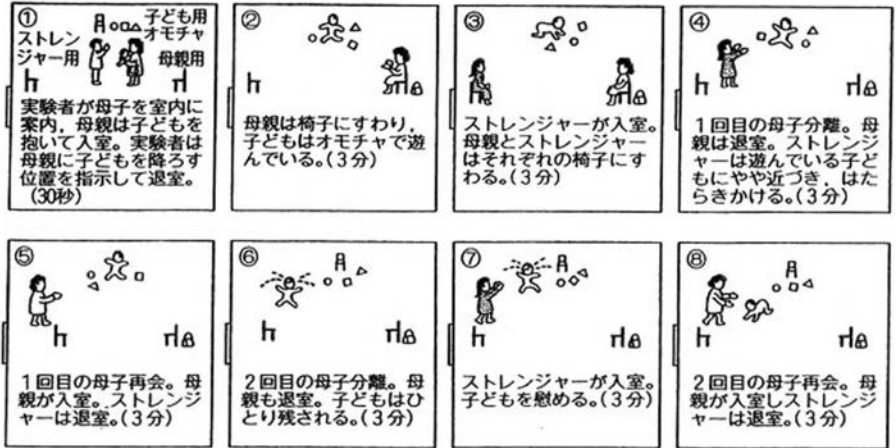
私は、自閉症、発達障害などの診断名にとられることの弊害を強く意識するようになった。生後数年間の母子関係に見られる様々な事象は、こころがどのようにして発達成長していくのか、こころがどのようにして病んでいくのか、精神医学の根本問題を考える上で大きなヒントを提供してくれたからである。その最大の要因は母子ユニットという恵まれた環境で徹底的に関係の視点から観察したおかげであるが、その際、アタッチメントにまつわる母子関係の様相を「甘え」の観点から捉えることによって実感を持って理解することができるようになった。

独特な関係病理としての「あまのじゃく」

母子関係の観察の際、私も新奇場面法(図1)を用いた。計55組の母子を観察し(小林, 2014)、録画した映像を何度も繰り返し見ていく中で幾多の発見をした。

その一つは、1歳台の母子に見られる独特な関係の難しさである。自分になつかない、視線を合わせないなどの相談で母親は来院するが、新奇場面法でその関係を見ることによって独特な特徴を掴むことができた。目の前の母親が関わろうとすると、子どもは回避的態度を見せるが、いざ母親が目の前から消えると、心細い反応を見せて母親を求める。しかし、母親が戻ってくると再び回避的になり、先ほど見せた心細さがまるでなかったかのような態度を見

〈図1〉 新奇場面法
(strange situation procedure)



母子の愛着行動の発達や種類を評価する観察法。1965年、米国の心理学者メアリー・エインスワースらは、母親と赤ちゃんに「見知らぬ部屋」(実験室)に入室してもらい、右記にある8つの場面で赤ちゃんの動きを観察・記録。この実験を対象を変えて繰り返し、赤ちゃんの愛着行動に関する個人的な差異を明らかにした。

せる。ただ母親を避けるという単純なものではない。母親の見えないところで心細い反応を見せているからである。母親は子どものそうした姿を目にしているからそんな思いに気づかない。残念ながら、臨床家は母親の目を通してみた乳児の姿しか知らないことが多い。自分の目で直接観察することの大切さを実感したものである。

当初私は子どものこころの動きを捉えて「甘えたくても甘えられない」心理として表現した(小林、2014)。アンビヴァレンス(両価性)といわれるものである。さらにこの独特な関係の難しさは、「ああ言えばこう言う」あまのじゃくな子どもの姿と重なり、この関係病理を「あまのじゃく」として概念化した(小林、2015)。

ついで、2歳台になるとさらに大きな変化が起こる。それまで明瞭に認められた心細さからくる不安は外からは窺い知ることが困難になり、それをカモフラージュするような独特な振る舞いを見せるようになる。それはじつに多様で、私が直接観察で捉えることができたものを図2に示すが、これらの振る舞いは不安の解消や緩和の方策としての役割を果たし、不安への対処行動として理解できるものである。これらが恒常化し固定化した状態こそ従来症状として捉えられてきたものである。図2では各々の対処行動がのちのちどのような病態へと発展するかを、

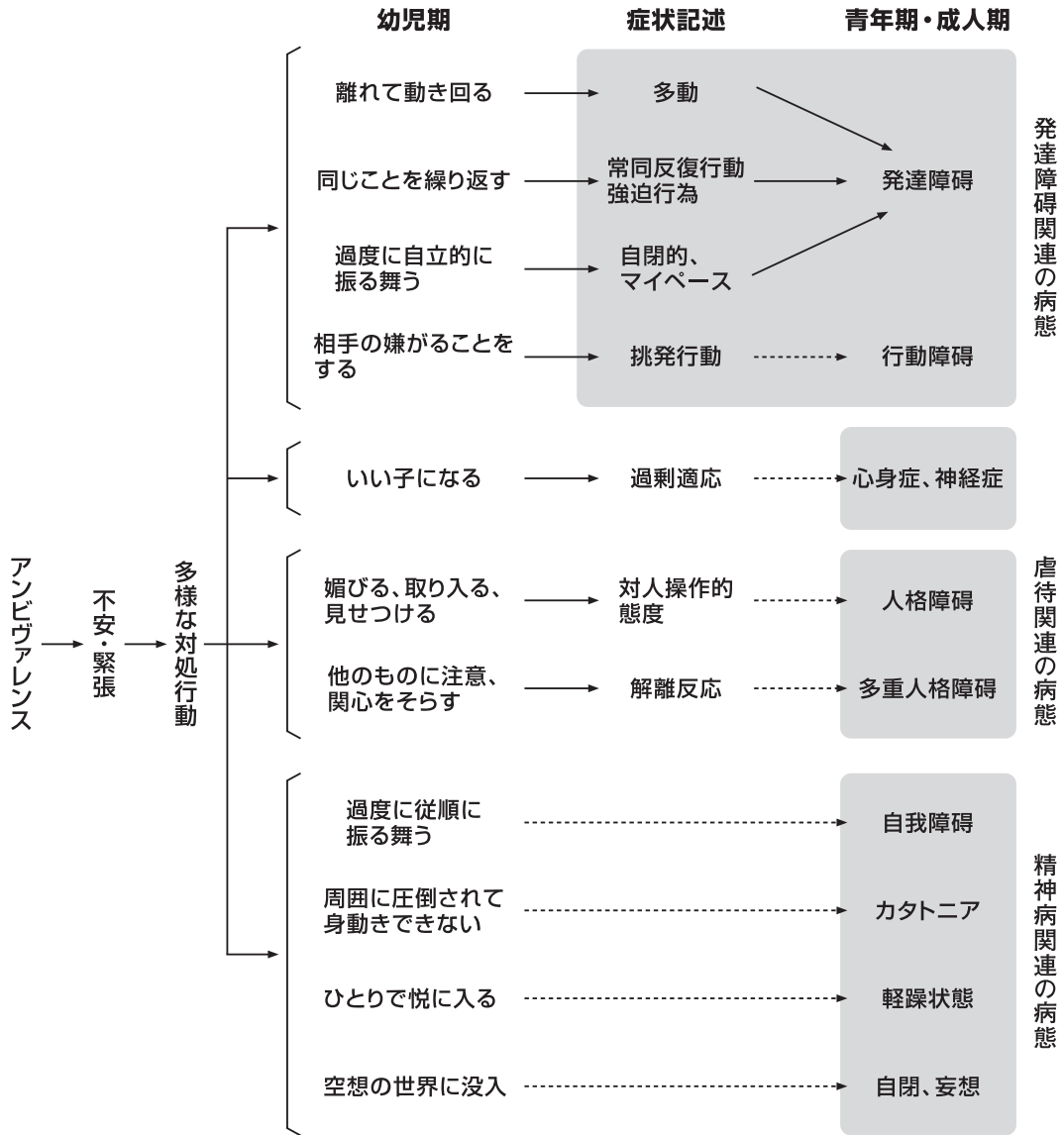
私の推論も交えて右列に示している。

潜在化した不安は情動の動きとして感じ取ることができる

ここで治療する側から見れば、大変やっかいな問題が生じていることに気づかされる。心細くて不安な子どもであれば抱きかかえることで比較的容易に不安を解消することができようが、彼らは自らの不安を隠し、その防衛として様々な対処行動を取るようになる。なぜなら自らの不安が他者に気づかれることはとても恐ろしいからである。それゆえ彼らの不安は掴み難くなる。不安は無意識の層に潜在化し、それに代わって症状が前景化する。症状だけが彼らの意識にのぼり、私たちもそれに目を奪われる。治療が難しいのはそのためである。

そこでヒントになるのは、コミュニケーションを二重構造で捉える視点である。一般にコミュニケーションは話し言葉を介する言語的コミュニケーションと身振りや表情を介した非言語的コミュニケーションに二分されることが多いが、忘れてならないのはその底流に、当事者も気づかない無意識の次元でのコミュニケーションが生誕直後(あるいはそれ以前)から一貫して息づいていることである。感性的コミュニケーションである。

先に述べた無意識の層に潜在化した情動体験は感



〈図2〉アンビヴァレンスへの対処行動、症状、そのゆくえ (小林, 2018, P.38)

性的コミュニケーションの相で掴み取ることができる。アンビヴァレントな「甘え」という情動の動きは症状の背後に蠢いているからである。それを掴み取ることを可能にしてくれるのは理性ではなく感性である。目には見えないゆえ客観的に捉えがたいが、感じ取ることによって初めて掴み取ることができる。誰にとっても難しいのはそのためである。ここで手がかりとなるのがアンビヴァレントな情動を感じさせる、乳児のからだの動きである。そこに明瞭なかた

ちでアンビヴァレンスを見てとることができるからである。母親が近くに来ると、さりげなく母親の肩に腕を回して抱っこされたような素振りを見せながらも、母親が何かをしようとするやすぐにその腕を引っ込める。そんなデリケートな動きである。

こうしたからだの動きは、2歳台になると影をひそめるが、こころの動きとして捉えることができる。ただし、それに気づくためには私たちが当事者意識を持って関わり、その中で双方のこころの動きを問

主観的に感じ取ることが不可欠である。たとえば子どもから大人まで以下のようなかたちで捉えることができる。

相手の話題に同調して共感的態度を取って返すと、途端にそうではないかのような反対の態度をとる。あるいは、直接面と向かって語り合っているときには心ここにあらずの態度だが、面接が終わろうとすると途端に治療者の機嫌をとる態度へと豹変する。両者の心理的距離が接近すると相手は回避的の反応を示すが、こちらが離れようとする相手は接近するのである。あるいは、怒りなどの本音が出そうになると途端にそれを引っ込める。口には直接出さないが何か含みのある言い方で語る。何か言いたそうだがまわりくどく関係なさそうなことばかり口にする。そんな語り方、語り口調で示される場合もある。

以上取り上げた患者のこころの動きは、乳児が母親との関係病理として見せた「あまのじゃく」そのものである。なぜなら、これらのこころの動きに「あまのじゃく」と同型のゲシュタルト（ひとままとまりの姿、形態）を見てとることができるからである。さらに、発声に伴う情動の動きを感じ取ることによって、アンビヴァレントなこころの動きを捉えることもできるのだ。

私たちが面接で心掛けなければならないのは、患者が何を語るかではなく、患者がいかにかに語るかにこころを配ることである。なぜならそこにこそ患者の情動の動き、こころの動きが端的に表れているからである。

屈折した甘えとしての対人操作的態度

ここで一つ例を挙げて説明しよう。図2の「対人操作的態度」を示し、将来人格障碍へと発展することが危惧される場合である。この種の対処行動は虐待がらみの例がほとんどだと考えられるからである。

2歳になった男児がいかにも気だるそうな無気力な態度で母親の前を無目的に動き回っている。ときにさり気なく母親に近づいて椅子に座っている母親に背を向けながらもたれかかる。本来甘えなければ、正面から母親に抱きつくものである。大人の世界の「面従腹背」ともいえる対人態度の幼児版を見る思いである。そこに私は子どもが母親に媚びる姿を発見する。あるいは、懸命になって働きかける母親に対してちょっと相手をしてはすぐに気移りする男児が、上手に遊んでくれるスタッフと二人きりになり、次第に相手に心を許すようになった頃、母親が部屋に戻ってくる。その途端にスタッフに差し出そうとした両腕を引っ込め、笑顔を取り繕って母親の方に小走りで接近し、母親の手を引いて一緒に遊ぼうとする。母親が戻ってきたので喜んでいるなどと単純に考えてはいけない。他人に心を許そうとしたところを母親に見られたのではないかと不安になって媚びを売る姿を私はそこに発見する。妻をもつ男性が他の女性と浮気している現場を妻に発見されて慌てふためきご機嫌をとるメロドラマの1シーンを彷彿とさせる。

この種の映像を見ると、こんな幼な子が親に媚びを売るなど信じられないと、誰もが驚きの声を上げるが、子どもは母親と一緒に生きていくために気に入られようと必死なのである。

アンビヴァレンスという情動の動きは「甘え」にまつわる情動の世界である

冒頭で述べたように、アタッチメントにまつわる事象は情動の蠢く世界である。情動は常に変化し続け、一時も同じ状態に留まることはない。とりわけアンビヴァレントな情動の動きは一言で表現できるような単純なものではない。どっちつかずの代物である。つかみどころがないところに最大の特徴がある。しかし、情動の動きはこころの動きそのものであることを考えると、たとえアンビヴァレントな情

動だとしても、こころの動きとして確実に掴み取ることが治療上不可欠である。アタッチメントを「甘え」にまつわる事象としてみることで、母親の前で振る舞う子どものこころの動きを、私たちの人間世界の心模様となんら変わらないものとして確実に捉えることができる。

臨床家は感性を磨くことが求められる

以上の理由から私は学生のみならず現場の臨床家をも対象に「感性教育」(小林, 2017)を試みるようになった。新奇場面法で録画した映像を実際に見てもらうことでアンビヴァレントなこころの動きを肌で感じ取ってもらうことが臨床力を磨く上で不可欠だと考えているからである。これまで述べてきたように、アンビヴァレントなこころは人間誰しも体験的に理解できる性質のものである。それができて初めて、アンビヴァレンスが強まったとき、人はどのように振る舞うかが実感をもって理解できるようになるのだ。自らの体験をもとにした理解こそ本来の共感的理解であるが、アンビヴァレンスの理解が誰にとっても一筋縄でいかないのは、自らの内面に日頃潜伏している情動体験を喚起することによって初めて気づくことができるようになるからである。大なり小なり誰しも幼少期の「甘え」体験を想起するのはつらいものだが、私たちが向き合う相手、子どもから大人まで、彼らは自らのアンビヴァレントな体験に圧倒され、もがき苦しみ、ついには症状というかたちで対処することでしか生き永らえる術がなかった人たちである。まずは私たちが自分に向き合うことが求められるのはそのためである。

おわりに

本章は「甘え」とは何かを論じることがテーマである。改めて考え直してみると、私は「甘え」とは何かを正面から考えたことはあまりなかったように思う。私たちにとって日常語である「甘え」をわざ

わざ定義する必要などないと考えてきたからである。現に映像を見た人たちはみな異口同音に子どものこころに「甘えられない」もどかしさを語っている。「甘え」を正面切って論じることが難しいのは、本来の「甘え」は当事者も意識しないところで立ち上がるもので、そこに「甘え」を意識した途端に本来の「甘え」ではなくなるからである。母親が子どもにも「甘えてもいいのよ」と優しく言葉を掛ける場面に遭遇することがあるが、そう言われた途端に子どもは素直に甘えられなくなるものである。「甘え」とはそういうものである。

本稿で私が取り上げた「甘え」にまつわるこころの動きはすべて屈折した「甘え」であって、本来の「甘え」ではない。しかし、具体的に述べた「甘え」にまつわるこころの動きは誰にでも自らを振り返る中で自ずからわかるような代物である。子どもから大人まで患者であってもそれを指摘されれば自ずから気づく。それこそ根源的な意味での治療だと私は考えている。その気づきが生まれたときに初めて健康な「甘え」が立ち上がると思うからである。

文献

- 小林隆児(2014)『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』ミネルヴァ書房
- 小林隆児(2014)『甘えたくても甘えられない』河出書房新社
- 小林隆児(2015)『あまのじゃくと精神療法』弘文堂
- 小林隆児(2017)『臨床家の感性を磨く』誠信書房
- 小林隆児(2018)『関係の病としてのおとなの発達障碍』弘文堂

キーワード：アンビヴァレンス ambivalence

同一の対象に対して、愛と憎しみ、友好的態度と敵対的態度のような、相反する心的傾向、感情、態度が同時に存在する精神状態を指し、両価性とも訳されている。精神医学の領域で最初に登場したのは、精神科医オイゲン・プロイラー(1911)が統合失調症にみられる基本症状の一つとして取り上げたことによる。当初彼は統合失調症に顕著に認められるとしながらも、のちに正常な心身機能においても普遍的に認められると考えるようになった。

I 総論—「甘え」とは何か

「甘え」と社会的養護



北里大学大学院医療系研究科 教授 おいじ 生地 あらた 新

1. はじめに

土居健郎(1971)が「甘え」について考えるようになった契機は、アメリカでの留学体験であった。土居は、大学を卒業した後に軍医として従軍していた。第二次世界大戦で日本が敗れた後、アメリカ軍に接収された聖路加病院で内科医として研鑽を積んでいた。そして、東京大学医学部の精神科の医局に入り、アメリカのメニンガー・クリニックに単身で留学した。そこで、土居は自分の意思を言葉でいちいち伝える必要があるアメリカの文化に触れて、「甘え」という言葉に相当する英語の単語が存在しないことに気がつく。しかし、土居は「甘え」は日本人だけの心理ではなく、人類に共通する基本的な心理と考えるようになった。そして、リビドー(性の欲動)を軸に人間の心の動きを理解しようとするフロイトの精神分析理論を、母子関係に根ざす「甘え」を軸に再構成しようとした。その後、精神分析の世界でも、両親と自分という三者の間での性愛的な葛藤であるエディプス・コンプレクスから、母子関係という二者の関係へと関心が広がり、土居の「甘え」理論は、米国の対人関係学派のフロム・ライヒマンや英国の独立学派のマイケル・バリント、さらには乳幼児精神医学の大家であるコロラド大学のロバート・エムディなどから高い評価を受けて、世界的に有名になったのである。

土居の論じる「甘え」は、健康な母子関係におい

て存在する子どもから親への受け身的な感情のことを意味している。つまり、子どもが親(養育者)に自分を理解し世話してくれることを望む自然な欲求のことを意味している。母親(養育者)は、子どもの甘えたい気持ちを察して、世話をしたり、少し、待ってもらったりするのである。このような「甘え」を穏やかに表現し、それを察してもらうという体験は、私たちの心の成長のために大切な体験である。そして、大人になっても、お互いの密やかな甘えに敏感なのが、日本の文化の特徴なのだとも土居は考えた。かつての日本の社会では、甘えを無意識に察し合うような間主観的な世界が共有されていたとも言えるだろう。その場合、甘えは非言語的で無意識の交流の形をとるので、意識に上ることも言語化されることも少ないと土居は言うのである。しかし、現代の日本の社会では、このような成熟した甘えの文化が衰退して、「甘やかし」や「甘ったれ」のような「自己愛的甘え」が蔓延していると土居(2001)は考えるようになった。

さて、現在の日本の社会的養護の現場に目を移すと、そこで暮らしケアされているのは、まさに密やかで自然な「甘え」を介した交流が体験できなかった子どもたちなのである。そして、その結果として生じてくる「甘ったれ」をめぐる、職員たちは日々奮闘し、疲弊している。これは「甘やかし」になるのではないかという不安を抱えながら、何がほ

どよい甘えなのかがわからなくなる職員も少なくない。児童養護施設や乳児院、自立支援施設では、子どもたちの心の中に「すねる」「ひがむ」といった気持ちの渦巻いている。この特集を企画された早川洋編集委員長は、甘えを「自然に他者を頼れること」と定義しているが、社会的養護の現場では、「自然に他者を頼れない子どもたち」を、どのように育て、どのようにケアするのが、大きな課題と言えるだろう。そして、ここで、私たちは、社会的養護において目指すべき健康な甘えの世界とはどういうものか、そこに近づくためにどうしたらよいかを考える必要がある。私自身(生地, 2017)は、20年前から、児童精神科医として、児童養護施設を中心に、児童福祉施設の職員へのコンサルテーションやそこで働く心理職の人たちへのスーパービジョンに取り組んできたが、その経験に基づいて、社会的養護の現場での甘えについて考えたことを述べていきたい。

2. 社会的養護の現場と甘えの病理

すでに述べたように、社会的養護の対象となっている子どもたちは、育ってくる中でほどよい甘えの世界を体験していないことが多い。自分の甘えたい気持ちをだいたい察してもらいながらも、ある時は待たされ、ある時はうまく察してもらえないという状況も体験し、そこを生き抜いていく中で、私たちは成熟した甘えの境地に到達する。しかし、彼らはそうではない。子どもたちは、自分たちの理解されたい気持ちや世話されたい気持ちを乱暴に表現したり、ひねくれた形で表出したりする。あるいは、大人の世話をすることで間接的に自分の甘えたい気持ちを満たそうとする子もいるかもしれない。社会的養護の現場において、病理的な甘え(自己愛的な甘え)に基づく行動には、どのようなものがあるだろう。

1) 暴力と自傷

自分の要求を察してもらえない時や自分の気持ち

が理解してもらえないと感じた時、つまり甘えを察してもらえない時に、他の子どもや職員を殴ったり、ものを壊してしまったりすることがある。そういう欲求を抱いたり、気持ちを察してもらいたいと思う自分が悪いのだと感じて、頭を壁に打ち付けたり、体を傷つけたりすることもあるだろう。自傷と暴力は背中合わせで、何かの拍子に反転する。つまり暴力を振るっていた子が自傷をするようになることや自傷をしていた子が暴力を振るう方向に転じることは少なくない。暴力や自傷は、すぐに対応することが求められるために、結果的にその子どもは大人の注目を集めて、「かまってもらう」ことになる。そして、そのような不適切な行動はかえって強化されてしまうのである。そうした事態が長引くと子どもへの共感的な理解も難しくなってしまう。

2) 盗み

児童養護施設など社会的養護の現場では、子どもがほかの子どもの物を盗ったり、小売店で万引きをしたりすることは珍しいことではない。中には、自分の物と人の物をあまり区別しない養育環境で育ったために、人の物を平気で使う場合もあるだろう。しかし、多くの場合は、人の物を盗ることが悪いことだとわかっていて、盗んでいるのである。自分にはなくて、ほかの子どもは持っている良いものの象徴として、その子の持ち物を盗む場合もあるし、空虚感や満たされない気持ちからお店のものを盗ってくることもあるだろう。打ち出の小槌のように無限に何かを与えてくれるものを自分が持っているという空想をしていることもあるかもしれない。盗みをする子どもの場合に問題となるのは、自分が本当は何を求めているのかが実はわかっていないということである。子どもたちは、お金や物ではなく、世話をしてくれている大人に対して、甘えたい気持ちを理解してもらうことや本当の意味での愛情(大切に思う気持ち)を持ってもらうことを求めているはず

である。しかし、彼らの多くは、そういうことを大人に期待することをどこかで諦めているのである。

3) 脱走と放浪

施設や里親の家で暮らしていて、自分が受け入れてもらえて大事にされていると思えない時や、自分の欲求を受け入れてもらえないと感じた時に、子どもたちはその場から何度も脱走することがある。自分の親の家に戻ってしまったり、しばらく放浪したりする子もいるが、意外に近くにいる、大人が探しに来るのを待っていることもある。自分を探してもらう隠れん坊遊びのような意味で、脱走したり、夜中にこっそり抜け出したりしているのかもしれない。あるいは、自分の居場所がないことを放浪という形で表現しているのかもしれない。

4) 性的逸脱行動

男子の場合は、他の子どもへの性的暴力や下着泥棒などの性倒錯が問題になることが多い。女子の場合は、不特定の男性との性交渉や売春行為が問題になることが多い。男子の場合は、母性的な関わりを求めている場合もあるが、母親への恨みが性暴力の背景にあると考えられる場合もある。同年代の同性の仲間との交流が乏しく、同年代の異性に接近できない場合、男子なら性倒錯(フェティシズムや小児性愛、美少女アニメなどの「二次元」への熱中)に向かうことが多い。女子の場合は、アニメや芸能人などへの熱中もあるが、売春や年上の男性との性交渉に向かうこともある。性的虐待の被害を受けていたことが、背景にあることも少なくない。こうして性的逸脱行為を単なる性衝動の問題とは捉えない方がよい。甘えの病理の一つの表現として、性的逸脱行為にいたる場合もあるし、虐待の影響もあるということ念頭に置くべきである。また、「自分がなぜ生まれてきたのか」「親はなぜ自分を産んだのか」という疑問が、子どもの性的行動と関連しているこ

とがある。

5) 回避と孤立

暴力や盗みや性的逸脱行為などの目立った行動の場合は、大人は熱心に対応することが多いだろう。それが叱られる・指導されるといった必ずしも楽しくない関わりであっても、無視されたり、放っておかれたりするよりは、ずっとましな体験になる。施設の職員や里親も疲弊しながらも、一所懸命、その子どものことを考え、同僚や外部機関にも相談するだろう。しかし、施設には、問題を起こさない子、扱いやすい子も存在している。このような子どもたちは、話題にあがることも少なく、心理療法などの心理ケアも受けていないことが多い。しかし、彼らが「甘え」の病理も持っていないと考えてよいだろうか。実際は、多くの場合、そういう子どもたちは、自分を隠しているのである。彼らは、大人に頼ることを諦めているのかもしれないし、逆に大人の世話をすることで自分の甘えたい気持ちを間接的に満たしているのかもしれない。あるいは人との関わりを避けて孤立することで、自分の貪欲さやすねた気持ちが表に出るのを避けているのかもしれない。

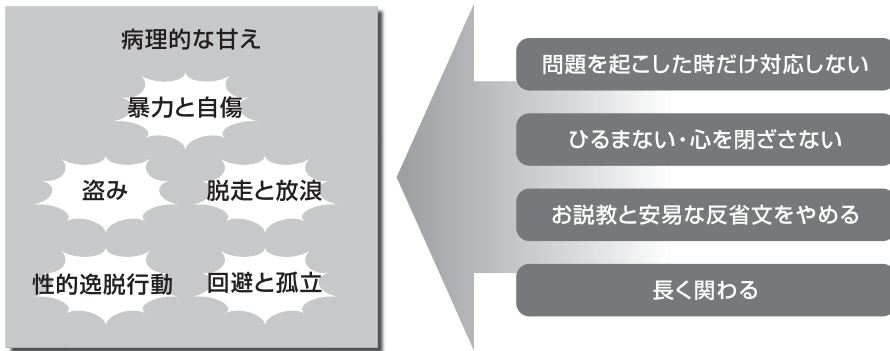
3. 甘えの病理への対応

前項で述べてきたように、ほどよい自然な甘えを体験していない子どもたちは、それぞれ個性的に甘えの病理を表現している。どの問題も簡単な対応方法はない。こうした病理に対応する際に大切なことについて、手短かに述べたい。

1) 問題を起こした時だけ対応しない

暴力と自傷のところで述べたように、問題を起こした時だけ、大人が密接に関わるだけだと、問題を起こすと対応してもらえない(かまってもらえない)という体験が積み重なり、問題となる行動がかえって増えてしまうことさえある。問題行動のない時の日

〈社会的養護の現場における病理的な甘え(自己愛的な甘え)とその対応〉



常の関わりが大切だということである。その子ができていることを認め、褒めたり、励ましたりする関わりが特に大切である。望ましい行動を記録し、カレンダーに○をつける、あるいはシールをはるなどして、視覚的にその子の行動の評価を行うこと(いわゆる頑張り表)は、多くの施設で取り入れられている。こうした方法も効果を示すことはあるが、何よりも一緒に何かの作業をしている中で、世話をしている大人から認められることや褒めてもらえることが効果的である。このような関わりの中に、甘えを介した密かな交流が芽生えるのである。また、問題となった行動について、時間が経って冷静になった時に、振り返りをして、別な行動の方法について話し合うことも意味がある。そうした話し合いの中で、その子がなぜそのような行動をしたかについて本人の口から説明してもらえることもある。

2) ひるまない・心を閉ざさない

暴力や自傷は人の心に衝撃を与える。それにひるんで対応できなくなることもあるし、大人の側の心が閉じてしまって、行動に鈍感になってしまうこともあるだろう。ケアをする大人の側がそういう心理状態になっている場合、他の人と問題について話し合い、自分の気持ちを吐露し合い、そして対応のアイデアを出し合うことが必要になる。そうやって、自分を立て直しながら、ひるまず、かと言って距離

を置き過ぎず、ふだんのその子に向き合うことが大切である。危険な行動に対しては大声を出したりせずに、しかし、毅然とした態度が求められる。

3) お説教と安易な反省文をやめる

問題を起こした時に、あまり関係ができていない子どもに対して、長く、理屈でお説教しても、彼らの心には届かない。多くの場合、早く説教が終わればよいと思いながら、下を向いて反省するそぶりをみせるか、あるいは、全然反省の色を示さないかのどちらかになる。叱って泣く子は、見込みがある。多分、泣く子は、大人との間に一定の信頼関係ができていて、その大人から叱られるのが悲しいし、反省できるのである。そういう子は、大人に甘えることができることが多い。しかし、社会的養護の現場にいるのは、そういう子ばかりではない。行動を変えて欲しい時には、その子の理解力に合わせて、図解も入れながら、どうしたら問題を起こさないで生活できるかを子どもと一緒に考える姿勢が必要になる。もちろん、どうしても「して欲しくないこと」「許されないこと」は、ふだんからきちんと伝えることが大切である。何箇条かのルールとして文章化するという手もあるだろう。反省文を一人で書かせるというやり方も避けた方がよい。大人と子どもと一緒に振り返り、それをもとにして、どうしたらよいかを考える方がよい。

4) 長く関わる

信頼関係を作り、甘えられる対象になる一番よい方法は、当たり前なことだが、長くその子に関わるということである。もちろん、ほどよい温かみのあるケアをしていくことが前提になる。この人は当てになる、ずっと見てくれていると思えるようになれば、子どもは心を開き、素直な甘えも出せるようになるのだと私は考えている。

4. 終わりに

社会的養護の現場は、土居が述べたような密やかに非言語的に甘えを察し合うような文化が育ちにくい場である。そのような現場では、その子どもが、困った時に誰かに連絡を取り、つながることができる力を身につけるということが第一目標である。そして、児童福祉施設では、子どもの甘えの病理を理解し、子どもへの対応について話し合える文化と、職員がお互いのつらさを察し合い、お互いを労うことができる文化が施設に根付くように、施設長がリ

ーダーシップをとりながらも職員や嘱託の専門家と連携して力を合わせて行くことが大切である。そのためには、職場内のミーティングと事例検討と飲み会(食事会)を大切にするとよい。

参考文献

- 土居健郎(1971):「甘え」の構造, 弘文堂, 東京.
- 土居健郎(2001):続「甘え」の構造, 弘文堂, 東京.
- 生地 新(2017):児童福祉施設の心理ケア—力動精神医学からみた子どもの心, 岩崎学術出版, 東京.

キーワード：自己愛的な甘え

土居が「甘え」についての論考を最初に発表した頃には、自分を理解し世話をしたいという気持ちを控えめに言語化せず表現し、相手がそれを察するということが、日本文化の特徴と考えた。健康的で素直な「甘え」は密やかに伝わり、そこに穏やかな情緒的交流が生まれる。ところが、相手に一方的に世話を求める「甘ったれ」や、相手の気持ちを細やかに感じ取らずに相手の要求に応え続ける「甘やかし」が、現代日本では蔓延していると土居は考えた。そのような屈折した「甘え」を「自己愛的な甘え」と土居は表現した。社会的養護の現場では、まさに「自己愛的な甘え」を抱えた子どもたちをケアしなければならぬのである。



I 総論—「甘え」とは何か

「甘え」の日米比較

—日本は多様性を認めた「開かれた甘え」へ



つねよしりょうこ
 東京大学大学院教育学研究科 教授 恒吉僚子

「甘え」という概念

筆者の学問領域においては「甘え」は日本人や日本社会の独自性を強調したとされるジャンルである日本人論、日本社会論の代表的な概念の一つであると考えられているように思う。このジャンルは、日本の特殊性を主張し、漠然とした、科学性を持たない主張だとされる傾向があり、「甘え」はもともと心理系の概念であることも加わり、どこか研究の概念としては捉えどころがないとされがちであるように思う。つまり、人によって厳密に何を意味しているのかが変わり、「甘え」が何であるのかを特定するのが難しいことが問題となるわけだが、研究の概念としては問題になるこうした面も、実践では、曖昧がゆえに色々な場面に当てはめられるという利点もあろう。

例えば、一般の会話の中ではよく使われる、「あの人は甘えている」「甘えないでほしい」という言い方を考える。日常会話の中では何を言わんとしているかが受け手にも大抵伝わっている。しかし、研究する時には分析する概念としては多義的すぎ、使いにくい。よく「甘え」は英語に「訳せない」というが、それも、文化差だけのせいではなく、この語の曖昧さにもよるものであろう。

そもそも「甘え」に関しては、土居(2007)が英語になかなかできないとしたことはよく知られているが、英語にならないと言われるのは実は「甘え」

だけではない。「居場所」も同じである。英語にするとそれは“a place one feels safe”(自分が安全だと感じる所)等のどこか安定の悪い訳になりがちである。しかしながら、「居場所」もまた、不登校に対処する等の実践や、「自分の居場所がない」というような日常会話においてよく使われる語である。

いずれにせよ、「甘え」「居場所」というような語を「日本的」だ、英語(や他の外国語)に訳せないというのは、ともすると、日本人にしかわからない、説明をしないでよい(直観的にわからない人にはわからないから)、というような短絡的な見方を正当化することにもなりかねない。そこで、ここでは、「甘え」とは何か、その普遍性に注目しながら、アメリカの例も引きながら、少し考えたい。

「甘え」の対人関係

さて、「甘え」はもともと母子関係に一つの原型を見出し、ミクロな心理的な考察が多い。インターネットでamaeと打ち込むと、そこには「翻訳できない」とされる「甘え」が、実は何であるかをめぐる議論が載っている。依存、許容や承認。自尊感情、アタッチメント、不適切な要求を受け入れる(Yamaguchi, 2004)等。それは、ミクロな対人関係のレベルでは、お互いに依存しあい、自他の境が曖昧で、相手に頼ったり頼られたり、共感したりする関係において特に意味を持つ考え方である。

そもそも日本人の対人関係の特徴として、共感能力 (empathy) が重視されることは今は亡きハワイ大学のリブラ (Lebra, 1976) 等によって主張されてきた。これが学校教育の段階になると、今度は、学校においても、認知的 (狭い意味での勉強) な関係を強調するアメリカに比べて教師と子どもの「絆」 (kizuna) が強調される (Shimahara & Sakai, 1995) というような主張がされるようになる。

だが、これらの研究はアメリカと比べて日本の特徴 (非認知的能力の強調) をとらえようとしているためにこうした主張になるが、実は伝統的な共同体はえてして似たような「絆」を重んじる対人関係の論理を持つ。運命が絡み合い、人員が固定されている中で、無理を言っていないような状況では「甘え」的な関係が形成されてくるからであろう。

アメリカ人と「甘え」

さて、アメリカは個人主義で共同体的でないといわれる例の筆頭みたいなものである。無論、アメリカ人が「意外に」協動的だとか、地域思いだとか、言われることもあるが、日本ではアメリカは個人主義の国として知られ、おおよそ「甘え」とは遠いと感じられることが多いように思う。

しかし、「甘え」に近い feeling of acceptance (自分が受け入れられた) ということによって得られる「安心感」についてアメリカで頻繁に見受けられる一般向け書物のジャンルがある。それは「育児書」である。現在では、赤ん坊は、自分が訴えればだれかがそれに応えてくれる経験によって「世界は安全な場所だ」と知る、という主張が代表的なアメリカの育児書では一般的である。赤ん坊は泣くことによってしか意思表示ができないのであるから、大人はそれを無視するのではなく、受け入れるべきであると今ではどのアメリカの育児書でも書いてある。一見、泣いて無理難題を言っているように見えるかもしれないが (甘えている)、実は赤ん坊に悪意はな

く、大人がそれに応えることは、将来、赤ん坊が安定した大人になってゆく上で必要な対応なのである。受け止められていると思うことによって得る安心感は、将来の自立の礎になるのである (恒吉・ブーコック, 1997)。逆に言うと、将来、心が安定した「自立した」子どもになるように、「甘え」は許容されるべきなのである。

こうして見ると、「甘え」自身が「日本的」だというよりは、それをどの段階で、どのような行為に対してどう意味付けるかが問題なのである。こうした依存や承認を得たいというような感情、それを支える対人関係が、いかに社会的に意味付けられ、作られているかを示す格好の材料が育児書にあるので、次にそれを見てみよう。

「甘え」の意味の変遷

アメリカでも今では育児書を開けば赤ん坊の主張を受け入れてあげる、安心させてあげる、「甘え」させてあげるのは大事だとしている。そうすることによって赤ん坊は安心感を得て、泣かなくなるとされる。

だが、アメリカの育児書も一時代前は全く逆のことを言っていた。例えば、筆者はスポック博士の育児書やアメリカ政府の育児冊子を時代を追って分析していったことがある。そこにはかつては赤ん坊が泣いた時にいちいち応えていては、赤ん坊はどんどんつけあがり、際限のない欲求を自己統制できない大人になってしまうと主張されていた (恒吉・ブーコック, 1997)。

特に、夜泣きするのをいちいち親が応えていては、子どもにとって大事な自己統制能力がつかず、その子のためにならないというのである。同じようなことはしつけでも言われた。「この一線を越えてはいけない」という一線を越えた時に親が一致して「ダメだ」としつけないと、幼児はどこまでも、親を試す行動に出る。そして、むしろここが越えてはいけ

ない線(リミット)だとわかると安心すると言うのである。

筆者は子ども時代をアメリカで過ごし、犬を飼っていた。そのため犬のしつけの本をよく読んでいたが、そこにも犬の訓練において大切なのは、犬が間違った時は一貫してしかること、この時はよくて、この時はだめ、というようなことはよくない。飼い主達が一貫して同じメッセージを出すべきだというようなことが書かれていた。人間の赤ん坊や幼児は未だ「動物的」なイメージで捉えられ、自己制御、理性、文明によって特徴付けられる大人にまだなっていないのである。これはまた、まだしつけのための体罰がスポック博士の育児書でも容認されていた頃である。

ところが、やがてこうした子どもの依存、欲求に関連した行動に対する評価が逆転する。今日では、泣く子どもを泣かせておかない方が、安心して、結果的に泣かない子どもになり、よいのだとされるのである。「甘え」という言葉を使うならば、「甘え」を許すことはどんどん際限なく「甘え」で無理難題を言うようになるという考え方が、「甘え」を許すことによって「甘え」ないでも安定する子どもになるという発想に転換したということである。そこには心理学の成果や子ども観の変化等、様々なことが関係していると言われているが、いずれにせよ、アドヴァイスが180度変わりうるものだということは注目に値する。

無論、アメリカの育児書は「甘え」という言い方をしていない。しかし、そこで指されている行為は、「甘え」の概念によって説明できるものであろう。

つまり、「甘え」を「日本」独特のものだという主張は、「甘え」がとらえているような状況を赤ん坊を越えて受容するような日本の文化のある面を表しているのかもしれないが、それは、不変なものでもなければ絶対的なものでもない。どのような対象に対して使っているのかとか、いつのことだとか、

もっと細やかな理解をしないといけないということである。

一つの国の中でも違う「甘え」

前の節では日本に対してアメリカを例に、「甘え」の文化差と誰に当てはまるのかを考えた。しかし、ここで一步進めてみると、実は「甘え」の概念は、日本では赤ん坊から大人まで使われ、否定的な意味で使う場合もあるが(「あの人は甘えすぎだ」)、肯定的な意味で使うこともある(「あなたに甘えたい」)。後者には「甘えられる」ような近い関係だという意味がこめられているのであろう。同時に、女性が男性に対して言う方が「しっくり」と来るのだとすると、それは、おそらくジェンダー間の依存(従属)関係のあり方を反映しているのであろう。

いずれにせよ、前の話にもどると、夜泣きのアドヴァイスで赤ん坊に関しては大転換して「甘え」の行為を肯定するようになったアメリカであるが、それは赤ん坊の話であって、大人の話ではない。発達初期の赤ん坊は別にせよ、小学校、特に中学校になって「甘え」ているのは、依存しなければ安定できない弱さを示唆している。

しかし、アメリカの中でも、協調的な関係、共感関係によって特徴付けられるという主張がなされる民族・人種集団もいる。

例えば、個人主義的、競争的な学習方法(従来のアメリカの方法)に対して、協調的な学習(cooperative learning)の優位を主張する人々がいるが(Johnson and Johnson, 1999)、その時に民族差として注目されるのが、例えば、アメリカの主流よりも、協調的な学習方法が自分の文化に近いとされるアメリカ先住民等である。アメリカ先住民は互いに競争して自分の優位を示してゆくよりも、お互いの主張を認めてゆくような学習方法が文化に適合し、学習スタイルにあっているとされる。「甘え」がこうした相互依存性や共感能力、協調的關係等と関連性が高い概

念だとすると、民族差等のその人の文化の差によって、一つの国の中でも「甘え」との親和性に差があるということになる。

さらに他の視点から例を挙げると、筆者はアメリカの貧困地帯の学校に観察しに行くことが多い。そこで「甘え」に関連した例を挙げてみよう。

昨今、アメリカでは性的虐待やセクハラが問題になり、特に若い男性の先生が女兒の児童生徒に身体的に近いことをすることは訴訟問題にもなりかねない。そこで、触れない、疑いをかけられるようなことをしない、というような指導が先生方にされる場面が多くなった。

だが、この原則にしばしば沿わない学校がある。マイノリティを多く抱える学校に行った時のことである。校長先生自ら、通りすがりの小学生の子どもたちを一人一人ハグしていた。「家庭でこうしたスキンシップが得られないから、学校で与えるのはとても大切」。訴えられるのが怖いかと聞くと、訴えられないために自分がこの子どもたちにとって大事だと思う身体的な接触ができないなら、教師である必要がないというもっともな答えが返ってきた。児童は先生にペタペタついてまわり、だだをこねたり「甘えている」のである。そして、それに対応することが、安心感を生む、心理的に安定させると先生方は考えているのである。本来であるならば、個人主義的な文化の中ではもっと前に通りすぎるはずであった段階を学校が補っていると考えている。

こうした観点から日本人の「甘え」を振り返ると、それは、日本とアメリカのような国の文化差だけでなく、国内の文化差や格差(上記の例では幼少期に甘えることを許されない子どもたちだと教師が判断)、あるいは、誰が誰に依存関係を持つことが許容されているのかとか(ジェンダー等)、多岐にわたる側面が関係してくる。実践に関して言えば、単純に「甘え」を許す、許さないの問題ではなく、どのような背景を経てきた子どもに何が必要かの判断、

どのような大人像を目指しているのか、どのような対人関係をよいと考えているのかによって、どのような「甘え」を支え、支えないかは変わってくる。

「開かれた甘え」へ

アメリカとの比較で日本の「甘え」について考えるというのがこのテーマであった。アメリカは個人主義だから「甘え」を否定し、日本は文化的に「甘え」をいつまでも許す集団主義である、と言い切ってしまうと、わかりやすいのかもしれない。しかし、実際はとてもそのような単純なものではないことを見てきた。

最後に、日本の従来の「甘え」は同質的な閉じた集団、村落共同体的なものを想定していたと思われる。そこには、知り合い同士支え合う温かさがあるが、外の人を排除する上で成り立っている面もあるのではないだろうか。

これから、少子高齢化、グローバル化の中で日本の中は必然的に多様化する。閉じた「甘え」でなく、多様性を認めた、「開かれた甘え」こそが、次の時代の日本の実践の場が必要とする「甘え」の論理であろう。

これは、「甘え」が日本社会の特徴として、「共感」や「絆」というような、言わないでもわかるような近い関係であったり、情緒的なつながりと一緒に語られる語であることからもうかがえる。

だが、多様な人々によって構成されている集団は、前提としていることが各々、違うため、少なくとも最初は説明しなければ相手にはわからない。考え方も利害も違い、相互の葛藤もある。よって、村落共同体のように、同質的でいつも一緒にいるために言わないでもわかる、対立するのではなく、調和することによって利害が保たれるような集団と違い、異質な人々によって成り立つ集団では、多様性に対して寛容になり、違いをエネルギーへと転換してゆけるような能力が必要になってくる。

多様性を肯定し、相手の違いを理解しながら距離を縮めてゆくことは、自分の中の偏見やステレオタイプと向き合うことを意味する。そうした中で育成される相互依存的関係を「開かれた甘え」として、従来の「甘え」と区別する必要があるだろう。

参考文献

- 土居健郎 (2007). 『「甘え」の構造』(増補普及版) 弘文堂。
- Johnson, D. W., & Johnson, R. (1999). *Learning together and alone: Cooperative, competitive, and individualistic learning* (5th Ed.). Boston: Allyn & Bacon.
- Lebra, T.S. (1976). *Japanese patterns of behaviour*. Honolulu: The University of Hawaii Press.
- Shimahara, N. & Sakai, A. (1995). *Learning to teach in two cultures: Japan and the United States*. New York: Garland.
- 恒吉僚子&Boocock, S. (1997). 『育児の国際比較』日本放送出版協会。
- Yamaguchi, S. (2004). Further clarifications of the concept of Amae in relation to dependence and attachment. *Human Development* 47, pp. 28-33.
<https://pdfs.semanticscholar.org/0fad/056b92cb495891f0d4934e48e5b591c4240d.pdf>, March, 2019.

キーワード：非認知的能力

教育分野において「非認知的能力」の重要性が国際的に唱えられるようになってきている。21世紀においては、職場でさえも協働性が必要であるとされ、国際学力テストで知られるOECDのPISA(学習到達度調査)が2015年から協働的問題解決(Collaborative Problem-Solving)のテストを始めたのは、こうした非認知的な能力の重要性が国際的に再認識されていることを示す象徴的な例である。また、社会・感情面の発達の大切さも強調されるようになり、社会情動的スキルの育成も重要性を増している。



Ⅱ 現場での「甘え」とその対応

たくさん甘えていいんだよ！ ～わたしたち里親家族～



里親 さかもとようこ
坂本洋子

被虐待児だった子ども

「休みの日に子どもが映画を観にいきたいと言ったら行かせますか？」

ある専門学校で講演した際に受けた質問だ。なぜそんなことを聞くのだろうかと訝しく思いながら、「はい、行かせますよ」と答えたら「へえー、そうですか」と驚かれた。あの時感じた大きな違和感をいまも忘れることはできない。

質問した彼は、社会的養護にある子どもたちが休日に映画を観に行くのは贅沢なこと、そんな願いを里親が聞くはずがないと思っていたのだろうか。彼こそどんな育ち方をしたのか、むしろそちらのほうがとても気になったものだ。

里親として大切なのは子どもに信頼してもらえ大人になることだと考えている。子どもたちは傷つき、满身創痕で我が家にやってくる。そんな子どもたちが甘えを表現できるようになったときは、やった！！と心が大きな叫びを上げる。

彼は4歳になったころに我が家にやってきた。自宅ではこの子はあまり食べないのだと母親は周りに言っていたようだが、そうではなかったようだ。

我が家で数年を過ごして落ち着いてきたころ、「冷蔵庫にはチョコレートが入っていた」と、ふと自宅での記憶を口にした。彼はいまもチョコレートが好きだ。

日常的に食べられない状態の子は、次にいつ食べられるかわからないからなのだろう、食べられるときに食べられるだけ食べてしまう。これまで18人の里子と生活を共にしたが、彼の食べ方は壮絶だった。人間不信や怒りには、他の子には見られない激しさがあつた。

彼に信頼される大人に、そして親になりたいと、真剣勝負の日々は続いた。紆余曲折はありつつも小学生のころになると、彼は自分のしたいことをはっきりと口に出せるようになっていた。私はどんな願いも聞いた。時間をかけて、わがままは言ってよいのだと心に染み込ませようと努めた。やがて、持って生まれた飄々として陽気な性格にも助けられ、少しずつ人に頼ることを知り、自信をもって生きられるようになった。

鉄道が好きだった彼は、幼稚園のころから時刻表が友だちだった。時刻表にある駅名で漢字を覚え、地名が載る天気予報にも興味を持ち、やがて登校前に新聞を読むようになった。行きたい温泉、乗りたい新幹線、行ってみたい場所、好物の食べ物…。彼の希望なら、小さいものから大きなものまで、どんなことも叶えた。

どんなことも叶える！？

そんなことをしているのかと、案じる方もおられるだろうか。けれども、幼いときに泣いてもわめいても感情を受け止めてもらえなかった子どもには、

甘やかしすぎということはない。子どもがわがままを言う、親に甘える、愛着を築く、は同じ円のなかにある。駄目なこととよいこと、その両方の枠組みを見せながら、子ども自身の甘えたい気持ちを満たせるなら、やがて自立心が育まれていく。

小学生のときに兄の私立中学受験を見た彼は、「僕も受験したい」と言った。兄は里子であることでいじめを受け、地域の中学校には行きたくない、私立に進学していた。

君はいじめられてもいないのになぜ受験したいのと聞くと、「僕もチャレンジしたい」と言う。

あれは究極の甘えだったのだと、いまになって思う。我が家に来たころは知的な遅れがあるとされ、言葉を話せず、気持ちの交流もない状態だった。そんな彼が8年後には塾に通い、中学受験をしたいというのだから驚きだった。「してもいいけど無理はしないでね」と、彼にはいつも声をかけた。

家庭という揺るぎない基盤があり、甘えられる特定の大人がいて、躊躇なく甘えられるようになった子どもの成長には、目を見張るものがあった。

大学は福祉に進んだ。相変わらず活字が好きで、読みたい本が大学にないと隣の大学の図書館にも足繁く通っていた。そして、相変わらず旅が好きで、時間を割いては各地を旅し、地元のおじいさんや地域おこし活動をしている方々と仲よくなった。旅というより、人との触れ合いが好きなのかもしれない。そんな彼が就職先に選んだのは、調査で一か月滞在したところのある国境の離島T島だった。幸運にも市役所に専門職採用が一枠出たので応募。社会福祉士として働き、2年目になる。

たまに帰宅するとT島の自慢話、役所で働くことの大変さ、地元消防団のこと、下宿先での生活など、話が尽きることはない。我が家での生活は「厳しさと緩さのバランスがよかった」のだそうだ。マフラーを巻くことを嫌がり、包丁が怖くて家庭科の調理実習ではいつも洗いの担当、火を怖がって花火も

できなかった。細い身体はいまも変わらないが、あの困難なスタートからよくぞここまで育ててくれたものだと、感慨深いものがある。

甘えの欲求が強すぎる子ども

「うちの犬のほうが、よほど甘えるのが上手い」と、先輩の里親はよく里子について話していた。まだ新米だった私は、そういうものかと思うばかりだったが、いまならそれは当然のことなのだと思える。子どもたちは甘え方が下手なのではなく、甘え方を知らないのだ。

初めて家庭に来た年齢、それまでどこで誰と暮らしていたのかといった事情によって、甘えの表現には大きな差がある。

甘えたくても、年齢が上がるにつれ自ら気持ちをセーブしてしまう子もいる。その場合は気長に付き合っていかなければならない。反対に甘えが噴き出し続ける子もいるので、個々に見極めが課題だ。

手をつなごうと要求する、大人に自分が好きか確認をする、食べ物やおもちゃを買ってくれるかどうかで愛を確かめる、嘘をつく、わざと大人を試す行動をするなど、甘え方は様々だが、子どもにとっては気持ちを出し切ることが大切だ。

生活してきた場所が自らの選択ではなく、大人の都合だったことからくる喪失感、ごく幼い子にとっては大きい。生みの親の存在や面会の有無は、ときに子どもの心を激しく打ちのめし、大きな傷を残すこともある。

そんな子どもたちが自分の気持ちを出し始めたときには、すべてを受け止めていこうと決めている。

それでも、我儘と甘えの見極めは難しい。休みになると、クラフトの本や人気のシリーズ本、幼児向け月刊誌など、何かしら買いたいと本屋に行きたがる子がいる。ところが、その望みは一冊で終わることではなく、本屋の次はおやつを、できたら収集しているグッズも手に入れたいと交渉が始まる。



欲しい本を伝えることは気持ちを表現する練習

そんなときは子どもの心理状態や抱え込んでいる問題などをよく考え、ここぞというラインを落としどころとして選んでいくことになるが、TVコマーシャルや雑誌から情報を得ては、「今度はこれが欲しい～」と交渉は続く。

それが誕生日ならいわずもがな。ただし、この特別な日こそは大事にしたいと思っている。

生みの親と一緒に過ごすことができなかったからこそ、お誕生日の日を盛大に祝い、生まれてきてよかった！と思える幸せな時間を過ごしてもらいたい。

乳児院時代の担当さんがくれたおもちゃと家族からのプレゼントを前にして写真に収まる、と言う。

「どうしてこんなに買ってくれたの？」と期待を込めた表情で質問する。「それは〇〇ちゃんが大好きだからだよ！」という答えを待っているのだ。



抱えきれないほどたくさんの誕生日プレゼント

期待通りの言葉を口にすると、満面の笑みを浮かべて「大好き～」と抱きついてくる。そんなお決まりのやり取りのなかで満足感を得ていく。

これは言葉が介在する場合の甘えのやり取りだが、甘えるための言葉を発することができない子どもたちもいる。

甘えに言葉がつかえない子ども

ある日、我が家にやってきた子は全く意思疎通のできない幼児だった。集団の中から家庭に引き取ってきたというのに、「こんな子は家庭で育てることは無理だ」と、専門家と呼ばれる複数の方々は悲観的に言った。

何を言われたのかも理解できない子は後部座席のチャイルドシートに座り、声をたてて笑っていた。バックミラーに映るその顔が悲しくて、自宅に着くまでずっと運転しながら泣いていた。

家庭は24時間一緒に、どんな味わいも共にする場所だ。この子はそこにいるチャンスを手に入れたのに、すぐに離れることになってしまうのだろうか。スペシャルニーズのある無しに拘わらず、子どもは子どもとしての居場所が必要で、愛されて育つ権利を持っている。生みの親がそれをできないときは、親に代わる人間がすればいい。そういう人間として私は手を挙げたのに、無理ってどういうこと！！

しまいには怒りさえ湧いてきたものだった。

いろいろな子どもと出会ってきたが、その子との日々は驚きの連続だった。それでも、いままで経験したことのない毎日は新鮮で、苦労とは思わなかったが、数年間は混乱状態が続いた。

夜は少しの動きにも敏感で目を覚ましてしまい、一人になることを不安がるので、トイレに行くにもおんぶをしたまま。睡眠障害のため夜中でも起きることが多く、寝入るまでずっと付き添わなければならなかった。気持ちを満たすことが大事との思いから、いつも一緒にいるようにし、スキンシップを忘れずに過ごした。やがて昼は児童発達支援に通所するようになったが、そんなある日、仲間の若いママさんが言った。

「〇〇ちゃんは坂本さんに会うために頑張って生まれてきたんだね」と。

涙がこぼれた。そうか、この子は私に出会うために生まれてきたんだ！！

子どもが望むならどんなことでもした。障がいからくる偏食が多いので、食べられるものを常に買い揃え、欲求にいつも応えられるようにした。社会性を育てるべく様々なところに連れて出るときは、事前に写真などを使って説明するのだが、それでもいざとなると雑踏で混乱することもあった。水族館、遊園地、大きな公園、海、

テーマパーク、家族みんなで楽しさや驚きを共有する時間を持ち、お土産コーナーで欲しいものを選ぶ経験も重ねた。すると自分が欲しいもの、したいことを要求できるようになり、サインで伝えてい



大きいお兄ちゃんの肩で広い海を見る

たことも単語で要求できるようになった。

「ひまわり」とあやふやながら発音できるようになった時には、プランターではない圧倒的な一面のひまわりを見せたくて「全部ひまわりだよ、すごいね!」と、ひまわり畑に連れて行った。

私にしがみついていた小さな手は、いまは「かーか」と私を引っ張って階段を上がり、寝室に行く。しばらくは遊び時間と決めているので「ちょちょよ…」と言うと期待マックスの顔で身をよじりながらすぐられる瞬間を待っている。ちょちょよをしばらく楽しむと満足し、横になり歌っているが、残念ながら何の曲かがわからない。じっと聞いていると思えば当たるフレーズがあり、その部分だけ一緒に歌うと、こぼれんばかりの笑顔が向けられる。

可愛がりすぎて悪いということはない。子どもは愛され、甘え、充足した気持ちになり、「自分は大切な存在」なのだと思ったとき、その安心感を自信に変えていく。家庭では養育が無理だと言われた子どもでも、やがて気持ちを伝えたり、甘えたりすることができるようになる。



「ひまわり」と言えた夏に見た一面に咲くひまわり

子どもの自己肯定感を育ててこそ

子どもにとっての甘えは、自己肯定感を高めるきっかけになり、前向きに生きるパワーの源になる。スペシャルニーズの有無や過去の出来事のすべてを覆い隠せるとは思わないが、心のなかの影を光に変えられるようになる。そうなれば他者にも優しさと勇気を分け与えることができる。そのことを、私は子どもたちから学んだ。

この家で甘えることの自由と安心を享受した彼は、大学を卒業すると同時に、勤務地となるT島に自ら住民票を移した。あれから1年半が経つが、巣立つ日の朝、彼が残した言葉をいまでも大切にしている。

「お母さんにしてもらったことは、お母さんじゃなく、これから出会う人に返していくからね」

これから出会うはずの小さい人たちのなかに、彼はかつての自分の姿を見ていくことだろう。

「もちろんだよ。それでいい」

彼との18年の生活が結実したと、私は思った。

愛がこうして循環していくことを願っている。

キーワード：自己肯定感(セルフエスティーム)

2019年6月に発表された「子ども・若者白書」によれば、日本の若者の自己肯定感は諸外国に比べて低く、欧米など6か国との比較で最も低かった。社会的養護にあるか否かによらず、自己肯定感とは生まれついたありのままの自分を受容する気持ちで、その基盤になるのは、乳幼児期に両親や大人から権利の主体として尊重され、安心して自己表現と選択ができた経験から生まれる自尊心と考えられている。

Ⅱ 現場での「甘え」とその対応

児童養護施設における 子どもの「甘え」とその対応



児童養護施設 和敬学園 臨床心理士 すぎやま ふみえ
杉山史恵

はじめに

児童養護施設で社会的養護のもとに生活を営む子どもたちと日々関わっていると、生き活きとした情緒的表現や発信が、ある種の場面では伸びやかさを失い、時に裏腹に発信され、時にその子の内面に封じ込められた姿に遭遇することが多々あります。その様子を前にすると、子どもたちなりに状況に対処し、人間関係を構築してきたのだろうと感じさせられます。その契機となる場面は子どもそれぞれによって異なりますが、往々にして「甘え」が発動するような状況下では個々の子どもの体験してきた生育史や養育者との関係性が、その子の行動に表出されると考えています。

1. 肝心な時に甘えられない子どもたち

児童養護施設には、すぐに職員や大人に関わりを求めてくるタイプの子どものたちがどこの施設にも一定数いると思います。特に用事や話したいことがあるわけではないのですが、「ヒマー」「聞いて」と事務や家事をしている職員の後ろをついて回ります。時には腕を絡めたり、おんぶを求めたり、といった身体的スキンシップを求める姿もよく見られます。このような子どもは一見、コミュニケーション能力に長け、甘えを素直に表現できているように見受けられます。しかし、よくよく観察していると、そうした子どもの中には“本当に自分が困っている時”

には職員に関わりを求めてこない子どもがいるのです。A君のエピソードを紹介します。

A君(高校生)

施設入所歴も長く、どの職員にも話を聞いてほしがり、疲れやしんどさは八つ当たりのように発信することから、職員間では“甘えん坊”として認識されていました。困ったことがあればすぐに話してくると職員も考えていたのです。ところが、アルバイトを始めてしばらくすると、日々の様子から“元気がないようだ”と報告が上がるようになります。職員に対してもイライラをぶつけるばかりで、以前のようにベタベタとついて話し回る姿が見られなくなり、職員と過ごす時間は減っていきました。

その間、何が起こっていたのか。3か月程後になってA君は私との面接の際、バイト先で店長からかなり厳しいパワハラに遭っていることを話します。話し出したら嗚咽が止まらないほどの号泣で、今まで自分の心の中に納めようと抱えていた苦しみや悲しみが一気に溢れ出てきたのです。そして、面接で明らかになったことは、A君は“頼ってはいけない”“自立に向けてこれくらいは我慢しなくてはいけない”“バイトは続けなくてはいけない”と固く信じて、一人で問題に対処しようとし続けていた事

実でした。私はA君に対して、現実的な助けを求めてもよいこと、職員を頼ってよいこと、子どもとして大人に守られる権利があることを説明し、彼の信頼のおけるB先生と一緒に状況を説明することを提案し、すぐにB先生を含めての面談を実施しました。B先生は嗚咽を漏らすA君の隣で話を聞き終えると〈明日からそのアルバイト先には行かなくていい、むしろ行くことをやめなさい〉〈置いてある荷物も僕が取りに行くし、保護者としての連絡も僕がするから。よく頑張ったし、よく話ができだね〉と声をかけました。A君は私とB先生の顔を不安そうに見上げ、「絶対に、簡単にやめたらあかん、もう少し頑張ってみなさいって言われると思ってた」と呟きました。

本当に怖い時、困っている時ほど、身体が固まり、自分の内面に生じた不安を一人で抱えようとする子どもは年齢を問わずいます。普段はスキンシップを求め、ちょっとした玩具の取り合いでも職員を呼びつけるのに、園庭で転んだ時にはじーっと痛みが通り過ぎるのを待ち転んだことさえ報告しない幼児や、外泊や帰省が急にキャンセルされた際に、まるで平気な顔をして職員からむしろ遠ざかって過ごす児童をよく見かけます。これをアタッチメントの課題として捉えると、社会的養護下の児童がいかに自分の不安やネガティブな感情を他者に発信することに対して難しさを抱えているかという事実と直面します。アタッチメント行動の生起される場面で、子どもたちがそれぞれどんな行動をとるのかを、細やかに観察し、子どもたちの不安が調整され、安心感が培われていくように、時には養育者の側から声をかけ、安心できる状態と一緒に探索していくような働きかけは子どもたちが率直に他者を頼り、甘えられるように育っていく上で欠かせないのではないかと考えています。

A君もまさしく、助けを求めてもよい状況にあるにもかかわらず発信することはせず、自分で抱えて対処しようとしていました。A君の場合は、長年にわたり児童養護施設で生活をする中で、年長児を見ながら“自立に向けて準備をしなくてはいけない”と感じ、“このくらいのことは我慢しなくてはいけない”という思い込みが働いていました。“自立”は当然のことながら施設からの分離、職員との別離がセットで脳裏にあったのです。子どもは養育者に教えられたこと以外にも、環境や周囲の児童の状況からも多くのことを吸収し、自分の中で咀嚼し、思い込むことがあるということを養育者の私たちは知っておかなくてはならないということをA君に気づかされました。また養育を担う私たちの側にも、大切に育ててきたからこそ“将来に向けて準備させないと”という焦りや心配が生じているのです。“あと数年しかない”という不安は、養育者と子どもの両者に生じる感情です。三者面談の後、A君は実は今まで困っていて、一人で対処してきたことをB先生に雑談を交えて話すようになりました。以前の雑談では漠然とした不満や不安として語られていた内容に具体性が盛り込まれるように変化したことにより、B先生もA君の頑張りを見守ることと、具体的に手助けをする部分のバランスが見極めやすくなり、二人三脚で自立の道を歩んでいきました。A君との三者面談を振り返り、B先生が「自立を考えてアルバイトをするように伝えていたが、こちらでもA君なら頑張れている、何かあれば言ってくるだろうとA君に甘えていたかもしれない」と語っていたのがとても印象的でした。

2. 不安が攻撃的な行動に変化していく子どもたち

児童養護施設の中で遭遇する甘えの中には、暴力がセットの場合も少なくありません。「～してくれないなら殴るぞ」、「お前のせいで壁に穴があくしな」などの脅しや暴力によって、力づくで目の前の受け

入れ難い事実を自分の望むような現実に変化させようと、必死であがく子どもたちです。暴れて地団太を踏むのが乳幼児年齢ならばまだしも、思春期を迎えた子どもたちの脅しや暴力は養育者や周囲の児童に不安を与え、結果として甘えた(暴力をふるった)本人も傷つきます。そして暴力をふるった罪悪感から、自己の「見捨てられ不安」を埋め合わそうと、表面的な甘え(職員に対して要求がましくなったり、職員にくっついて受け入れてもらえるかを試すような行動)が一時的に増えるのです。当然、職員の側には都合よくべったり甘えられる感覚と、怒り出したら暴力さえも正当化(もしくは他責化)する子どもの相反する態度に困惑した感情が生じ、ますます子どもの状態を受け入れがたくなるという悪循環が生じていきます。こうした子どもたちの姿は、自分の欲求に叶うように母親が応じてくれない時の赤ん坊の怒り泣きを思い起こさせます。そして思ったように養育者が応答してくれなかった不安や悲しみを攻撃としてぶつけることで、自分の望むような現実に変化させようと必死でもがいているように感じるので。Cちゃんのエピソードです。

Cちゃん(小学3年生)

イライラしだすと周囲にビリビリしたムードを撒き散らし、みんなが沈黙してしまうような雰囲気醸し出す、そして暴言が止まらなくなるような気性の荒さを抱えていました。とても几帳面な性格に加えて、不安にかられやすく「どうしたらいいの？」が口癖です。彼女の「どうしたらいいの？」に対して、〈自分で考えてごらん〉と応答したり、〈心配なんだね〉などと応答しようものなら、「なんやねん、お前」、「黙れ」、「消えろ」などの暴言が飛んでくるのは日常茶飯事で、自分のネガティブな状態や感情を受け入れられない様子が顕著に見られていました。宿題などでわからない所があると職員

にお茶をかけるなど、不安や恐怖は怒りに変換され、怒りのスイッチが入るとおさまりのつかない印象を与える女の子でした。

そんな彼女が私との面接に来た時のことです。とても難しい折り方のリスを作り始めますが、完成できずに面接時間は終了してしまいました。ところが、いつもはすっと退室する彼女が面接室を出ようとせず、いきなり暴言の嵐が始まったのです。次の面接で完成させようと伝えても怒鳴る、完成しなくてがっかりした気持ちを理解したことを伝えても物を投げるの大荒れです。私は必要以上に彼女の怒りをなだめたりせず、淡々と面接の時間が終了していること、怒鳴っても投げて時間終了したことは変わらないこと、次回も待っていることを伝えてドアの前で待つことにしました。すると数分後、聞こえていた暴言が悲鳴のような泣き声に変化していったのです。うずくまり泣き始めた彼女に退室できない理由を尋ねると、とても小さな声で「学校の友達に折ってきてあげるって約束したんや」と。ようやく、彼女が何に困っていたのかが伝わってきました。生真面目な彼女は面接室の中で必死に折り方を覚えて、自分の部屋の折り紙でもう一度作り、友人にあげたいと思っていたのです。ところが、折り紙は完成しない、思った以上に折り方が複雑だったため自分では対処できないと感じ、実は困っていたのです。その結果、怒って脅すことで受け入れがたい現実を彼女の望むような現実にしようと必死だったのです。担当のD先生に困っていることを伝えて、一緒にリスを折ってもらえるようお願いしようとCちゃんに伝えると、コクリと頷き、静かに立ち上がりました。

子どもの要求したことに対して現実的に添えない場面は、子育てに多々あります。また、子どもの要

求を受け入れ続けることが不適切な養育につながっていく場面も同様です。そうした場面では子どもと養育者の間に、ある種の緊張状態が生まれ、子どもは自分のことを大切にしてくれる証のように自己の要求を養育者に突きつけます。一方で養育者には、そうした子どもの試し行為に揺さぶられずに子どもの存在を大切にすることは、要求を叶えることだけではないと示し続ける毅然とした態度が求められます。通常は乳幼児期に養育者との間で繰り返しこうした緊張状態を体験し、子どもは養育者の適切な対応によって情緒的に満たされながら、叱られたり現実的な要求が叶わない場合にも、自分は大切にされているという感覚を積み上げて心の膜を成長させていきます。

しかし、児童養護施設に暮らす子どもたちの多くは、安心できる関係性の中で上述したような養育者との緊張状態を体験する機会に乏しく、時には自分が大切にされる存在ならば要求を満たしてくれるはずだという思い(裏を返せば、自分は大切にされる存在ではないという不安)を施設の養育者にぶつけます。こうした子どもたちと対峙する時、まずは子どもたちの振る舞いに圧倒されず、怒りの背景にある子どもたちの不安や恐れをキャッチしながら、現実的な対応を一緒に考えていく姿勢が養育者には求められます。

Cちゃんは、現実的な困りごとを発信できず、怒って暴れることで彼女なりに現実に変化を生じさせようと対処していました。私は彼女が現実を変えられないことに気づいた時の悲鳴のような泣き声が忘れられません。本当に悲しく、見守る側も彼女の悲しみに共に耐え、寄り添うことに加えて、彼女が安心できるような現実への対処を提供できるように考える必要がありました。

D先生と一緒にリスを折ってもらった次の日、Cちゃんは友達にリスをあげたことを嬉しそうに報告し、一緒に喜んでもらっていました。アタッチメン

ト行動が怒りから悲しみが変わり、困っていることを言葉にできたことにより、現実的に養育者に助けられて安心感を得る体験を積むことにつながっていたのだと思っています。

さいごに

児童養護施設で子どもたちの養育に携わっていると、子どもたちがこちらの予想以上にアタッチメント行動が喚起されるであろう場面において、自分で状況や自身の情動を調整し、ある意味で自己完結的に不安や怖れに対処していることに気がつかされず。子どもたち個々の対処方法は様々ですが、どの子にとっても、個々のアタッチメントパターンに気がつき、不安を率直に発信できるように支援すると同時に、不安を養育者に発信したことによって現実的に子どもたちが助けられたという具体的な体験をどう積み上げていくかが重要だと考えています。そうした体験は将来的に子どもたちが他者に自分を委ね、頼ることができるような、甘えられる力を育むことにつながっていくと感じています。

※エピソードとして用いた事例は、実際の事例を改編しています。

参考文献/引用文献

- 数井みゆき・遠藤利彦 [編著]、2007「アタッチメントと臨床領域」ミネルヴァ書房

キーワード：アタッチメント

John Bowlby(1907-1990)は、個体がある危機的状況に接し、あるいはまた、そうした危機を予知し、恐れや不安の情動が強く喚起された時に、特定の他個体への近接を通して、主観的な安全の感覚を回復・維持しようとする傾性をアタッチメントと呼び、その主要な対象は少しずつ変えつつも生涯存続し、機能し続けるものであると把握している。

II 現場での「甘え」とその対応

善友乳児院における 「甘え」対応と愛着形成



社会福祉法人 善友隣保館附属善友乳児院 院長 ^{まつお}松尾みさき

乳児院の暮らしの中では、「甘え」という言葉が至る所で聞かれます。子どもたちが養育者に対し「甘え」を出すことができはじめて、子どもと養育者との関係を築く第一歩ではないかと、感覚的にどの職員も感じてはいるものの、これまでしっかりと向き合う機会がありませんでした。

○乳児院で出会う子どもたちと「甘え」

乳児院で出会う子どもたちは様々な背景を背負っています。子どもの中には、実家族の中で自分の気持ちや言葉を自由に表現することを許されない環境に置かれていたために、屈折した形でしか甘えや気持ちを表現できない子どももいます。そのため養育者は、乳児院という安全で安心な環境の中で、“素直に自分の感情を出していいんだよ”という姿勢で子どもの内側に秘めている思いや感情を“引き出す”ように努めます。「こんにちは。よく来たね。乳児院の〇〇だよ」「怖かったよね、うんうん、泣いていいんだよ」と子どもの気持ちを代弁します。ケースにもよりますが、保護者が入所に立ち会えた時は、お子さんをお預かりする際、“別れの場面”を大切にしています。「頑張ってるね」「迎えに来るから待っててね」「幸せになってね」といった言葉を保護者からかけてもらい、抱きしめてもらったり、タッチしてもらったりして、家族の絆を確かめ合えるようにしています。もちろん、別れる際に激しく泣き拒



善友乳児院

絶する子もいますが、その気持ちを受け止め寄り添います。入所した日はしばらく養育者と1対1で個別に過ごし、乳児院の中を一緒に探検したり、お友だちのいるお部屋をのぞいてみると、少しずつ慣らしていきます。住み慣れた環境から突然離され、不安なお腹が空いていても「ご飯、食べたくない」と話す子どももいます。そのような時は、無理せず「そうだよね、いやだったよね。お腹が空いたら食べようね」、着替えも「触らないで」と言う子どもには「いいよ、いいよ、無理に着替えなくて大丈夫だよ」と子どもの気持ちを尊重します。このようなやりとりを繰り返すうちに、子どもの方から「あっちにいきたい」や「抱っこがいい」という欲求のような、甘えのような姿が出てきます。また、入所してきたばかりの子どもは、夜の入眠時に最も強い不安を抱きます。いつもと違う部屋の臭いや布団という環境の中で、「ママー」と母親を求め泣き

出す子どももいます。そのため、家庭で入眠する際の様子を聞き取り、優しくトントンか身体をさするのがいいのか、縦抱きか横抱きか、大好きなタオルやぬいぐるみと一緒に眠るのかなど、できるだけ子どもが安心して眠れるように努めています。

土居健郎先生は著書『「甘え」の構造』の中で、「人見知りや、乳児が母親を見知って、他の人と区別することである。これは母親が乳児にとって必要であることを乳児が知覚するようになるからであるが、このことはいいかえてみれば、乳児が母親に甘え始めることである。」と書かれていますが、一般的に人見知りが出てくるとされる月齢の子どもたちが、乳児院に入所する際の姿に違和感を感じるが増えて来ました。子どもにとって一番不安が強い入所時に、あまりにも素直に、何の警戒感もなくすんなり新しい環境に適応してしまう、人見知りや場所見知りをしない子どもが増えてるように感じます。加えて、虐待を受けてきた子どもたちの中には、誰にでも“抱っこ抱っこ”や大人に“ペタペタすること”を過剰に求める姿が見られます。こうした行動もまた屈折した甘えの表れと言えるかもしれません。乳児院の養育者としてはどうにか健全な甘え方に変えていけないものか、模索と試行錯誤が始まります。入所以前の養育の状況について、子どもたちがどのような環境で育てられてきたのか、また、家族との関係はどうだったのかなど、様々な職種を交えてアセスメントを行い、子どもとのかかわり方や養育方法について検討を行います。同時に、乳児院の中で子どもが一番自分を委ねられる大人(担当養育者)を早急に選定します。担当養育者や所属する部屋の養育者を中心に、子どもの様子を細やかに観察し、甘えを引き出せるよう声かけをしたり、子どもの気持ちを受けとめ代弁したり、1対1での個別の時間を可能な限り持てるように、乳児院全体として働きかけるようにしています。あくまでも子どものペースに合わせながら、時間をかけて少しずつか

かわりを増やしていくうちに、子どもの方から「こっちの絵本イヤ。こっちの絵本よんで」「抱っこしてちょうだい」「(担当養育者)じゃなきヤダメ」などと少しずつ甘える姿や後追いも出てきます。勤務上、担当養育者がいない日や時間に、子どもが担当養育者を求めた時には、「夜になったら来るからね。一緒に待ってようね」や「ひとつねんねしたら、来るからね。(担当養育者)が来たら、今日〇〇したことを教えてあげようね」と乳幼児にもわかる言葉や表現で、ある程度見通しが立てられるような言葉かけをしたり、寂しい気持ちを少しでも軽減できるように、その子どもが好きな遊びをしたり、音楽をかけたり、散歩に出かけたり、身体を使った遊びを促したりします。

○子どもが生き抜く力としての「甘え」

土居健郎先生は「甘えを呈するようになるのは、母親と他の人の違いを認知できるようになってから」とされていますが、乳児院の子どもたちを見ると、新生児であっても、「甘え」という感情の原型をしっかり持っているように感じます。赤ちゃんは話せない分、「おなかすいた」「おしりが気持ち悪い」「だっこしてほしい」などの欲求を泣くことで表現します。こうした行為も大人に向けた「甘え」という感情が基盤になっているように感じます。“赤ちゃんの生きる知恵”ともいうべき、素晴らしい能力です。

○個々の甘えに丁寧に応えていく

敏感な子どもの中には、眠ることが苦手で、抱っこしながらようやく眠ったと思っても、抱っこから降ろした瞬間に目覚め、再び泣き始める子どももいます。当院では泣きが治まり、その子どもが入眠するまで、可能な限り子どもの求めに応じた対応を心がけています。同時に、子どもの好きな体勢や入眠時の大人のかかわり方(縦抱き・横抱きのどちらが



担当養育者手作りのお洋服で誕生日のお祝い～2さいってむずかしいね～



抱っこは気持ちいいね

よいのか、トントンか、さするのが好きかなど)を日々模索、記録し、“縦抱きが好きなようです”や“トントンじゃなくてさする方が好きみたいです”といったように、養育者同士で情報交換を活発に行います。また、哺乳瓶から上手にミルクを飲むことができない子どもやミルクが苦手な子どももいますし、一人ひとり好みがあります。当院のやり方を一方的に押し付けるのではなく、一人ひとりが心地よくミルクを飲んだり眠ったりできるよう手探りしながら対処することも、子どもの甘えを受け止める一つの方法、すなわち自分が受容される存在だと確認する経験の一つだと考えています。

○乳児院というコミュニティの中で見せる様々な甘え

乳児院の暮らしに徐々に慣れてくると、子どもによっては過剰に甘える姿を見せたり、対応する養育者によって見せる姿が変わる子どももいます。子どもたちは、年齢や性別、職種の異なる職員個々によって甘えの出し方も変えています。これまで当院の養育について検討する際、私たちは子どもたちが大人によって甘え方や言葉、行動が異なることを良いことと捉えられずに来ました。しかし、一般家庭の子どもも同じように、両親や祖父母、親戚や近所の人といったように、自分との関係性や距離感をきちんと認識し、甘えの出し方を変えています。そのよ

うにして子どもたちは様々な人のかかわり方を覚え、社会性を身に付けていくものではないでしょうか。そう考えると、乳児院はとても大きな家族(小さなコミュニティ)であり、様々な人が子育てに携わる場所であると言えます。担当養育者がいない時、いる時にかかわらず、職員全員で子どもを守り、子どもの気持ちや声に応えていきましょう、というのが昔から当院の素地としてあります。そのため当院では、交代勤務であるデメリットを補うべく、子どもの体調はもちろん、表情やしぐさ、言葉、行動、甘えを含めた情緒面等々、きめ細やかに各部屋のノートに記録するほか、朝と夕の引き継ぎで伝え、その都度何が背景にあるのか、また子どもが何を欲しているのかなど、詳細な情報も共有しあい職員同士で話し合うことが多いように感じます。

○施設という課題～様々な制限をどう克服するか～

一方、同じ院内でも、保育観の違いから「甘やかし」と捉えてしまう養育者もおり、担当養育者の悩みとなってしまふことがあります。関係性がしっかりできていればいるほど、子どもの甘えが強くなり、後追い等が強くなる出てしまうことがあります。また、遊びの時間や暮らしの中でも、担当養育者を独り占めし甘えたくて、上手く切り替えができず、お友達にその感情をぶつけてしまうこともあります。複

数の子どもたちがいる中で、一人の子どもの甘えや欲求だけに、その場でじっくり対応できないことが乳児院の養育者の大きな悩みの一つでもあります。養育者が“もっと甘えさせてあげたい、子どもが満足するまで一緒にいてあげたい”と願っても、時間や勤務といった様々な制限があり、常に可能という訳にはいきません。当院の養育者も長年、その課題に向き合って来ました。その結果、少しでも子どもたちとじっくり向き合うべく、担当養育者との個別時間のとり方やルールを決め、退勤後にかかわる時間を設けたり、沐浴や授乳・食事の時間を個別時間として確保するなど、周りの職員も意識し配慮・協力することで少しずつ可能になってきました。施設である以上、様々な制限がある中で、どうしたら子どもたちの甘えに十分応えていけるか、常に模索しています。

○里親交流の中で見られる甘え

子どもたちが乳児院で暮らす時間は限られており、里親交流や家庭引き取りに向けた面会交流を行う子どもたちがいます。里親交流では、素直に甘えを出せる子もいますが、試し行動(屈折した甘え)として表す子どももいます。里親の中には、乳児院の養育者にはそのような姿を見せないのに、自分には試す姿を見せることで、“私のことが嫌いなのか?”と悲しくなってしまう方もいます。しかし、試し行動が出るということは、子どもが里親をしっかりと受け入れたことの証しであると私たちは考えています。交流が進み、里親宅への外出や外泊を行うようになると、子どもは里親を不安な時や怖いと感じた時に守ってくれる人、くっつくことのできる人としてしっかり認識するようになり、子どもと里親の関係はさらに深くなっていきます。一方、担当養育者や里親支援専門相談員は、子どもに対し、いずれ里親宅で暮らすことを写真や絵を使いながら、少しずつ伝えていきます。その中で、子どもは「(里親)のと

こに行くのはイヤ。(担当養育者)とずっと一緒にいたい」と駄々をこねたり、赤ちゃんのように担当養育者に抱っこしてほしいとせがむこともあります。担当養育者は子どもの思いに寄り添いながら、二人だけの時間の中で、「ずっと〇〇ちゃんのこと見守っているからね。ずっと〇〇ちゃんのこと大好きだからね」と伝えながら、子どもの不安な気持ちと甘えたい気持ちをしっかりと受け止めていきます。担当養育者は里親委託の日まで、子どもの気持ちを少しずつ里親へ向けるように促し、自身の存在を徐々にフェードアウトさせていきます。里親委託後も、委託して終わりではなく家庭訪問等を行い、子どもの成長を見守っていきます。

○児童養護施設への慣らし保育～退所後に見せる甘え～

児童養護施設へ措置変更になる子どもに対しても同じように、担当養育者からお引越しの日が近づいていることを少しずつ伝えていきます。児童養護施設への慣らし保育を行う中で、担当養育者と一緒に、お引越し先のお友だちや先生方と交流する中で、どの子もお引越しを楽しみにする反面、不安が入り混じります。情緒が不安定になり、お友だちに気持ちをぶつけてしまったり、養育者を独り占めしたくなったり、おもらしなどの行動で訴えたりと不安に伴う甘えが出てきます。お部屋に入った養育者を中心に、不安な様子やいつもと異なる様子を詳細に情報共有しながら、不安な気持ちや屈折した甘えもひたすら受け止めていきます。また、子どもが少しでも気分転換ができるよう、クッキングや外出などの行事も取り入れています。これまでは児童養護施設へ措置変更すると、その後担当養育者が面会に行くことは殆どありませんでした。しかし、子どもにとって一番の安全基地だった担当養育者との関係を大人の都合である日突然断絶することのないよう、退所後電話でお話したり定期的に児童養護施設への訪問を行っています。乳児院の担当養育者と会うことで、



みんなで動物園に遠足～どんな動物が出てくるかな～



絵本の読み聞かせ。お話に夢中になる子どもたち

素直に甘えを出せず拗ねたような態度で迎えてくれる子どももいれば、「一緒に帰りたい」と泣いて訴える子もいます。お引越し先でも、大好きな乳児院の担当養育者と会うことができるという安心感や見通し、希望を子どもたちが持つことで、子どもが児童養護施設の養育者と良好な関係を結ぶ一助になればと考えています。



退所しても
担当養育者のことが大好き

○甘えと愛着形成からみる乳児院の役割

土居健郎先生はまた「甘えなくしてはそもそも母子関係の成立が不可能であり、母子関係の成立なくしては幼児は成長することもできないであろう。さらに成人した後も、新たに人間関係が結ばれる際には少なくともその端緒において必ず甘えが発動しているといえる。その意味で甘えは人間の健康な精神生活に欠くべからざる役割を果たしていることになる。」と書かれています。今回、「甘え」というものに改めて向き合う機会をいただき、乳児院は母親の代わりに甘えをしっかり受け止める大人が常にいる場所であり続けること、そして甘える経験を通して子ども自身が受容される存在であることを確信しつつ、不安な時にくっつくことができる養育者が子どもの側に寄り添える場所であり続けるという大切な役割を担っていることを改めて確認することができました。それはすなわち、子どもが心身ともに健康な大人になるための基盤をしっかり培える場所でな

くってはならないということです。施設の“制限”という課題をいかに克服し、より一層子どもたちが心地良いと感じられる養育を実践できるよう、これからも努めていきたいと思えます。

参考文献

- 土居健郎(1971年)『「甘え」の構造』弘文堂
- 土居健郎(2001年)『続・「甘え」の構造』弘文堂
- 小林隆児・遠藤利彦編(2012年)『「甘え」とアタッチメント理論と臨床』遠見書房
- 全国乳児福祉協議会編(2015年)「改訂新版 乳児院養育指針」社会福祉法人全国社会福祉協議会 全国乳児福祉協議会

キーワード：担当養育制

乳児院では、子どもの発達における愛着(アタッチメント)の重要性を考慮し、担当養育制をとっています。担当養育制は、入所しているすべての子どもに対し、母親に代わって子どもが自分自身を委ね頼れる特定の養育者(担当養育者)を選定することにより、子どもと担当養育者との間に緊密な関係の形成をめざす保育法です。

II 現場での「甘え」とその対応

国立きぬ川学院における “共に育む”暮らしと “子どもの回復と成長への支援”



あいざわたかよ
児童自立支援施設 国立きぬ川学院 院長 相澤孝子

1. 国立きぬ川学院とは

児童福祉法第44条にもとづく児童福祉施設であり、不良行為をなす、またはなすおそれのある児童および生活指導等を要する児童を入所させ、または保護者のもとから通わせて自立に向けた支援を行うことを目的としています。職員が24時間起居を共にする入所施設であること、行動上の問題を抱える児童に対して日課や生活の枠組みがあって見通しをもって生活できること、生活場面を利用した即時介入が可能であることが大きな特徴です。

国立児童自立支援施設は男女各1ヶ所で、全国からの入所を受け入れています。施設内では精神科受診や投薬が可能で、自傷や他害のおそれのある場合には、家庭裁判所による行動の自由を制限できる“強制的措置許可決定”の執行を可能とする設備を備えています。

児童自立支援施設は、明治時代の感化事業にはじまり現在に至っていますが、国立きぬ川学院は昭和36年に開設された、全国58施設ある中では比較的歴史の浅い施設です。

開院時より夫婦小舎制をとっており、夫婦の職員が家族と共に住み込んで、家庭的な雰囲気の中で集団生活を通じて支援を行っています。

2. 入所児童の特性傾向について

国立児童自立支援施設に限定したことなく、



国立きぬ川学院

最近の児童自立支援施設の入所児童の傾向として、いわゆる“非行少年”は減少し、代わって発達障害や愛着の問題を抱え、何らかの行動上の問題がある子どもが多くなっています。

感化院、教護院の時代から、貧困や社会的格差等を背景に家庭養育環境の課題から非行問題を抱えていた子どもを入所させ支援してきましたが、近年は、家庭養育環境の問題の中でも、児童虐待のみならず、家庭内外での関係性構築の課題を抱える子どもが圧倒的に多くなっています。

入所理由としては、施設不適應、暴力・暴言が最も多く、社会的養護関係施設からの措置変更ケースが7割を超えています。

背景にある家庭養育環境については、実父母のいる家庭は1割に満たず、複数回の養育者の変更を経

験している子どもの割合が非常に高い傾向にあります。また、被虐待経験のある子どもは95%とほとんどの子どもが安心安全な家庭生活からは程遠い養育環境に置かれていた子どもたちです。家出や不良交友を重ね、その中で性暴力被害にあった経験のある子どももあり、重複した深刻なダメージを抱えているケースがほとんどです。

さらに、発達障害の診断を受けている子どもも年々増加しています。子どもの特性ゆえに養育の難しさがあるにもかかわらず適切な療育や養育支援を受けることができなかったケース、経済的な問題や保護者自身の課題等の家庭環境上の問題がある中で不適切な養育環境に置かれ安定したアタッチメント関係の形成ができず、さらに学校不適応やいじめなどを経験し、いくつもの傷つきを負った子どもが大半と言えます。

入所経路としては、家庭裁判所の審判を経て児童相談所の措置決定により入所する子どもが約9割、そのうち自傷他害等のおそれがある場合に行動の自由を制限する強制的措置許可決定を受けた子どもは約8割となっています。

3. 子どもの回復と成長への支援

こうした重複したダメージを抱えた子どもが、学院生活の中でどのように回復し成長していくのかについて、図1の「子どもの回復過程」(『親子関係再構築支援ガイドライン』厚生労働省子ども家庭局家庭福祉課から引用)を参照しながら述べたいと思います。

(1) 安心・安全で予測できる生活を送る

どの子どもも入所当初は、学院に入所せざるを得なかった状況の中で複雑な気持ちを抱えています。だからこそ、入所時には、「ようこそ、きぬ川学院へ」「これまで本当にたいへんだったのではないかしら…」「不安な気持ちでいっぱいでしょう…」という思いで職員と他の子どもが、新入生が安心でき

る雰囲気を作って迎え入れることに努めています。先輩の子どもは、不安な気持ちや反発したい気持ちを抱えていた入所当時の自分が、どのようにして学院生活に慣れ、自分と向き合えるように成長したのかを知っているため、新入生のよき理解者であるとも言えます。新入生のペースや受け止めに大切にしながら関わっていくことを職員とは違った立場で考えてくれています。そのため、子どもたちの関係性の力動を有効に活用しながら、相互の成長につなげていくことが重要です。個々の子どもの特性に十分に配慮した支援を行いながら、同時に、子ども同士が互いに思いやり、安心・安全を感じられる寮集団・施設となるよう、職員と子どもが共に育んでいくのだという施設全体の雰囲気の醸成が大切であると考えています。

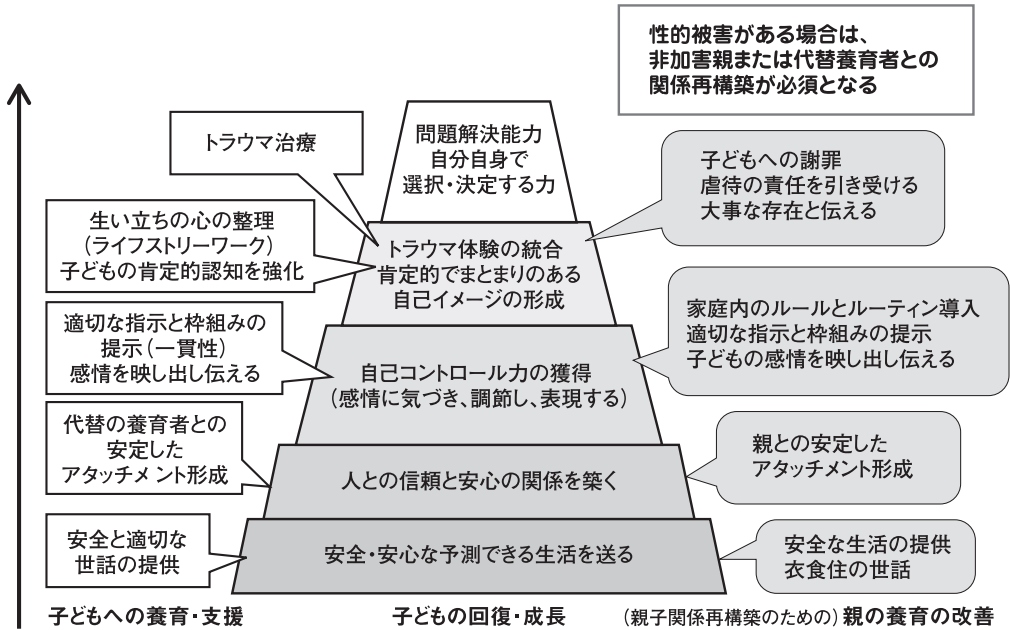
時には、反発したり、飛び出たくなったりするなど、新入生は入所前に馴染んでいたやり方で行動しようとすることもあります。そうした時に、時間をかけて不安な気持ちを減じ、子どもが安心できることが大切であると常に考えることが肝要です。時間のかかり方は子どもにより異なりますが、徐々に学院生活が「安心・安全である」と感じ、自分の居場所を見つけられるようになると、少しずつ笑顔や前向きな気持ちが見られるようになっていきます。

(2) 人との信頼と安心の関係を築く

「特定の大人との関係の構築とその深まり」と
「仲間同士の人間関係の構築とその深まり」の体験

次に、寮担当の夫婦職員を中心にした「特定の大人との関係の構築とその深まり」と寮の集団生活の中で経験する「仲間同士の人間関係の構築とその深まり」を日々重ねていくことになります。家庭や学校、地域で辛い思いや理解されないと感じる経験を多くしてきている子どもたちが、毎日の生活を共にし、その中で感じる感情を共有し、伝え合い、理解

〈図1〉子どもの回復過程



※「社会的養護関係施設における親子関係再構築ガイドライン」資料に加筆作成

し合い、時には理解できずに混乱したり、反発したり、悩んだりします。そうした中で、これまで言えなかった自分の気持ちに気づき、自分の言葉で表現できるようになり、その表現された気持ちを寮の職員や仲間を受け止められ、人と関わることに“信頼”を見出していくことができるようになっていきます。時間はかかりますが、日々の暮らしの中で、子どもも大人も、相手を受け止め、相手に受け止めてもらうという体験を繰り返し重ねていくことになります。学院の入所期間が平均1年半を超えるのも、こうした生活の中で積み重ねられる関係性の深まりの体験が子どもたちの成長における最も重要な基盤となると考えているためです。

総じて、子どもたちは実はとてもまじめで何とか前向きに生きたいと思う気持ちを内に秘めていることに驚かされます。親との距離に悩み、自分なりの答えを見つけるプロセスの間、職員は子どもの気持ちを代弁したり、子ども自身が表現できるまで待ったりしながら、子どもの中で機が熟していくまで丁

寧に寄り添います。こうした深い寄り添いは、生活を通して関わりを重ねることを基盤に置きながら、子どもの真のニーズをとらえた、適切な応答の積み重ねがあってはじめて可能となります。

(3) 自己コントロール力の獲得

表現できない“不安”を和らげ
安心の感覚を体感する

児童自立支援施設のいわゆる“枠組みのある生活”は問題を起こさせないための枠組みではなく、自己コントロールする力をつけるための枠組みと考えています。時には、混乱のあまりパニック状態となって、激しい反発、攻撃、閉じこもり、無気力、暴力・暴言、自傷などの行動化を示すことが多々あるのも事実です。

そのような状態に陥った時には、まずは落ち着くことが最優先です。落ち着くまでの時間や方法は子どもにより異なります。気持ちがしっかり落ち着い

で冷静になったタイミングを見計らって、何が起きたのかを一緒に振り返ります。その上で、行動化の背景にある不安な気持ちを一緒に読み解いていき、表現することをサポートします。次に同じような場面になったらどのように行動すればよいかについて話し合い、不安を別な方法で表現するにはどうしたらよいかを探ります。大切なことは、子ども自身が解決に向かう作業に主体的に取り組むことであり、この時、説教や説諭は無用です。そうして、少しずつ自分でコントロールする感覚を体感することができるようになり、自己肯定感や自己効力感を徐々に高めていくようになります。こうした経験を何度か重ねることで、信頼できる大人に相談できるという体験を保障していきます。大人とのやり取りを丁寧に積み重ね、繰り返しながら小さな変化を捉えて子どもにフィードバックしていくことが重要となります。

並行して、子どもの行動化のメカニズムを理解し、行動化を引き起こしやすい引き金は何か、行動化に至らないためにどのように環境調整するかを考えることが重要となります。

(4) ト라우マ体験の統合

過去と今をとらえなおす

安全な場と適切に寄り添う人を得て、自分自身がある程度コントロールする力を持てるようになり、ようやく自分自身の辛かった体験や過去に向き合う準備が整ってきます。同時に、これまでの生育歴の中で身につけた否定的認知の修正や生い立ちの整理などの作業を進めていくこととなります。過去とのつながりを取り戻し、自分と家族のつながりを肯定的にとらえなおすなど、辛かった体験の記憶に向き合い、バラバラになっていた自分を連続したまとまりのあるものとして感じられ、生きていることを少しずつ肯定できるよう支援します。

言葉で表現すると容易に聞こえますが、子どもは時に不安が高じて自分自身を抱えきれなくなり、自暴自棄になりそうになるなど、しんどいと感じる時間を過ごすこともあります。そうした時、いつもの学院生活がそこにあり、いつもいる大人がいつものようにそこにいて、いつもの仲間が、詳しくは聞かなくともそっと見守り受け止めてくれているという環境が何よりの支えになります。一時的に乱れた気持ちを抱えながら、“ルーティンの掃除”をいつも以上に丁寧にすることで、冷静な自分を取り戻そうとするといった子どもなりの対処の様子が見られることがよくあります。そうした時に、子どもの心の幹が太く強くなっていくのを感じます。

(5) 問題解決や自己選択・決定する力

過去のトラウマからの回復を経て、年齢相応の社会的スキルや知識を重ねることで、自己の人生を自分で切り開く力を持てるようになっていきます。

ここまでの回復にたどり着くには、長い時間と継続的支援が必要であり、児童自立支援施設退所後も視野に入れ、個々の子どもの自立支援を地域や家族につないでいくことが重要です。

近年、退所生が頻回に連絡をくれるようになってきています。その連絡は、SOSの時もあれば、うれしことがあって報告したい時、ずっと言いたかった気持ちを伝えられるようになった時、なんでもない時…。どこかで学院が子どもの心の拠りどころとなっているのだと感じさせてくれる連絡ばかりです。立派な社会人となって、学院生活で体験したことや職員の語ったことばの意味を改めて受け止め直したと話してくれる元子どももいます。

子どもも大人も、日々の暮らしの積み重ねを大切にしながら、人と人との間で、よい時も悪い時も相手に受け入れられ、時に相手を受け入れることで、自分の気持ちを少しずつ言葉で表現できるようにな

り、自分の感情や行動をコントロールする力を身につけ、自分自身を理解するようになる。そして、生い立ちや家族、他者との折り合いをつけることができるようになり、自らの人生を自身で選択し、自己決定していけるようになる——国立きぬ川学院の“共に育む”暮らしは“子どもの回復と成長への支援”そのものであり、子どもたちにとって、かけがえのない時間になると感じています。

4. 国立きぬ川学院の支援における

“甘え”を考える

これまで述べてきたように、子どもへの支援の営みは連続的であり、かつ何層にも深く、単純な構造ではありません。

一方で、暮らしを積み重ね、安心と安全を体感する中で、人との信頼関係を築き、自己コントロール力を形成し、自他を理解し、自己決定していくプロセスは、“愛着形成”と“社会性獲得”のプロセスそのものであり、児童自立支援施設が長きにわたり培って来た専門性そのものであると考えます。

そこには、“甘え”という言葉から想像される世界観を上回るような、“人としての存在そのものを受け止められ”、また“受け止める立場にもなりうる”という、人格形成に不可欠な関係性の構築がたくさん詰まった暮らしがあると考えています。

仮に、“受け止められることを期待できる関係性”＝“甘え”をとらえるならば、安心して甘えられる関係性の構築とその期待を裏切らずに適切に受け止める職員や施設の存在というものが大きな意味を持つと考えます。

そのように考えた時、学院に入所してくる子どもは“適切に”甘えることができなかつた子どもたちであり、適切な甘え方ができるようになることは、いわゆる安定したアタッチメント関係の形成ができるということと同義であると言えるかもしれません。

学院の実際の生活において“適切に甘える”とい

うことはどういうことかと言えば、自分を傷つけたり、人を傷つけたりせずに、相手に受け入れられる方法で表現できるようになることであると考えます。

とはいうものの、最近では“適切に甘える”ことができない、行動化の激しい子どもへの対応に苦慮することも多く、寮担当の夫婦職員だけで対応することが難しい局面が増えています。夫婦職員が他の職員と協働しバックアップを受けて、支援の難しい子どもを受け止めることができるかが課題です。現在は、子どものニーズに応じた個別的ケアと社会性獲得に必要な集団支援のバランスを保ちながら、“組織的対応に根ざした夫婦小舎制～子どものニーズに応じたチームアプローチ”を前提として支援するようになっています。そのために、個々の子どものアセスメントと具体的な支援方針を組織内で確実に共有することが不可欠となります。

子どもの“適切に甘える”環境を保障し、自立に向けた回復と成長のステップを確実に進んでいくために、学院全体で日々支援の在り方を模索し続けています。

参考文献

- 親子関係再構築支援ワーキンググループ(2014)「親子関係再構築支援ガイドライン」厚生労働省子ども家庭局家庭福祉課
- 国立きぬ川学院(2019)「国立きぬ川学院版 子どもの行動化対応ガイドライン」

キーワード：強制的措置

国立児童自立支援施設は、現在、強制的措置を執りうる機能を有する唯一の児童福祉施設であり、子どもの行動の自由を制限できる設備を有する。強制的措置は、家庭裁判所の許可決定により、自傷他害やそのおそれがあるなど開放的支援では対応が困難な児童に対して、組織的判断に基づき必要最低限の範囲で執り行うもので、子どもの行動上の問題等に対して、外的環境からの刺激や影響を遮断して不安定な状態からの速やかな回復を図り、個別的支援による心理状態の改善や生活意欲の向上、担当職員との関係改善のための治療的働きかけの機会として捉え用いられている点に特徴がある。子どもの権利擁護の観点から、他にとるべき方法がない場合にのみ強制的措置を執行することが前提となっている。

II 現場での「甘え」とその対応

大きな木の存在でありたい



なかしまよしのぶ
バオバブ保育園 園長 中島喜伸

はじめに

私は情緒障害児短期治療施設(現在の児童心理治療施設)をはじめとする15年余りの社会的擁護施設勤務の中で、指導員から施設長まで歴任するという貴重な経験をさせて貰った。そんな中、施設の治療は安定している一方で、どんなにアフターケアを行っても、子どもの卒園後の状態があまり良くないことが多く、本当の意味での「治療」とは何なのか、という壁にぶつかった。そして月並みではあるが「やはり乳幼児期に何ができるかだ」との答えに行きつき、一念発起、保育業界へ移籍した。

1. バオバブに寄せる思い

シルヴァスタインが描いた『大きな木』という絵本がある。余談だが、この本は近年、村上龍さんによって翻訳しなおされブームが再燃していたが、翻訳者の違いで、ここまでイメージや印象が変わることに、言葉の持つ力の大きさを感じている。私自身は、この本に出てくる「大きな木」は母性(愛着)そのものの象徴だと理解し、非常に感銘を受けた。恵まれたことに、設計から企画、運営までを任せられる保育園新設(2016年4月開園)の機会を頂いた。そこで、これまでの施設～保育所運営の経験を活かし、子どもたちにとって大いなる木の存在となる保育園にしようと考え、世界一大きな木といわれる木の名前をとり「バオバブ保育園」と名付けた。以来、

「子どもたちが考える・考えられる保育の実践」を行っている(日々の様子はFacebookで公開している)。

2. 子どもたちの変化に感じること

私自身はこの20年弱の中で、子どもの状態像が変化したようにはあまり感じていない。勿論、SNSやスマホなど思春期の子どもたちを取り巻く環境の変化に伴う社会問題の変容は感じていたが、こと乳幼児に関しては、テレビ等で報道されているような発達障害の増加や発達段階の遅れ等に、そこまでの変化は感じていない。ただ、子どもたちよりもむしろ親や教員、保育士などの大人側の意識や問題が大きく変わったように感じてならない。不安を抱えきれない、我慢ができない大人が増えたように感じている。こと保育士や教員においては、子どもや保育、授業が自分の思い通りにならないと、むやみに発達障害を疑い、自身の技術の向上よりも医療機関の介入を求めたり、保育士・教員の加配、特別支援教育を進めたりすることが増えているように感じる。わが国が進めた早期発見・介入の指針が、大人の不安の逃げ道になっているような気がしてならないのである。子どもたちは発達段階に合わせて大人がしっかりと関わったり、豊かな経験を保証することで、子どもの成長自体は今も昔もそれほど変わらないと感じている。

3. 幼児教育のおかれた現実

保育園に勤め始めた時、衝撃的だった保育士とのやりとりがある。保育士経験10年ほどの女性保育士が「(1歳児の)A君、また噛みついて。もう本当にイヤになります」と、園の業務の報告がてら私に話をしてきた。「なんでA君は噛んだの?」と聞くと「そんなの私にはわかりませんよ、わかれば止められるんですから」と。「でも、繰り返すということは何か意味があるんじゃない?噛みつき自体は発達として普通のことだから。どんなやりとりをしたの?」と返すと彼女は「私の対応が悪いて言うんですか」と完全にふてくされてしまった。30歳前後のいい大人だが、まるで思春期の女の子のようだった。

彼女はきっと「自分の大変さを聞いてほしい、愚痴りたい」、「頑張りを認めてほしい」「誰かこの噛みつきを止めてほしい」…そんな想いだったのだろう。それは「子どもを守る責任を負うのは自分であって、噛まれた子の親に謝罪するのも自分だ」という彼女なりの責任からの怒りもあったのだと思う。

それまで、保育士も専門職種であり、子どもの行動を観察し、子の欲求・要求に保育技術で子どもを成長させる観点があると感じていたが、子どもよりも先に保育士自身の「承認欲求」あるいは「社会的欲求」(マズローの「欲求5段階説」*)を認めないといけないのだと気づかされた。勿論、これは「あつけ」にとられた事例であり、専門性の高い保育士は沢山いる。しかし、このような保育士や教員は一定数いると考えた方がよいと感じている。

4. ネガティブに捉えられている「甘え」

ふと、元ラグビー日本代表ヘッドコーチのエディー・ジョーンズの言葉を思い出す。「日本のラグビーは力を発揮しきってないと常々感じていた。良い選手がたくさんいても、文化がプレーするというところに直結していない。高校から大学、トップリーグ

までそう。規律を守らせ、従順にするためだけに指導されている。足の速いウインガーが大学にいて、1週間に6日も、中距離ランナーのような練習をさせられている。そうなれば速さは失われる」

こうしたことは保育園をはじめとする幼児教育においても無意識下であたりまえに見られる。運動会の行進や体操、食事前のみんな揃っての挨拶、待つときは壁に沿って座る等、日常の些細な行動をはじめとして、規律性、従属性を求める場面は非常に多い。このような文化の中で、気がつかないうちに大人は「皆一緒」の安心感を得ているように思う。

大人に従順である子が良い子であり、子どもたちに言うことを聞かせられる先生が良い先生だという傾向は強く、保育士自身の満たされなさを埋めることに繋がっている。大人の不安によって、子どもの「違う」が受け入れられず、「甘え」は子どもの意思表示ではなく「私(保育士)を苦しめるもの」というネガティブなものとして捉えられている。

5. 「あたりまえ」を疑うことから始めた保育

まずは保育士自身の自己肯定感を高めることが、子どもの「個々の違い」を受け止めることに繋がると考えている。そして集団ありきではなく、個々を認めることがイキイキとした集団形成に繋がることを感じて貫くために、「あたりまえ」にあることをやめることから始めた。

(1) 固定遊具を廃止

遊び方が決まってしまう固定遊具の設置をやめ、築山を真ん中に置き、子どもが自由な発想で遊べる廃タイヤや電線の廃コイル、枕木などの遊具を置いた。



枕木も子どもたちにとっては格好の遊具になる

(2) 「みんな一緒」をやめた

子どもの「やりたくない」を認め、気分がのらなければ、違うことをやっていいし、日課においても満足いくまで遊んでいてよいことを認めた。食事も準備ができたテーブルごとに「いただきます」をして食べるようにし、「みんな一緒」の名目で不必要に待たせることをやめた。

(3) 大人が介入するのをやめた

大人は知らず知らずのうちに「失敗しないように」と方向づけてしまう。そのために、子どもが「困る・考える」機会を奪わないように、たとえケンカであっても大人は可能な限り口を出さず、視線も外し、「黒子」になって成り行きを見守ることを徹底した。

(4) 運動会をやめた

バオバブでは運動会も生活発表会もなくした。運動会や発表会は、保育士にその意図がなくても「従う」関係性が作られやすい。思い切って「なくす」という選択肢によって、保育士側の「何かをさせる・揃える」という感覚をなくすことに取り組んだ。勿論、保護者に成長を披露する場は設けているが、それもあくまで子ども主体の披露である。

(5) 「ダメ」を使うのを極力やめた

バオバブでは、基本「ダメ」を使わないようにした。代わりに使うのは「どうしたの？」である。本当に危険な場合だけ「やめなさい」ということはあるが、それは否定ではなく、制止が目的の場面だけである。叱る場面であっても、基本は「どうしたの？」に始まり、「どうする?」「どうしたい?」の3つの言葉で気持ちを引き出すことを心がけた。

(6) 大人が答えを導くのをやめた

保育活動で大事にしている一つが「子ども会議」

である。生活も、普段の保育も、行事ですら全て子どもたちが話し合っ物ごとを決めていくのである。勿論3~4歳児の頃は大人も一緒に会議に参加するが、4歳児後半~5歳児(年長)は基本的に全て子どもたちに委ね、子ども同士でどうするかを決めていく。口論へと発展することも頻繁にあるが、そのぶつかり合いや譲り合いを子どもが導きだすことを大事にして、大人はひたすら待つようにしている。



ことあるごとに自分たちで集まって話し合っている

(7) 成功させることを答えにするのはやめた

保育ではどうしても「成功させる」ことを望もうとする傾向が強い。子どもが一見、「答え」を出していないように見える時に「本当にそれでいいの」という言葉かけでさえ、無意識の中で「間違い」に気づかせようとしてしまっている。保育士自身が「失敗していいんだ」「失敗から気づいて貰おう」という発想に変わることで、子どもは失敗を恐れず自由に発想するようになる。

6. 保育士の変化

「子どもたちにやたらと口を出さない」と言われた時、自身の保育観が壊されると保育士たちは言う。「ただ子どもを信じて、見守る」というのは「自分は何もしていない」と思えてしまい、非常に不安になるのだという。この自分の不安と向き合ってもらうことから始め、いかに自分が意のままに子どもを動かそうとしていたかに気づいてもらうことを丁寧

に行った。

そんなやりとりを繰り返すうちに、子どもたちのケンカ一つとっても、今まで口を出したタイミングでは介入せず、近くで成り行きを見守っていると、子どもたちが自分たちなりに答えを出し合い、自分たちで結論に繋げていく姿に出会うようになる。「もし、あのとき自分が声をかけていたら、止めてしまっていたら、この姿は見られなかった」と実体験する。そして大人が喋るのを止めた途端、子どものイキイキする姿を目にし、何かに追われて「させよう」とする感覚から保育士は解放される。そのことで、子どもの自己主張を認められ排他的なことをしなくて済み、結果、保育士の苦しさも軽減されているように感じている。

子どもの言葉が聞こえるようになると、保育士自身が変わり、結果、保育の質が抜本的に変わり、保

護者への共感や支援にもつながるなど、劇的な変化を見ることができたように思う。

7. 子どもの成長

自分たちで考え、実現してきた子どもたちは、「こんなこともできるのか」「こんなこと考えつくのか」という成長を見せてくれている。

実例：5歳児の成長(2018年度)

・巨大な立体物を作り上げた!!

生物を巨大な立体物で作ることを決めた子どもたち。その基礎構造から自分たちで考え、実物や図鑑を見ながら細部や色彩を表現し、まるで職人のように作っては「上手くないかない!」と壊し、また作り直すことを1か月余り繰り返した。

子どもたちだけで

巨大な立体物を作り上げた!!



「ここはこうやって、そっちは…」
骨組みを作る子どもたち



「これ、どうするの?」
カマをどうつけるか
悩む子ども



「顔、塗るのワタシ…」
真剣なまなざしで
色づけする子ども



「できたー!!」
巨大カマキリの出現だ!

・ 5mの巨大画に挑戦!!

普段の遊びの流れから、みんなで大きなクジラの画を描きたいとのことで、縦2m×横5mの用紙を用意し、あとは子どもに任せた。すると、ある女の子は図鑑を見ながら下書きを描いたのだが、どうもバランスが悪いと、図鑑に指をあて鼻先から口までが人差し指の幅で「3」であることを数え、5mのくじらで同じように親指と人差し指の広さで「3」を数え、点を打ち線で結ぶという技法を行っていた。自分なりに考えた拡大図の描き方であった。

「カマキリ」と「クジラ」のどちらも、保育士が「こうするんだよ」と教えていないものである。保育の中で学んだ技法や、生活や遊びの中で発見したものを自分たちなりに応用し実現する力に繋がっている。また、話し合いを通じてお互いに言葉でやりとりし、認め合うことで、暴力行為や、活動中の離席や保育室から飛び出しといった行為はほぼ皆無の状態となり、「はみ出る」という感覚自体が子どもたちにも、保育士にも生じなくなっていた。

勿論、全ての子どもが同じように育つわけではない。けれども、一人ひとりをしっかりと受け止めることで、「甘え」がネガティブなものではなく、「意思表示」としてポジティブに捉えられ、心地よいコミュニケーションの循環を作っていると感じている。そもそも、子ども同士に任せることで、ある種、必要以上に甘えられない環境になり、心地よい「甘え」を出し、受け止められることで、互いに満たされているのかもしれないも思っている。

8. 課題とこれから

4歳10か月で入園してきた子がいた。東日本大震災で姉と祖父母を亡くし、父母と共に仮設住宅に入居していたが、父から母へのDVに晒され、自身も身体・心理的虐待を受けた。他県へ母子避難し、当園に入園してきた。虐待後遺症から激しい暴力、パ

次はクジラだ!

5mの巨大画に挑戦!!



「ここまでが、1、2…」
何やら指を使って
測り出す子ども



自分たちで
役割分担など決めて
仕上げていく

「できたー!!」
壁面を泳ぐ5mのクジラ!



ニック様状態、解離症状の疑い等、対応に苦慮した。それでも行動療法を基礎とした、保育士の根気強い対応と、包み込む関わりで、卒園時には暴力は消失、感情を言葉で表現できるまでに回復した。卒園時には、対応まで含め細やかに学校へ引継ぐなどし、母



子どもも保育士もみんな泥んこまみれ



じょうずに渡れるかな～。毎日がアドベンチャー

子のアフターケアも行ってきた。しかし、学校では「個別配慮ではなく一律」を求められ、残念ながら被虐待を理解されず、不適切な対応によって、その子どもの行動は悪化し、結果、医療機関の介入を必要とする状態となった。

この子に限らず、丁寧に個別の対応を行い、保育園で主体性を伸ばした子どもたちでも、義務教育でつまづくことは少なくない。勿論、私たちも入学時を目的にしているわけではなく、10年20年後に繋がるように子どもを育てている。だが、子どもにとって個性よりも協調性を求められる環境の激変をどのように考えて行くかは、今後の大きな課題となっている。

※マズローの「欲求5段階説」

米国の心理学者アブラハム・ハロルド・マズロー(1908-1970)は、「人間は自己実現に向かって絶えず成長する」という前提のもとに、「欲求5段階説」を主張した。生命を維持したいという、最も根元的な①生理的欲求、身の安全を守りたいという②安全の欲求、他者と関わりたい、集団に属したいという③所属と愛の欲求(社会的欲求)、他者から認められたい④承認の欲求、自分の本性(自分らしい能力)を開花させたいという⑤自己実現の欲求、の5段階から成り、成長とともに①→⑤の順番で現れるとした。

私たち(バオバブ保育園)が大事にする
5つのこと

『遊び』『自然』『愛着』『表現』『言葉』

遊び

～全ては『遊び』の中にある～

自然

～『自然』はみんなの教科書～

言葉

～『言葉』の力を信じたい～

愛着

～「あずかる」から「育てる」へ～

表現

～「自分らしさ」を見つける～

参考/引用

- 記：阿部健吾、2015.5.14『エディーHCが意識改革の宿題最後まで熱く厳しく』日刊スポーツ
- 宮田雄吾、2004『子育てが楽しくなったら読む本』情報センター出版局
- 小林隆児・遠藤利彦、2012『「甘え」とアタッチメント』遠見書房
- 小林登、2008『いっしょに考える子ども虐待』
- シェル・シルヴァスタイン、1976『おおきな木』篠崎書林
- ジェームズ・ヘッグマン、2014『能力の創造』(議事録概要)独立行政法人経済産業研究所

キーワード：主体性を尊重する子ども観

主体性とは決まっていないことを自ら考え、判断し、自分の意志で行動すること。米国の発達心理学者エリック・エリクソンはライフサイクル論の中で自律性を獲得した子どもたちの発達段階として、自主性・自発性の獲得の一つとして主体性の要素を示している。ノーベル経済学賞を受賞したジェームズ・ヘッグマンは乳幼児期から主体的な活動(非認知能力の育み)が、将来、高学歴や高収入に繋がるとし、平成31年度に改訂された我が国の『保育所保育指針』にも反映されている。

II 現場での「甘え」とその対応

子どもが甘えられる 場所をめざして

—母子生活支援施設での地域社会貢献事業実践から



玉川大学教育学部乳幼児発達学科 教授

しぶやゆきなり
渋谷行成

1. はじめに

「無料の学習塾であるかしわ塾は勉強する場所ですよね、本気で勉強したいと思っている子どもだけを対象にしたほうがいいのではないですか?」「チャーハンの会に年齢制限はないのですか?」

かしわ塾やチャーハンの会を支えてくれている実習生や学習ボランティアの学生たちの疑問であり、その言葉の中には「甘やかしすぎなのではないでしょうか」と「そこまでしないといけないのでしょうか」という意味が含まれている。実際、かしわ塾に参加したばかりの中学生の中には、学習に来ているのかゲームをしに来ているのか、気まぐれに筆者が作る肉うどんやチャーハンを楽しみに来ているのか、わからない子どももおり、貴重な時間を割いて、学習塾の手伝いをしてきているボランティアたちから、そうした声があがるのは当然なことだと言える。「甘やかしすぎなのでは」という疑問は、子どもたちからもあがっている。しかし、そのあとで「職員が甘いのも今のうちだけだよ、手のひら返したように厳しくなるから」と彼らは言う。

「13年間、甘えたことなんて一度もなかった」という子どももいる。その言葉の中にも「本音は甘えなかった」という思いが込められている。この子どもが言う「甘え」とは、どのようなものだろうか。

かしわ塾もチャーハンの会も、筆者が所属していた母子生活支援施設で、開設当初の1995年(チャー

ハンの会は2008年)から実施してきたものである。いずれも、地域子どもたちも受け入れており、現在まで続いている。こうした活動や母子生活支援施設での子どもたちへの関わりについて「甘やかしすぎなのでは」というご意見を多く頂戴している。かしわ塾やチャーハンの会、母子生活支援施設での具体的な支援や親子関係再構築支援について紹介し、それらの対応の中から、児童福祉施設での支援と「甘え」について考えていきたい。

2. 母子生活支援施設の役割と具体的支援

①母子生活支援施設の現状と役割

母子生活支援施設は「配偶者のない女子又はこれに準ずる事情にある女子及びその者の監護すべき児童を入所させて、これらの者を保護するとともに、これらの者の自立の促進のためにその生活を支援し、あわせて退所した者について相談その他の援助を行うことを目的とする施設」(児童福祉法第38条)と規定された児童福祉施設である。「平成30年度基礎調査報告書¹⁾」によると、全国に221施設、新規入所世帯の入所理由は「夫などの暴力」が最も多く、入所世帯3,046世帯のうち1,695世帯(55.6%)、「住宅事情」が498世帯(16.3%)、「経済的事情」が338世帯(11.1%)となっている。

「平成30年度トピックス調査報告書²⁾」によると「親子関係の再構築」について「入所時」「入所後」

支援を行った施設数は、平成28年度98施設(入所時42、入所後56)、平成29年度115施設(入所時40、入所後75)、平成30年度は105施設(入所時33、入所後72)、3年間の対象世帯数は860世帯となっている。

母子生活支援施設では、課題のある母と子と位置付

けることなく、母と子、その関係性も含めて、生活の場で肯定的なつながりを主体的に回復する親子関係の再構築支援を実施している。「社会的養護関係施設における親子関係再構築支援事例集³⁾」では、「母子生活支援施設で分離せずに、虐待防止支援を行った事例」等が発表されており、分離に至らない段階での支援の充実と拡大が求められている。

②母子生活支援施設での地域社会貢献事業

1) 無料の学習塾

筆者が所属していた母子生活支援施設では、開設当初の1995年より無料の学習塾であるかしわ塾を実施している。2006年より、地域の子どものための受け入れも開始し、高校受験や大学受験のみならず、不登校やひきこもり状態の子どものための高卒認定試験受験に向けての学習指導、特別な配慮が必要な子どもたちへの個別の学習指導を実施している。かしわ塾は、単なる学習塾ではない。自分のために真剣になってくれる大人(職員やボランティア)と出会い、心配される体験、期待される体験、思いや気持ちを丁寧に汲み取ってもらった体験を積み重ねることで、特別な他者(職員、学習ボランティア、仲間)を獲得し、その特別な他者との関係性の中で、かけがえのない自分を実感する場所にもなっており、そのため、かしわ塾ではできる限り担当制をとっている。



かしわ塾

かしわ塾にもいくつかのルールがある。しかし、はじめにルールありきではなく、煩わしいルールを守ってまでも通いたくなる場所になることを優先している。対人履歴の中で深く傷ついてきた子どもたちは、職員やボランティアとの関係構築に時間を要し、ささいな衝突や誤解でも、姿を見せなくなることも少なくない。入塾当初から、ルールを厳格に定めることで、結果的に子どもたちを排除することに繋がってしまうのである。そこが大切な場所となり、その場所に通い続けたい、その人との関係を続けたいと感じ、高校生や大学生になりたいとの思いを強く持つことで、子どもたちは自らの意思で煩わしいルールを守ろうとする。子どもたちが言う「職員が甘いのも今のうち」という期間は「今まで出会ってきた大人と環境とはちょっと違うぞ」と感じてくれるのに必要な時間となっている。しかし「かしわ塾に通い続け高校生になりたい」と感じ始めた時から、子どもたちにとって、そこでの学習の時間は、手のひらを返したように厳しいものとなる。どのような理由があろうと入学試験の日程は待ってくれることはなく、無料の学習塾への信頼は「高校生になる」や「大学生になる」という結果がすべてだとかしわ塾では考えているためである。

余談ではあるが、大学進学の一部を設けていることが、かしわ塾の特徴のひとつとなっている。大学進学の部は、大学進学支援と共に「高校に通い続け

るための支援」の役割を担っている。高校中退の最終学歴は中卒である。高校中退後、その後なんらかの支援を受けることがなければ、最終学歴は中卒となってしまうのである。かしわ塾でも、以前は、高校を中途退学する子どもたちは少なく、そのため、高校入学をゴールにするのではなく、高校に通い続けること、卒業することを目標とし大学進学の部を開始し、その結果、高校中退者の数は減少している。この事業に関しても「そこまでするの」という意見をいただいている。

2) チャーハンの会

筆者が所属していた母子生活支援施設では、2008年から「チャーハンの会」を実施している。「家での夕食の記憶は恐怖でしかない」「夕食の時間が一番緊張した」という子どもや夕食の時間が存在しなかった子どもたちに対して、皆で食卓を囲む時間を提供し、恐怖感も緊張感もない夕食の時間を体験することが、チャーハンの会の役割のひとつとなっており、地域の子どもたちも含め、思春期の子どもたちを中心に、毎回、10名近くが集まってきている。中には20歳を過ぎた者もあり、「年齢制限はないのですか」との質問に繋がっていく。「職員さんが一生懸命食事の準備をしてくれているのに感謝の気持ちが足りない」という意見や、思春期の子どもたちが集まって夕食を食べるだけの光景を見て「何か意味があるのですか」と素直な感想を寄せる人もいる。

「チャーハンの会」では特別なことは何もしない。子どもたちは、筆者(現在は職員)が作る夕食を楽しむに集まってくる。インターネットを活用すれば、同じ場所にいなくても対話が可能となる現在、あえ



チャーハンの会

て同じ時間、同じ場所に集まることにこだわっている。

3. おわりに

はじめて会った筆者に「職員となんて絶対に口を聞かない」との言葉をぶつけてきた子どもがいる。かしわ塾の見学に来て、仕方なく来ているという姿勢を崩さない子どももいる。「うざい」という言葉と体全体で、拒否感を伝えてくる子どももいる。こうした言葉や姿勢は、子どもたちの今まで出会った大人への評価でもあるのだが、職員やボランティアの多くは、自分に対しての評価と捉えてしまったり、そうした言葉や姿勢を、そのまま子どもへの評価としてしまう。「職員となんて絶対に口を聞かない」という言葉で彼らが伝えたいのは、「今まで出会ってきた大人たちは信頼することはできなかったけど、あなたもそのひとりですよ」との不信感と「違う大人であって欲しい」との期待であると考えられないだろうか。「うざい」という言葉で、子どもたちは、過去の対人履歴について、伝えようとしているのではないだろうか。

伝えるという行動は、受け止めてくれるという行動に支えられている。乳児の泣くという行動は、不快感や不安感等を受け止め、解消してくれるという

行動を求めている。しかし、虐待や養育者側のさまざまな理由により、気持ちを暴力によって抑え込まれたり、無視や拒否、放置され続けられた子どもたちがいる。信頼できる他者の存在も、信頼できる他者との関係も、かけがえのない自分という実感も持たないまま成長し、小学生や中学生、高校生になった子どもたちと、社会的養護の現場で働く職員やボランティアは出会うのである。次に出会う大人のひとりとして、そうした子どもたちがもつ他者につながることへの根強い不信感や緊張感、戸惑いや自己肯定感の低さについて理解し、対応することが求められる。

子どものこころの発達と健康にとって、信頼できる他者の存在やその他者との信頼できる関係が重要であることは言うまでもない。しかし、その過程をなんらかの事情で飛び級してきた子どもたちがいる。子どもたちだけではない。子ども期の福祉を体験することがないまま、養育者側に立たされている大人たちもいる。そうした子どもたちと養育者の自己肯定感回復には、これまでの人間関係の中では体験できなかった、伝えたい思いや気持ちを丁寧に受け止め対応される体験や大切にされる体験を積み重ねる場所と重要な他者の存在と、その他者と過ごす時間が不可欠となる。

人間関係の中で傷ついた心は人間関係の中でのみ癒すことが可能となる。また、大人や社会への不信感は、悪意のない大人との関係性の中でのみ「信頼できる大人」や「信頼できる社会」へと修正が可能となる。つまり、子どもたちの自己肯定感を高めるためには、また、「人間不信」を「信頼できる大人」に修正していくには、再び、人間関係を持つことが求められる。筆者は、そうした子どもたちが、人と繋がることへの不安感や戸惑いを軽減する場所として、悪意のない大人たちと「人間関係は捨てたもんじゃない」という体験を積み重ねる場所の必要性を感じている。

乳児の思いを、養育者側が受け止め、適切に対応することを「甘やかしすぎ」という者はいないだろう。しかしながら、ある年齢に達した子どもたちに、子ども期の福祉を体験する場所と時と人(重要な他者)を提供することに対しては「支援を永遠に続けるのか」や「甘やかしすぎなのでは」との否定的な意見や疑問がある。

筆者の限られた体験の中では、支援は永遠には続くことはない。「この人だけは裏切れない」と思える重要な他者を獲得し、その関係の中で大切にされるという体験を積み重ねた子どもたちは、大学生になり、社会人になり、次の人間関係の中で成長を続けている。毎回休まず、かしわ塾にもチャーハンの会にも参加していた子どもたちも、「忙しくて」「予定があって」との連絡が時より入るだけになっていく。

「すごい、ひさしぶりに、仕事で近くに来てくれたので、チャーハンの会に寄ってきたよ」

退職して4年目になる私に届く、こうしたラインには、必ず、短い近況が添えられている。近況や「仕事は辞めてないよ」とほんの少し誇れる自分を伝える相手を手に入れること、また、その人だけは裏切れないという感情を心に刻み込むこと、そんなささいなことのために「そこまで僕のためにしてくれるんだ」という体験の積み重ねが必要な子どもたちもいるのである。

- 1) 全国母子生活支援施設協議会(2019)平成30年度基礎調査報告書
- 2) 全国母子生活支援施設協議会(2019)平成30年度ボックス調査報告書：親子関係の再構築支援に関する調査
- 3) 親子関係再構築支援ワーキンググループ(2015)社会的養護関係施設における親子関係再構築支援事例集 厚生労働省 雇用均等・児童家庭局 家庭福祉課

キーワード：親子関係の再構築

不適切な養育の再発を防止し、親子間の肯定的なつながりに修復すること。母子生活支援施設における親子関係の再構築支援は、乳児院や児童養護施設に入所していた子どもの家庭復帰を母子生活支援施設において支援するもの、分離に至らない段階(児童養護施設等に入所する以前)での家族全体の支援があげられる。

II 現場での「甘え」とその対応

発達^{つまず}の躓きと甘え



たなかやすお
田中康雄

医療法人社団 倭会 こころとそだちのクリニック むすびめ 院長

1. 社会的養護に登場する子どもたち

1) 軽度発達障害

かつて杉山(2000)は、①健常児との連続性のなかに存在し、加齢、発達、教育的介入により臨床像が著しく変化し、②視点の異なりから診断が相違してしまい、③理解不足による介入の誤りが生じ安く、④二次的情緒・行動障害の問題が生まれやすい、という特性をもつ発達障害を「軽度発達障害」と命名した。

この言葉は、その病理的特性が決して顕著ではないけれど、発見しにくい、障害として理解されにくい、誤解されやすいため、正しく対応することが難しいことを示しており、子ども本人だけでなく、親も関係者も、その生き様、関わり方が批判されやすく、本人、家族、関係者の「生きづらさ」を作りやすいといったことを示唆する言葉として、臨床的に有用であると僕は評価した(田中、2008)。

2007年にこの言葉は公的には使用できなくなった。しかし、現在の混沌とした「発達障害圏」の医療のなかで、僕は、「重度な生活障害あるいは生きる障害を持った、認められにくい発達の躓き」という意味づけで、今一度「軽度発達障害」という言葉を復活させてもよいのではないかと思う。

以下にDSM-5(APA,2013)という診断基準で2013年に新たに位置づけられた神経発達障害群のそれぞれの発達障害について概説する。

①知的能力障害群

以前は精神遅滞(それ以前は精神衰弱)と呼ばれていた。知的機能を示す知能指数(IQ)の数値と日常生活上の不適応で判断される。

②コミュニケーション症群

言葉の遅れといわれる言語取得と使用の障害、発音が不明瞭な構音障害、吃音が含まれる。DSM-5では、社会的(語用論的)コミュニケーション障害という症候群が新設された。これは明確なこだわりや感覚の過敏さは認めないが社会的コミュニケーション能力の弱い一群である。社会的コミュニケーション能力とは、簡単にいうと言葉での意思疎通がはかれることと、場の空気が上手に読めることである。

③自閉スペクトラム症

それまでは自閉症とアスペルガー症候群と大きく二分され、その総称として広汎性発達障害という名称が使用されてきたが、DSM-5では下位診断名をなくし自閉スペクトラム症と総括された。特徴はa)社会的コミュニケーションおよび相互関係における持続的障害とb)限定された反復する様式の行動、興味、活動の二つにまとめられ、感覚の過敏さはb)に含まれた。

④注意欠如・多動症(ADHD)

日常生活を営むうえで支障となるような多動性、衝動性または不注意の症状が年齢不相応に顕著で

ある場合の診断名で、DSM-5になって、a) 12歳までに症状の存在が認められる、b) 症状必要項目が年齢で加減される、c) 自閉スペクトラム症の併存が認められることになった。

⑤限局性学習症

それまで学習障害と呼ばれてきたものである。基本的には、知的な遅れがないのに、特定の学習スキルが向上しない状態をさす。

⑥運動症群

それまでは発達性共調運動障害、いわゆる不器用さを主症状とする障害名のみだったが、DSM-5では、さらに常同運動障害、チック障害が追加された。

このように列挙すると、あたかもそれぞれの特性をきちんとそろえた人が個々に存在すると思われるがちだが、日々の臨床では、その特性が薄くなったり濃く現れたりの変容しながら、いくつかが重なり合って、生活の躓きが形成される、と思われる方々も少なくない。まさに「軽度発達障害」なのである。

2) アタッチメントの形成不全

社会的養護では虐待、ネグレクトを受け生きてきた子どもたちも多く生活している。かれらは行動面では、日常生活で過食・盗食・異食・食欲不振、便尿失禁、自傷行為に加え、虚言や盗み・万引き、いやがらせ、集団不適応、火遊び・放火、いじめ、器物破損・暴力といった反社会的行為に至ることもある。また、発達面の特徴としては、運動・情緒・言語面での発達の遅れが認められ、多動や注意不足、対人距離が上手に取れない、結果的に学習不振に至るなど生来性の発達障害との鑑別は難しい。精神面では抑うつ、無表情、無気力、不眠、神経過敏や気分の変動を認めることもある。

かれらが経験してきた生活は、かれらにとっては不断の日常生活である。服従的あるいはささやかな抵抗としての挑発的な言動を繰り返しながらも、悪

いのはいつも自分といった自己否定感は強化される。その果てに、人間関係は暴力による支配で作られる、支配者にはどんなことがあっても抵抗できないといった力への恐怖、無力感を育む。

アタッチメントとは、「危機的状況に際し、恐れや不安といったネガティブな感情が経験されたときに、特定の他者にくっこうとする心理的行動傾向、および確実にくっつき得る、保護してもらえるとという主観的確認、見通しの上に成り立った、その他者に対する情緒的絆」である(遠藤、2012)。虐待、ネグレクトを受けて生きてきた子どもたちにこの絆が正しく形成されているとはとうてい思えない。臨床場面では、この情緒的絆作りから完全に撤退したかのように見える「くっつくことを抑制する」反応性アタッチメント障害と、無差別的に「くっこうとして」情緒的絆を作ろうともがく脱抑制型対人交流障害の二つの診断名がある。「危機的状況に際し、恐れや不安といったネガティブな感情が経験されたときに」、かれらがくっつく「特定の他者」を確実に手に入れることができる十分な環境が提供されないと、かれらはアタッチメントが形成不全のまま、発達していく。

3) 社会的養護に生きる子どもたち

軽度発達障害とアタッチメントの形成不全とは、それぞれの出自が異なる次元の世界にある。しかし、この両者は、表面的な症状レベルで鑑別することは困難である。

正確に鑑別することが難しくても、適切な関わりの糸口を見つけるためにある程度識別して診立てる必要はある。僕は日々の臨床感覚から、向きあったときから時間をかけて形成する治療関係、あるいは二者関係の感覚で、ある程度識別しようと思う。

典型的な軽度発達障害では、診察から診察までの空隙も含め、僕は相手とつながっていると感じる。さらに隠そうとしても隠せない言動が、かれらから

は「にじみでる」ような感覚を持つ。

一方、アタッチメントの形成不全のある子どもたちは、いつもどこか初めて出会うかのような馴染めなさ(つながりにくさ)といった感覚があり、発達障害様の言動は、一貫した「にじみ方」でなく、隠そうとし続けた言動が、あたかも、突然複数の引き出しのどこかが開き、どこかが閉じるように、浮動的に表出されるので、つながり感がないように感じる。こうした連続性の乏しさは、状況、他者に依存的、あるいは反発的といったさまざまな表情として日常生活の記録に記載される。複数のスタッフの行動評価でも著しい差異が生じる。こうした差異、多様な表情は非常に浮動的で、関わるスタッフを戸惑わせ、逆転移*が強くなり、チーム対応が難しく(チームがつながれなく)なる。

※治療者が患者に対して向ける感情や思い

2. 社会的養護の子どもたちを

「甘え」という切り口で見直す

土居の「甘え」の理論によって、自明な日常語であった「甘え」が精神科領域に進出した。ただ、その定義の曖昧さと多様性も課題となっている。

日々の臨床では、養育者から「こんなに甘やかしても大丈夫でしょうか」、「甘えてばかりで…」、「小学校の先生からも、そろそろあまり甘えさせないようにと言われ…」などと登場する。教員だけでなく、社会的養護の施設職員からも「甘えているので、ちょっと厳しく関わるようにしています」、「甘えればなんとかなると思って…」などという言葉も耳にする。

ここで使用される「甘え」は、それを許容するとかれらの成長や自立にとってよろしくないものという位置づけである。

しかし、そもそも土居(2000)の『「甘え」は、他者の行為に依存し、それをあてにする』ことと意味付けされた感覚であり態度や行動に用いられる。小

林(2012)は『「甘え」が享受できるか否かは相手次第』で「甘えを受け止め、受け入れてくれる(甘えさせてくれる)人」の存在意義を強調し、「二者関係を問題にする」と述べた。

そう考えると先の養育者の言動は、次のように翻訳できる。「そんなに甘やかせる関係性が成立しているのですね」、「お母さんが甘えを受け止めてくれる人として認識されたってことですね」、「小学校の先生は、もっと信頼を築くための他者とのつながりを広げていきませんかと指摘したのですね」。施設職員の言説にも「ようやく、この施設の生活のなかで、依存してあてにできる他者が登場したってことですね」と僕は臨床場面で言葉にし、ここにある二者関係の形成、樹立を喜びたい。

しかし、当初から「甘え」がよろしくないものとして扱われる背景についても考えたい。そこには、弱者、幼き者、あるいはなにかしらの課題や障害のある方々は、他者に依存しあてにすることなく、できるだけ早く自立させねばならない、という思いが隠れていないだろうか。自立を促すために甘えを断念させる。この思いは、いずれこの家、施設を出て「ひとり」で生きていくために、「ひとりでも生きられる力」をいち早く育もうとしたいから、といえないだろうか。

そこには、弱者ゆえに、課題があるがゆえに、そう簡単には登場しない甘えられる他者を求め、あるいは依存してしまうと、自立が危ぶまれるという思いがあるのかもしれない。そもそも社会は、それを強く希求する方々に寛容ではない、という「他者や社会への不信心」が社会にはびこっているのではないかと推測する。

土居(2000)は、①甘えたい欲求が満たされない結果に生じる「こだわり」、②相手の機嫌をとって甘えさせてもらおうとする「とりいる」、③期待するほどは甘えさせてもらえないことで心の痛みとしての「すねる」、④別の人がえこひいきされ、自身

は不当に扱われたときのふるまいである「ひがむ」、⑤甘えたいという内心の願望が露わになることを恥じる「てれる」、⑥甘えたい欲求を否定しわざと変なふるまいをする「ひねくれる」などを甘え方の多様性として述べた。

これらには「他者の行為に依存し、それをあてにする」甘えが隠れている。しかし、私たちは無自覚に、これらをやはりよくないこととして、否定的に評価し改めさせようとする。

軽度発達障害やアタッチメントの形成不全に呻吟する方々が甘え下手なのは、推して知るべしである。確かに、かれらは、こだわり、すねて、ひがんで、ひねくれる。「とりいる」はあまりにもあからさまで、かえって反発を買い、「てれる」無邪気さはよほど関係性が安定しないと表出してくれない。しかし、これらすべては、「甘え」という他者の行為に依存し、それをあてにすることがある程度成立したうえでの感情表出のバリエーションである。

僕たちがかれらの甘えの表出を歓迎し、受け入れ、そのバリエーションにも不安を抱かずに包み込む態度を示せば、二者関係の萌芽となる。

時に、かれらが見せる薬物依存や自傷行為、摂食障害や暴力、性的逸脱行動といったアディクションは「他者の行為に依存し、それをあてにする」甘えが成立しにくいとき、つまり、他者との関係性が安定していないことを前提に、自己完結の行為に依存することで、安心、安堵、優しさなどを得ようとする姿であるともいえる。しかし、一者関係(自分の世界)のなかで作り出した安心、安堵、優しさは、諦めとほどほどの安心、安堵、優しさをなす二者関係のそれとは異なり、満ち足りることはなく、真の二者関係に重心移動をすることに困難を極める。

3. 僕自身への自戒として

軽度発達障害やアタッチメントの形成不全は、臨床的には鑑別困難性を持つ。それでも日々の関わり

のなかで感じる「つながり感」の程度や、甘えかたや、気持ちの切り替えに見られる執拗さ、淡泊さ、適度さの程度、かわいい—にくらいしい、ほっとする—イライラする、しかる—ゆるす、といった言動態度にある、一貫性と唐突さなどに留意しながら、かれらの個々の思いと、これまでのさまざまな関係性に思いを馳せたい。「適時のよい経験に不幸にして恵まれなくても、人のこころの底には再生の芽がひそかであっても、たしかに息づいている」(村瀬、2006)ことを信じ、かれらが成長するために、甘えを受け止める他者として、生き延び、存在する責任が僕たちにはある。

引用文献

- 杉山登志郎(2000):軽度発達障害. 発達障害研究21, 241-251.
- 田中康雄(2008):軽度発達障害 繋がりあって生きる, 金剛出版.
- American Psychiatric Association(2013): Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM-5. APA. 2013. (日本精神神経学会監修(2014): DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル, 医学書院.)
- 遠藤利彦(2012):アタッチメントから見た「甘え」,「甘え」とアタッチメント 理論と臨床, 所収, 遠見書房, 291-307.
- 土居健郎(2000):土居健郎選集2「甘え」理論の展開, 岩波書店
- 小林隆児(2012):「甘え」から見たアタッチメント,「甘え」とアタッチメント 理論と臨床, 所収, 遠見書房, 17-31.
- 村瀬嘉代子(2006):小さな点から細い線へ, そして, きずなへと, そだちの科学, 7, 132-134.

キーワード: アディクション (addiction= 依存症)

アタッチメントの対象である重要な他者になにかしらの理由から頼れない、頼らないことで、物や自己中心的な行為を他者と置き換え、執拗に使用し、繰り返すことで、安心感を得る。しかし、次第に、生活のほとんどを物と行為に依存し続けることで、かろうじて安心感を得ていくなか、考え、行動、生活が制限されていく。アディクションはアタッチメントの障害や、他者不信、孤立、孤独感と関係があるように思われる。

Ⅲ 国内外の動向

甘えのケイパビリティ

— 大阪市西成区における母子訪問事業から



むらかみやすひこ
大阪大学人間科学研究科 教授 村上靖彦

1. 甘えのケイパビリティ

○貧困地区での訪問看護

かつて日雇い労働者の町として知られた釜ヶ崎を擁する大阪市西成区は人口の約24%の住民が生活保護を受けるなど、深刻な貧困に脅かされている^{*1}。歴史的社会的背景ゆえに困難な家庭に育つ子どもも多い。そのなかでとりわけ釜ヶ崎に子どもを支える拠点が作られてきた。1970年にわかき保育園、そして1977年にはすぐそばにこどもの里の前身が設立された。また、2003年の児童福祉法改正による要保護児童対策地域協議会の制定に先駆けて1995年からわかき保育園を中心としてあいらん子ども連絡会が設立され、地域で子ども支援に関わる行政と民間の支援者たちが一堂に会して全ケースを共有する仕組みを作ってきている。

本稿では西成区の多様かつ包括的な子育て支援の実践の一部である妊産婦の養育支援訪問事業をとりあげ、「甘え」を許容する環境の不足を地域でフォローアップするという視点から考えていきたい。以下では、「甘えのケイパビリティ」という概念を提案し、「甘え」が可能ではない環境において支援がどのように組み立てうるのかを考える^{*2}。乳児期の愛着は甘えることが許される環境において満たされる。思春期にいたったときにもわがままを甘えとして受け止めてくれる環境の有無が重要な意味を持つだろう。甘えの欲求と甘えを受け止める環境の双方

が揃ったときに甘えは実現し、愛着は形成される。依存しようとする願望とそれに応えようとする環境とが組み合わさった状態を「甘えのケイパビリティ」と呼ぶことにする。甘えは家庭における乳児期の甘えもあれば、地域において支援者が受け止める甘えもある。このような概念を設定することで甘えという個人の心理的な力動と地域の母子保健という福祉の実践とを接続して見通すことができる。

ここでインタビューをお願いしたAさんは、長年病院の産婦人科に勤務したのち母子の訪問事業に携わるベテランの助産師である。還暦を過ぎた今も毎日町中を走り回っている。

養育困難であると想定されたハイリスクの家庭の場合は妊娠期から生後4カ月まで継続的に家庭を訪問することになる。

※1 2018年の値 <https://www.city.osaka.lg.jp/fukushi/page/0000086901.html> 2019年4月1日確認

※2 「甘え」については土居健郎が論じた非常に広い意味を採用したい(土居1971)。つまり愛着にかかわるが、生活のなかでわがままを許容するような場面も含めて「甘え」として論じたい。ケイパビリティの概念は2つの由来がある。一つは経済学者のアマルティア・センが貧困問題を考えるために構想し、政治哲学者マーサ・ヌスバウムが障害者などのマイノリティの人権を守る社会構造を考えるために定式化したケイパビリティ概念である(Sen 1992, Nussbaum 2007)。もう一つは精神科医で作家の帯木蓬生が精神分析家ウィルフレッド・ピオンから取り出

した、答えのない状況に直面し耐える力としてのネガティブ・ケイパビリティである(籾木2017)。

○ヤンキーの子と助産師—甘えのケイパビリティ

ポイントは愛着が不足するという問題が、心理的な問題に還元できないということだ。まず母親自身が置かれている状況を実感できる語りを二つ引用したい。Aさんの語りは現在の出来事も昔の出来事も全く同じように語られるため区別がない。かつて産婦人科で経験した場面の語りから引用を始める。

Aさん 今ね、ふっと思い出したの、〔昔勤めていた〕芦原病院の場面が。「おっかば、呼べ!」とか言って、外来で呼ばれて。産婦人科の外来で、私、奥のほうにいてたと思うんですね。他の仕事してた。〔その子が〕受付に来てさ、名前は覚えてないんやろうね。だから「おっかば、呼べ!」とか言われて、『おっかばっていったら私のことやな』と思って、『何怒られるかな』と思ったら、17の、もうすごいヤンキーの子がおってね。フフ、で、私を呼ぶわけ…。私のことは「Aさん」って言わんと「おっかば!」って言うんで。でもその子にしたら、『初めて人を呼んだな』っていうような。それまでは17歳か16ぐらいで妊娠して来ても、うわーって、もう横向いて、一言もしゃべらんのが、なんか「困ったから来た」っていう感じだね。で、まあそういうつながりが、なんかできていくわけですよ。

この場面は少女との出会いを描いている。Aさんの語りでは出会いが大事なポイントになる。言葉遣いの面では「なんか」が意味をもつ。「なんか」が登場するのは、なにかがAさんに響いた場面である。この引用での「なんか」は、「なんか困ったから来た」と「つながりがなんかできていく」である。つまり少女がSOSを出しに来たこと、そしてAさ

んとのつながりができたこと。「おっかば、呼べ!」とSOSを出す場面は、Aさんたちの気遣いが蓄積したことで「なんか『困ったから来た』、そういうつながりが、なんかできていく」というしかたでつながりが顕在化するのだ。

「ヤンキーの子」はおそらく、社会のなかで恵まれない状況にあり、しかも大人の社会からは否定的な眼差しで見られ続けたのであろう。そのような環境で、少女は周囲に対して心を閉ざしている。ところが少女は「初めて人を呼んだ」、つまり悪態をつくというしかたで初めて「困ったから来た」とSOSを出すことができるようになる。それゆえ「おっかば、呼べ!」という呼びかけには大きな意味がある。この引用だけで「呼ぶ」ことが3回強調される。SOSの呼びかけ、これは少女の力を示している。

そしてSOSを受け止めてくれる相手としてAさんは選ばれる。Aさんは少女の甘えを許す存在であり、甘えをSOSとして受け止める。声をかけられる存在とはSOSを受け止めてくれる存在だろう。助けを求めるとは、依存できるという少女の力を示している。と同時に少女からの悪態をSOSとして受け止める支援者の力を示している。双方の力が合わさったときにはじめてSOSは可能になる。甘えを通してSOSが発現しうる力、甘えをSOSとして受け止める力を「甘えのケイパビリティ」と名付けよう。甘えのケイパビリティは福祉が作動する一つの典型的な場面である。福祉の仕組みがあったとしても、実践する側に甘えを許す余裕がなければ、制度は機能しない。

Aさんの訪問事業はこのような母親たちを視野に入れて始まった。

2. ステップファミリー状の家族構造とそのサポート

○「甘えのケイパビリティ」と世代性

次の事例では親からのサポートは存在するが不足している家族構造のなかで、支援が入ることで甘え

のケイパビリティをどのように促進するのかという問いとなる。ケイパビリティが不足しがちな環境で、助産師は世代をまたいだサポートをする。

Aさん で、十代のカップルでね。そこも行っただんです。まあ同級生〔のカップル〕で妊娠して…。

で、私なぜか、そのカップルの、母方祖母といつか、おばあちゃん〔を知ってたんです〕。このお母さんを、私、ずっと〔前に〕、たまたまなんですけど、芦原病院で知ってたんです。芦原病院でこのお母さんが10代で、それで外来にしょっちゅう来てた人だったんですよ。不定愁訴がいっぱいあってね。それで、性感染症もあるし、妊娠中絶もあったかなっていう、そういう彼女がいてたんですよ。

で、そこで外来で、関わるようになって、困ったら外来にこう、来るんですよ。「風邪引いた」いうても産婦人科に来るわけ。ほんなら「それはこっちへ、あっちへ行ったらいいよ」とか言うて。来るわけですよ。困ったときに来るわけ…。で、その〔今は30代になった母親〕10代の人が1人ずつ、父親の違う子どもを3人生んでるんですね。それにも〔助産師として〕関係して…。

で、〔10数年後に娘が出産するので訪問したときに〕「あ、やっぱりここでまた出会ったね」ってなった。で、また4カ月まで〔訪問に〕行ったんですね。

10代の少女が出産するのをAさんはサポートするだけでなく、今30代の母親がかつて10代で出産したときにも、Aさんがサポートしていた。かつて母親は『『風邪引いた』いうても産婦人科に来る』ように、甘えをとおしてAさんにSOSを出していたのだ。

性感染症、人工妊娠中絶、不定愁訴は、それだけ

で母親がかつて困難な生育環境におかれ、不安定な人間関係と心理状態のなかにいたことを暗示している。ここがこの三世代の物語の出発点だ。

かつて社会から疎外されていた母親をサポートしたのがAさんたちだけだった。そのため他の人に頼ることができない母親は「困ったときに」来て甘える。そのSOSをAさんたちが受け止めていた。『『風邪引いた』いうても産婦人科に来る』のは甘えであるが、裏を返せばサポート不足ゆえの困窮である。しかし母親のSOSを出す力であり、かつ医療者側の受け止める力だ。そのおかげで母親はAさんのことを記憶にとどめ、それゆえ今度は今10代の娘が出産するときに支援が連続することになる。

ここでは10数年前と現在の場面がめまぐるしく切り替わるので言葉を補った。やはりここでも同じような出来事がくりかえされ、時間は進みつつも回帰する。そしてこの回帰はアトラダムな想起に表現されている。そして「なぜか」「たまたま」出会うという偶然なのだが、同時に「ここでまた」同じ出会いがくりかえされるのだ。

そして母親のSOSを受け止めたことはもう一つ大きな結果をもたらす。

Aさん でも私から見たら、最初すっごい、芦原病院で「あの子〔娘〕、大変やわ」って相談した人〔=30代の母親〕が、次行くとたびに、やっぱりすごくね、成長っていうかしっかりした母になっていくわけですよ。うん。で、すごい。何年も経ってから〔その人の娘の出産のために〕行くんだけど、いや、「すごい、お母さんになったね」って言って、ちょっと褒めたりするとね、「いやー、あのときに、芦原〔病院〕でね」とかいうのがポツと出てきたりするんですよ。

「普通やったら『こんなヤンキー来たわ』って言って〔医療者から避けられるけど、Aさん

たちは] こう〔敬遠〕するんじゃないくて、『どうしたの、どうしたの?』って言って、『何困ってんの?』っていう感じで〔接してくれるから〕、だから行けた』っていう話があったりして。

今〔30代になって〕その子が生むと決めて、で、その母は生むことを応援。まあ、「本人がそう言うんやったら応援するよ」って言って、生まれた赤ちゃんは、その母一家と共に暮らしてるんですね。だから、危険ではないんですよ…。

だから家族っていうのも最初に「あそこ大変やん」って保健師が言ったとしても、私絶対そうは思わないっていうか、『いやいや、行ってみんと分からへんわ』と思って行くんですけどね。

「あ、また出会ったね」っていうの、遠い宇宙から見たら、赤い糸じゃないか知らんけど、こうつながってるよっていう、宇宙のように、なんかつながって、また出会ってるみたいなんを、よく思った、思うことがあったんです。

省略が多い語りは10数年前の出来事と今の出来事が重なりあうことで圧縮していく様子を示す。そしてここでは複雑な家族構成が時間の圧縮のなかで生じている。出会いが重なって再会となったとき、かつて支援を受けた少女はピアサポーターへと成長している。つまり今度は自分が娘からの甘えというSOSの受け皿となる。甘えのケイパビリティは支援された人が次に支援する側になるという仕方で伝承され再生産されていく。おそらくこれは社会が集団として持つレジリエンスであろう。

「ヤンキー」に偏見を向けるのではなく「どうしたの、どうしたの?」と心配する構え、そして保健師が「大変やん」と言っている「行ってみんと分からへん」というのはすべて社会通念に潜む差別感

情をくつがえす態度である。逆に「行ってみれば分かる」という自信でもある。

風邪引いても産婦人科に来るような母親の甘えというSOSを、Aさんたちが『どうしたの、どうしたの?』って言って、『何困ってんの?』っていう感じで受け止めたことで、母親自身が子どもをサポートできる人へと成長している。

30代の母と再会した瞬間、Aさんは「この人は大丈夫だ」と直感したと、インタビューの3年後に私に語った。しっかりSOSを聞き届けることができたときには、いずれ支えられた側が支える側になっていく。つまり10代で子どもを産んだ人に問題があるわけではなく、甘えを許容しサポートする環境を誰かが準備できることでコミュニティーがうまく連続するのだ。

早い妊娠であり、さまざまな生活上の困難もあり、たしかに実母へ十分に甘えることはできないかもしれないが、しかし全体としては甘えのケイパビリティが保証されているので家族的な養育が成立しているのだ。困難な環境「だけど」(「だけれど」「やけど」)子育ての力があるのだ(逆接の接続詞は逆境のなかでのケイパビリティを示す)。

10数年の時間を隔ててAさんのはかつての少女が母親になった姿と出会う。「遠い宇宙から見たら、赤い糸じゃないか知らんけど、こうつながってる」。誰が誰をサポートするのはわからない。偶然出会った誰かに甘えることができることによって私たちは支えられている。しかし宇宙から見たときには赤い糸で必然的につながっていたと見えるかもしれない。親や子どもとの出会いに「赤い糸」という必然性を見いだせるとしたら、生は絶対に肯定されるべきものであり、絶対に子どもを救うことができるという強い意思と努力に裏打ちされているからだろう。幸運と努力によってさまざまなつながりが生まれたときに、それぞれの人の強さが発揮されていく。ニーチェの永劫回帰のように、生を肯定する偶然の

出来事と行為が反復される (Nietzsche, F.1883/84 [1953])。

この家族の場合、家族によるサポートは成立している。とはいえ甘えが不足しているのも事実である。不安定なパートナーシップにもとづく大家族であることそのものがメンバー一人ひとりを寂しくする (甘えのケイパビリティの不足)。つまり母親の養育能力の問題ではなく、家庭環境・社会環境が「寂しさ」を生み出す。そして「寂しさ」ゆえに早くセックスをし、パートナーを変えていく。こうして同じような「寂しさ」の環境を子どもの世代に再生産する。家族構造が甘えの不足を生み、甘えの不足が同じ家族構造を再生産する。

はっきりとした虐待がなかったとしても、たしかに傷と孤独のリスクではあり、サポートの必要がある。子どもたちは強さを持っているがそれは「寂しさ」と裏表の関係でもある。西成において要保護児童地域対策協議会、そして母子訪問はこの部分の弱さをサポートするSOSの引き受け場所としての役割を負う。家庭における甘えのケイパビリティの不足が地域における甘えのケイパビリティによって補われるのだ。

3. 愛着の記憶

しかしここまで描いてきた、困窮した環境のなかで甘えのケイパビリティを創り出す実践は、実は不幸にも亡くなってしまった子どもやその親も念頭に置いている。ある乳児の死について語った場面で本稿を終える。

Aさん その母も、若い、20歳ちょっとぐらいだけど、いずれ、まあすごく被虐待の人だから [連鎖するのではと] …。

村上 ああ、そうなんですか。

Aさん いずれXX [虐待をしてしまった親のための回復プログラム] に、そういう機会があ

れば、来ないといけない人になるだろうなっていう感じだったんです。

村上 そうなんですか。うん。

Aさん だけど、私は訪問事業で行くときはいつも、まあ、生後3、4カ月ですからね。赤ちゃんが生まれて3、4カ月の期間だから、そのお母さんが非常に、養育には大変だろうと思うけれども、その間は、その間はせめて「赤ちゃん生まれてうれしかったね」とか、「すごく頑張ったよ」という、ちょっとした、一瞬でもそういう味わったことをね、味わえるように、いきたいなと思って行ってるんですね。

だからその、赤ちゃん亡くなったって電話くれた人も、保健師に電話が来て、保健師にいわく、「Aさんにも、すごく、ここはよくできたねとか、ここは、このことは注意してねとか、いっぱい教えてもらったのに。よろしく言ってほしい」というか…、その短い期間でも、どういう形で亡くなったか、ちょっと分からへんけれども、子どものことを、成長は早い赤ちゃんだったから、とても喜んでたんですよ。

もう最初はすごく無表情で、すごい心配したんですけれども、毎週行ったら、表情が変わってきたし、自然に子どもとのやりとりがね、もう本当に自然にできるようになってたんです。

そういう、短い期間でも、『あのとき自分が子どもと一緒に楽しかった一瞬があったな』みたいな、「抱っこしてうれしかったね」とか、「おっぱいあげてうれしかったね」というような、思い出を古い記憶のなかに、赤ちゃんにもお母さんにも置いてほしいなと思って行ってるんですね。

長年にわたって母子訪問の経験があり、虐待をしてしまった母親たちのグループプログラムも行って

いたAさんは、この母子の未来に虐待のリスクがあることを意識しながら訪問していたようだ。

死について想起しているのであるが、ここで語られているのは亡くなった原因ではなく、どんな思いで母親が子どもに接していたか、Aさんがサポートしていたのかである。そしてAさんは2回にわたって『抱っこしてうれしかったね』とか、『おっぱいあげてうれしかったね』っていうような、思い出を古い記憶の中に、赤ちゃんにもお母さんにも置いてほしいな』と語っている。死についての語りのなかで、うれしかった思い出が残ってほしい、と語ることは少し不思議な印象を与える。

「抱っこしてうれしかったね」という思い出は、子どもが甘え、母親が甘えを可能にする環境を与えたという甘えのケイパビリティのかすかな記憶であろう。おそらくこのような甘えのケイパビリティのかすかな痕跡が、のちに養育困難な状況に陥ったとしてもSOSを出すことができるための土台になるとAさんは考えている。そしてこのかすかな甘えの記憶はAさんが訪問して母親を褒め勇気づけたことによって生まれている。つまり今の地域のなかでの甘えのケイパビリティによって可能になったものである。必要なときに支援者など周りの人に発せられるはずの间歇的なSOSを貫くのは通奏低音としての幼少期の甘えのケイパビリティであり、それを可能にするのは現在の訪問であるというように循環している。

しかし原因はなんであれこの乳児は亡くなっている。Aさんは子どもの力に対して母親が提供する甘えのケイパビリティも母親の力に対し支援者が母親に提供する甘えのケイパビリティももろいものであったということを痛感している。この両義性が死の想起のなかにうれしかった思い出の語りが挿入されるというポリフォニーを生んでいる。

ところでこの「抱っこしてうれしかったね」という思い出は、虐待による分離(あるいは死)によっ

て途切れてしまった親子関係のなかでそれでも残るつながりの記憶である。切断のなかに残るつながりの記憶は、「赤い糸」によって母親や子どもと支援者とが出会い、再会するという〈ばらばらなものをつなぐ糸〉の裏面であることになる。偶然の出会いと再会における甘えのケイパビリティの赤い糸は、「うれしかった思い出」という切断のなかにそれでも残る愛着の記憶(甘えの記憶)と対になるのである。

参考文献

- 土居健郎(1971)、『「甘え」の構造』、弘文堂
- 帚木蓬生(2017)、『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』、朝日新聞出版社
- Nietzsche, F. (1883/84 [1953]). Also sprach Zarathustra. Stuttgart: Kröner. ニーチェ(1967)、『ツァラトゥストラはこう言った』、水上英廣訳、岩波文庫
- Nussbaum, M. (2007). *Frontiers of Justice: Disability, Nationality, Species Membership* (The Tanner Lectures on Human Values). Belknap Press: Cambridge. マーサ・ヌスバウム(2012)、『正義のフロンティア: 障害者・外国人・動物という境界を越えて』、神島裕子訳、法政大学出版局
- Sen, A. (1992). *Inequality Reexamined*. Harvard University Press: Cambridge. アマルティア・セン(2018)、『不平等の再検討—潜在能力と自由』、池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳、岩波現代文庫
- Winnicott, D.W. (1971). *Playing and Reality*. London: Routledge. (ウィニコット『遊ぶことと現実〔改訂版〕』橋本雅雄訳、岩崎学術出版社、2016年)

キーワード：甘えのケイパビリティ

「甘え」を甘えとして受け止めてもらうことは、子どもの自己と他者への信頼感の基盤となる。甘えることができる子どもの力は、甘えを受け止めることができる周囲(親や支援者)の力と対になったときに成立する。双方がそろうことを「甘えのケイパビリティ」と呼ぶ。甘えのケイパビリティが不足した困窮した家庭においても、支援者が親や子どもの「甘え」をSOSとして受け止めることができれば、地域における甘えのケイパビリティが成立し、生存が可能になる。

Ⅲ 国内外の動向

「甘え」は Love me! のサイン —米国ソーシャルワーカーの視点から



ノーラ コーリ
海外出産・育児コンサルタント Nora Kohri

海外出産・育児コンサルタントとしてこの30年間、世界中の子どもを見てきた。特に注目してきたのは異文化の中で育つ日本人の子どもたちだ。私の両親は日本人だが、私は日本、アメリカ、カナダで教育を受け、大人になってからは日本、シンガポール、アメリカに暮らした(詳しくはCare the Worldのホームページ<http://www.caretheworld.com>を参照)。そして、二人の子どもたちをシンガポール、日本、アメリカで育てた。ソーシャルワーカーとして過ごしたアメリカではしょうがい者のデイサービスで10年ほど施設長を勤め、現在はアメリカの家庭支援センターで幼児虐待、家庭内暴力のケースを扱い、予防教育にも努めている。子どもとのよい関係の築き方を提案したり、夫婦関係を円満に保つためのスキルを教えたり、怒りの感情をコントロールするノウハウなどを指導している。

〈甘えということば〉

そのような背景からまずは私なりの「甘え」についての解釈。「甘え」とは「愛してほしい」「認めてほしい」「気づいてほしい」「安心がほしい」という人間の基本欲求に対して、その欲求が真っ向から求められないと察したときに、少しばかりのためらいを含めて、その愛情を求めようとする行為。つまり「甘え」は愛情を求めための手段とも言える。しかも、子どもは愛情を与えてくれる対象者にまず

「私も愛してる」(extend love)と示し、「私を愛して」(Love me)と寄り添う。それは愛情を相手へ示してから受けるという相互行為とも言える。

〈甘えは子どもを視点とした発想〉

英語には「甘え」にぴったりとした単語が存在しないということに気づく。それでもそれに近いことばは、seek affection、seek attention、seek love。この表現は子どもを視点とする。つまり子ども側からこれらのaffection、attention、loveを求めるといふ表現だ。しかし、ことばとしては存在するものの、一般的に使われる言い回しではない。

それではどのように実際使われているかと言うとgive affection、give attention、give loveが定着している。これらは親の視点からの表現である。つまりアメリカでは愛情は親が積極的に子どもに与えるもの(give)で、子どもが親に求めるもの(seek)ではないという観点に立つ。

それは「子育て」ということばからもわかる。日本で「子育て」と呼ぶのは子どもを中心に考えるからだ。それに対してアメリカではparentingという。子どもの育成にかかわる親として育つということ。だからこそ子育てに関しては親の視点からの表現がよく使われる。

それでは日本ではなぜ「甘える」という行為が注視されるのだろうか？なぜ「甘え」を通して求め

ないと愛情をもらえないのだろうか？

〈アメリカ人からみた愛情の大切さ〉

アメリカでは「愛情」を日常生活の中でことばと行動で表す習慣がある。それはキリスト教の「愛」に基づく精神が根底にあるからとも言える。子どもたちが常に愛情が注がれている環境にあることを親は意識している。それは愛情を注いで育てれば子どもたちに自信が付き、勉強への意欲も増し、コミュニケーションも円滑で、精神的にも安定すると信じているからだ。アメリカでは特にSelf-esteemへの影響が大きいとされている。Self-esteemとは自己肯定感、自分が自分でいられることに対して堂々としていられる気持ち、自分のことを大切に思え、自分のことを「好き」とありのままの自分を受け入れること。2010年のDuke University Medical Schoolの研究*では愛情をたっぷり受けて育った子どもは大人になってから幸せで、困難を乗り越える力を備え、不安感が少ないということがわかった。さらに、それは愛情を注がれることで脳も発達するからだという研究結果を発表した。

逆に愛情を十分に受けずに育った子どもは自信がなかったり、孤立感が強かったり、反社会的であったり、敵対心が強かったり、攻撃的であったりするという。当然、人との関係もうまく結べないという特徴も出た。

それではアメリカ人はどのように愛情を表現しているのか？ 本当に日本人と比べて「甘え」という行為が少ないのだろうか？

*ジョアンナ・マセルコ教授率いる研究チームは、母親と子どもの相互作用に着目。平均34歳の成人482人を対象に、幼少期と青年期の記憶について90項目の質問を通して成人後のメンタルヘルスとの関連を総合的に評価した。その結果、スキンシップを伴う愛情を十分に受け、要求に適切に応えられて育った子どもは幸せで、困難を乗り越える力を備え、不安感を抱くことが少ない大人として成長したということがわかった。子どもは愛情を注がれることで脳も発達。子どもも大人も愛されていると感じ、そこに

心のつながりが生まれると脳から発生するオキシトシンという物質が親子の絆を深め、信頼関係と支え合う関係が育まれるという。この絆が強まることでオキシトシンはさらに生産され、子どもはよりいっそうポジティブな感情を表現するようになるのではないかと報告されている。さらに教授は、母親が乳幼児にどのように接していたかを観察するだけでもその子どもの将来の精神的な健康を予測できると語っている。

〈愛情表現—日米の違い〉

アメリカ人の子どもたちも当然「甘える」という行為を通して足りていない愛情を満たそうとする。その必要な量といい、いつそれが必要かが、親からの愛情の供給とよくバランスがとれているように見える。それはアメリカ人の「愛情」を表すことへの意識の高さにあるようだ。日本の文化の中では愛情は求めないとなかなか得られないことに対し、アメリカの文化では与えられることが当然で、求めることのほうが少ないところにあるのではないだろうか。

○ことばで愛情を伝える

日本の「以心伝心」とはことばに出さなくても相手に自分の微妙な気持ち、ニュアンス、意図が伝わることを指す。これは日本が島国で単一民族であるがゆえに通用する。同じように教育を受け、同じような文化の中で育てられるからだ。ことばがなくても相手が自分の意図を察してくれるというたいへん便利なコミュニケーションだ。

それが愛情の伝達においても反映される。たとえば「愛している」「結婚したい」とことばで伝えなくても、「デートに誘った」とか「二人の将来を話した」といった行動で理解する文化だ。それが親子間でも表れる。日本人の親は今まで子どもに対して「愛している」ということばかけが少なかった。そのようなことは言うに及ばず、当然のことと互いにわかっているだろうという考え方からだ。さらにはあからさまに愛情を口に出して表現することを「美」としない習慣からだ。しかし、子どもは未熟なゆえ、

ことばで言われ、行動で示されなければ愛情を確認できない。そうした状況の中で子どもは「甘え」を通してなら親の愛情を確認できると習得したとも考えられる。

それに対してアメリカは多種多様な価値観で溢れている。相手が何を頭で考えているか、ことばで伝えなくてはわからない。「愛している」ということも例外ではない。表現も豊かで、頻度も高く、家庭内であろうと、電話口でさえもことばに出す。子どもは親からの愛情を常に確認できている状態が保たれている。

まずは子どもの呼び方。子どもを「ちゃん」付けで呼ぶ時、そこに愛情を感じる。アメリカにもRobertがBobbyに変わるような「ちゃん」付けに似たような呼び方がある。しかも、そのように呼ばれる期間が比較的長い。日本では小学校に上がると「～さん」に変わるのが一般的だ。さらに“Good morning, my pumpkin”といった愛称で呼ばれると、そのたびに子どもは親からの無条件の愛を感じる。

次にI love youということばだ。寝る前、別れ際には必ず最後のことばとして添えられる。言われた側は必ずI love you, tooと返事を返す。愛する人宛ての手紙やカードの最後にも必ずと言ってよいほどLove, ○○○と名前をサインする。周辺にXOXOと書けばhugs and kissesを意味する。これも愛を確認することばだ。日本でも最近でこそ「～ちゃん、大好きだよ」とことばで伝えるようになった。それは日本でもことばに出すことの大切さが見直され始めたからかもしれない。

そしてほめことば。アメリカ人は大げさなほどに自分の子どもをほめる。ほめるときは単にことばだけでなく、抱きしめるなどの行為がセットだ。日本では自分の子どもをほめることは「自慢」しているように受け止められる。それは日本では自分の子どもは自分の一部としてとらえられ、自分をほめることは他人からあまり快く思われないからだ。アメリカ

カではどれほど小さくても自分の子どもは親から独立した一人とみなす。そのため、他人をほめる感覚で自分の子どものよい行いを認め、ほめる。認めるというのも愛情だ。子どもは認められて自信がつき、自立へ向かう。

○愛情を行動で示す

ことばで愛情を表現することが極めて少ない日本の文化ではどのように愛情を子どもに伝えてきたのだろうか？ それは肌と肌のふれあいを通してではないだろうか。日本の文化では肌が触れ合う行為はどちらかというタブー視されているが、おんぶ、添い寝、そして家族風呂に限っては生活の中での自然な営みだ。昔、日本の赤ちゃんは働く母親の背中であぐらをかき感じて育った。そこには愛情が感じられ、安堵感があった。添い寝でも子どもは親をとて近く感じながら安心して眠りについた。風呂ではからだを洗ってもらったり、拭いてもらったりしてスキンシップが交わされた。そして子どもたちは大家族の中でもまれて育ち、たくさんの人から十分に愛情を受けて育った。小さな子どもはいつも誰かに抱っこされるなど愛されてきた。あえて「甘える」必要はなかった。

しかし、欧米の文化が取り入れられる中でおんぶがベビーカーに変わり、添い寝が子ども部屋に変わり、風呂はシャワーに変わった。核家族化され、人との関わりが減り、子どもたちに愛情が注がれる機会が減っていった。からだでぶつかりあうけんかはことばに置き換えられた。このように肌の触れ合いが減る中で子どもたちは「甘える」ことを通して足りない愛情を埋め始めたのではないだろうか。最近になってハグとかギョッがこれだけ盛んに行われるようになったのはその表れなのかもしれない。

アメリカには添い寝の習慣はない。車での移動で子どもはチャイルドシートに固定される。親が目を離さなくてはならないときには playpen (囲い) に

入れられる。親は子どもといっしょにバスタブに入ることではない。日本と比べるとアメリカはスキンシップが少ないように見える。しかし、彼らはことあるごとに子どもへの愛情(affection)を示す。

まずアメリカはハグとキスの習慣がある。ハグにしても中途半端な触れ合いではなく、相手を締め付けるほど力強く抱きしめる。それは朝起きた時から始まり、別れ際と再会のたびに交わされる。学校からの帰宅後は愛情というエネルギーが一番減っている。子どもは特に「甘え」の行動をその時示すのはそのためだ。1日の終りの就寝時にも行われ、キスとハグはセットだ。ほめるときも抱きしめ、叱ったあとも子どもを抱きしめる。この愛情表現はまさしく親から子へ送られる。子どもにとっては精神安定剤でもある。

子どもが愛情が不足していると感じたり、不安を感じ安心を得たいと感じたりしたときは「ハグほしい」と口で伝えたり、「甘え」を通して愛情補給を求める。それは赤ちゃんがおなかを空かせたときに泣いて母乳なりミルクを要求し、身近にいる大人がそれにすぐ応えるように、愛情も要求に応じて与えられるのが理想だ。つまり「甘えたい」ときに「甘えられる」人が親を含め子どもの要求に応えられる誰かがいる環境が望ましい。子どもを愛している者がその子どもが常に愛情に満たされているかを意識し、子どもの要求に応じて愛情を注げば十分だ。そのため、アメリカでは多くの人との交わりの中で子どもが育つように、親子が孤立しないように努めている。子どもが心身ともに健康に育つには、「十分すぎるほどの愛情が必要」という観点からはどの国の子どもも同じだ。ただし、日本の子どもは「求め」なくてはならない状況が増えてきたのかもしれない。

〈上下関係を意識した日本の習慣〉

第一子の口からよく「甘えたくても甘えられなか



しっかり抱きしめられて満足

©Nora Kohri

った」「愛された実感が無い」と聞く。ほかにも、「妹みたいにお母さんに甘えたかった」、「弟がうらやましかった」、「お兄さんかお姉さんがほしかった」、「お母さんのひざにすわりたかった」、「お母さんに抱きしめられた記憶がない」など。それではなぜそのような欲求が第一子は満たされないのだろうか？

日本は上下関係を軸とした文化がある。きょうだいの中では誰が先に生まれたかが重要だ。先に生まれた者は「長男」「長女」と言われ、それなりの役割がおのずと期待される。特に長男は男の子ということも重なって、「お兄さんなんだから」「男の子は泣かないの!」と言われ、まだ愛情が必要な時期に「甘えたい」「認められたい」という願いにブレーキをかけ、ただひたすら親の期待に応えようとする。

一方、アメリカではきょうだいの間でも男女の間でも上下の差をつけない。それはきょうだい間でファーストネームで呼び合うことにも表れている。親も周りの人たちも子どもたちの生まれた順番をさほど意識せず、分け隔てなく求められるままに愛情を与え、「甘え」を拒むことはない。

〈甘える環境に欠ける子どもたち〉

きょうだいが多い子ども、養護施設の子どもの、ネグレクトされた子どもの中には他人に甘える行動が時折見られる。甘えても応えてもらえないとさらに気を引こうといたずらや問題行動に出る。明らかにその予防となるのは子どもとの時間を増やすことだろう。ケアにあたっている者はなるべく子どもと1対1の時間をもうけ、抱きしめたり、抱っこしたり、ひざに座らせるなどの触れ合いと共にことばでも愛情を伝えることが手立てとなる。

アメリカでは保護を必要とする子どもたちに対し、愛情が保たれるように以下のような考慮がなされている。どこで一時保護をするかの選択基準をまず子どものニーズに当てる。ニーズはさまざまなため多種多様な保護先が選択肢として用意される。さらに施設よりは親戚、あるいは近隣の友人宅など家族と関係のある家庭を探す。次に里親を考える。もちろん、迎え入れた家庭への支援は欠かさない。この間、親の更生プランを迅速に立て、親子分離期間を最低限にする。最終的に養子縁組だが、それもまずは親戚の間で探す。きょうだいは極力引き離さない。しかし、何よりも、子育てに奮闘し、迷う親へのサポート体制を強化することが子どもたちを家庭に留めるもっとも望ましい対策になる。

〈自分の過去を振り返って〉

私は西洋の環境の中で東洋の育て方で育てられるという極めて混乱した「愛情」のもとに育った。アメリカ人の友達がみんな親に甘えている様子をうらやましく思いながら、私は「お姉さん」だからと甘えられず、その気持ちを抑えて育った。その弊害に気づき、満たされなかった空白を埋めようとした。ようやく今になって大正生まれの父はしっかりと抱きしめ返してくれるようになった。私も電話を切る際に必ずI love youと英語で伝えている。失われたものを今はもう親からは求めない。今、私にできる

ことは自分の愛情を親に伝えることだ。I love youというたびに自分の心は癒やされていく。人は必ず足りないものを埋めようとする潜在能力があるから、満たされなかった愛情は自分で埋めていくことができる。そのように信じることで希望を見いだせる。

子どもは愛情 (love, warmth, affection, and support) なくしては育たない。子どもにとって愛情は食べ物同様、脳と心とからだに健康に育つための必要な栄養だ。子どもたちはその愛情がいかに自分の生存にとって必要不可欠であるかを本能的に知っている。そのため、子どもたちは愛情が足りないと感じるとその分を満たそうとする。そのアプローチが「甘え」なのだ。それを理解した上で、子どもをケアする者はその子のニーズに応じてほしい。「甘え」は彼らからの“Love me!”のサインであるからだ。

キーワード：Self-esteem

esteem = 尊敬、尊重の意で、Self-esteem は日本語の「自己肯定感」に当たります。ただ、その意味合い(成り立ち)は日米で若干異なるようです。米国では、人前で自分の考えを主張する、独自性の強い考えを表現するなどの訓練を通して、そして認められ、褒められることで得られます。一方、日本では謙遜な姿勢や協調性が尊ばれ、出る杭は打たれます。このような環境では Self-esteem はなかなか育ちません。Self-esteem を得ることができれば、自分に自信があるので人の意見に左右されない自由で幸福な人生を選べます。Self-esteem とは自分は愛されている、自分は認められている、自分が好きといった確信です。その結果、人との関係もうまく結ぶことができ、自分に与えられた生きる目的が明らかになり、満足した人生を送ることができるのです。

編集後記 「甘え」を再考することの大切さ

「(〇〇ちゃん)もっと甘えてもいいよ」「(〇〇先生、それは)甘やかすすぎでは？」—社会的養護の現場では、入所まもない子どもへの気遣いや養育者同士の養育感の違いからこんな言葉が交わされます。そして、「甘え」はあまりに普通すぎて、深く考えられることはありません。私自身がそうでした。

その、空気のような「甘え」について一度立ち止まって考えてみよう、そのため、あえて「甘え」の定義を固定しない、という編集方針のもと本号は組まれています。それは本号がまとまりに欠けるものになるのではという懸念をも含んでおりましたが、寄せられた原稿を読むと、一つひとつが奥深く、おもしろくて、次々と読み進めておりました。

はっと気づかされる一文がありました。里親さんの言葉…「(満身創痍で我が家にやってきた)子どもが甘えを表現できるようになったときは、やった!!と心が大きな叫びを上げる」(P.22)—子どもの初めての「甘え」に、親であることの喜びと自覚、そういうものを濃淡や時間差はあっても誰しもが感じたはずです。そのことに気づいた時、何か温かで

懐かしいものが私の中に押し寄せていました。

それがいつの間にか「甘え」は、「勤勉」や「頑張り」、「自立」と対立するもののように扱われるようになりました。まるで悪者扱いのように…。でも、『「甘え」がなくなる、『甘える』ことができない』といった社会や個人を考えると、「甘え」の大切さが改めて身に染みます。社会的養護に繋がる子どもや若者が、甘えないで頑張った後には何があるのでしょうか。また社会的養護に限らず、「甘え」という切り口で社会を見回してみると、「勤勉」や「頑張り」、「自立」が強いられている私たちは、どこに向かわされているのかといった、さらにその先も見えてきそうです。

深みのある原稿を提供してくださった執筆者のみなさま、新旧編集委員のみなさまに、改めてお礼を申し上げます。



担当編集委員 岩田美香

次号のお知らせ 第87号特集「関係形成が困難な親とその子どもの支援」(予定) 2020年4月1日発行

〔編集委員長〕

早川 洋 社会福祉法人 慈徳院
こどもの心のケアハウス 嵐山学園 園長

〔編集委員〕

岩田 美香 法政大学現代福祉学部 教授

澁谷 昌史 関東学院大学社会学部 教授

都留 和光 社会福祉法人 二葉保育園
二葉乳児院 施設長

林 浩康 日本女子大学人間社会学部 教授

南山 今日子 子どもの虹情報研修センター 研修部 係長
臨床心理士

白岩 哲明 (公財)資生堂社会福祉事業財団
常務理事 事務局長

(敬称略・五十音順) 編集事務局:藤村眞優美 編集制作:吉住祥一

MOTHER AND CHILD
WELLBEING
AROUND THE WORLD

VOL.86 2019-10 世界の児童と母性

年2回発行

2019年10月1日発行

編集・発行者

公益財団法人 資生堂社会福祉事業財団

〒104-0061 東京都中央区銀座7丁目5番5号

電話 03-3574-7408

ファクシミリ 03-3289-0314

URL <https://www.zaidan.shiseido.co.jp/>

印刷所 成旺印刷株式会社

〒101-0047 東京都千代田区内神田2丁目14番6号

MOTHER
AND CHILD
WELLBEING
AROUND THE WORLD

公益財団法人 資生堂社会福祉事業財団
